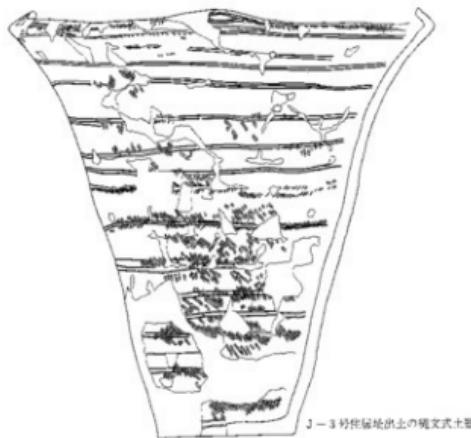


横俵遺跡群 I

1990

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

横俵遺跡群 I



J-3号住居跡出土の埴文式土器

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

卷頭図版 1



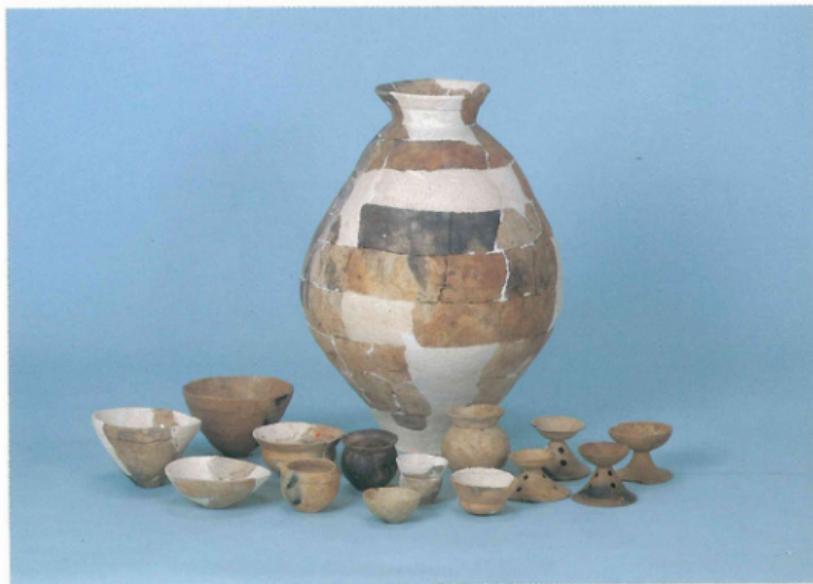
1. 赤城山と横俵遺跡群



2. 横俵遺跡群全景



1. 横俵遺跡群出土の縄文式土器群



2. 横俵遺跡群出土の土師器群

はじめに

前橋市は群馬県のほぼ中央に位置しています。今では水と緑と詩のまちとうたわれ、また、遠い昔より関東平野を一望できる雄大な赤城山を背に、坂東太郎で名高い利根川の恵みに接した豊かな自然と、古の人々が織りなした特色ある文化が形成されてきた美しい県都であります。

古墳文化の時代には数多くの古墳が築造され、強大な権力をもつ一大政治文化圏が形づくられました。続く律令政治の時代に入ると、元総社に上野国府が置かれ、山王麻寺、國分二寺が立ち並ぶ「東国の奈良」と言わしめ、さらに近世には、「関東の華」と言われた廃橋城とその城下町、そして近代に至っては生糸の主要生産地として繁栄を生み出してきました。

市の東部にある城南地区は文化財の宝庫であり、特に大室を中心とした地域には市内でも最大規模の古墳群が分布しています。あたりは田畠の広がる純農村地帯でしたが、近年、各種団地造成、公園整備事業等の公共開発が激増し、今後大きく変貌する地区といえます。

このたび前橋工業団地造成組合による城南地区における開発計画があり、発掘調査をする運びとなりました。調査によって、今から5,000年前の縄文時代前期の住居址が発見され、この地にはこの頃から人々が立ち並び、大自然の中で躍動する人々の生活の跡が確認されました。さらに、1,500年前の古墳時代になるとたくさんの家や古墳が造られ、古墳の周辺ではお祈りをしたり、豊作を祝ったお祭りが行われていたかもしれません。

現状のまでの遺跡保存は無理でありましたが、今後、調査にともなう幾多の遺物等や記録資料に検討を加え、社会教育、学校教育の場に充分活用していく所存であります。

最後に発掘調査・遺物整理を円滑に進められたのは、前橋工業団地造成組合をはじめとする関係機関や各方面の方々の御配慮の結果といえます。また、本報告書が、埋蔵文化財に対する理解を深めるとともに、斯学の参考になればいいわいと存じます。

平成2年3月20日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 二瓶益巳

例　　言

1. 本報告書は、前橋工業団地造成組合（管理者 清水一郎）が造成する荒砥工業団地に係る横
　　傍遺跡群発掘調査報告書である。
2. 遺跡群は、群馬県前橋市西大室町57-2番地ほかに所在する。
3. 調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が前橋工業団地造成組合と委託契約を締結し実施した。
　　調査担当者および調査期間は以下の通りである。

　　発掘・整理担当者　駒倉秀一　都所敬尚（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）
　　試掘・発掘調査期間　平成元年4月26日～平成元年11月30日
　　整理・報告書作成期間　平成元年12月1日～平成2年3月20日
4. 本書の原稿執筆・編集は駒倉・都所が行った。
5. 出土遺物の鑑定は井上唯雄氏（勢多郡東村立果小学校校長）、石器石材の鑑定は飯島静男氏（群馬地質研究会員）の手をわざわせた。
6. 発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課収蔵庫で管理されている。

凡　　例

1. 採図中に使用した北は座標北である。
2. 採図に、建設省国土地理院発行の1/20万地形図（宇都宮）と1/2.5万地形図（大胡）を使用した。
3. 本遺跡群の略称は次の通りである。
　　63・1 E 14…大道遺跡、1 E 17…中横傍遺跡、1 E 18…上横傍遺跡、1 E 19…熊の穴遺跡、
　　1 E 21…大久保遺跡
4. 各遺構の略称は次の通りである。
　　J…縄文時代の住居址、J D…縄文時代の土坑、H…土師器使用の住居址、M…古墳、
　　I…井戸、D…土坑、W…溝、O…落ち込み（風倒木痕）、K…炭窯址
5. 遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。
　　遺構　　住居址・土坑・井戸…1/60、古墳…1/100・1/240、全体図…1/400
　　遺物　　土器・石器…1/3、一部の土器・石器…2/3、1/4、1/6、1/8
6. スクリーントーンの使用は次の通りである。
　　遺構平面図　　焼土…点、堅緻面…斑
　　遺物実測図　　炭化物…斑、須恵器断面…黒塗

目 次

はじめに

I 調査に至る経緯.....	1
II 遺跡の位置と環境	
1 遺跡の立地.....	3
2 歴史的環境.....	5
III 調査の経過	
1 調査方針.....	8
2 試掘調査.....	10
3 調査経過.....	11
IV 遺跡の調査	
1 中横俵遺跡.....	23
2 大久保遺跡.....	24
(1) 平安時代の遺構と遺物	
3 上横俵遺跡.....	26
(1) 縄文時代の遺構と遺物	
(2) 古墳時代の遺構と遺物	
4 熊の穴遺跡.....	27
(1) 縄文時代の遺構と遺物	
(2) 古墳時代の遺構と遺物	
(3) その他の遺構と遺物	
5 試掘調査.....	47
(1) 試掘A区	
(2) 試掘B区	
V 成果と問題点.....	48
1 まとめ	
2 赤井戸系土器	

図 版

口絵 1 赤城山と横俵遺跡群

口絵 3 熊の穴遺跡出土遺物

口絵 2 横俵遺跡群全景

口絵 4 熊の穴遺跡出土遺物

PL. 1 横俵遺跡群全景

3 熊の穴遺跡 繩文時代の住居址

5 熊の穴遺跡 繩文時代の遺構

7 熊の穴遺跡 古墳時代の住居址

9 熊の穴遺跡 古墳時代の遺構

11 熊の穴遺跡 M-1号墳

13 繩文式土器群・土師器群

15 繩文式土器

17 繩文式土器

19 繩文時代の石器

21 繩文時代の石器・古墳時代の遺物

23 古墳時代の遺物

PL. 2 熊の穴遺跡全景

4 熊の穴遺跡 繩文時代の住居址

6 熊の穴遺跡 古墳時代の住居址

8 熊の穴遺跡 古墳時代の住居址

10 熊の穴遺跡 M-1号墳

12 その他の調査区

14 繩文式土器

16 繩文式土器

18 繩文時代の石器

20 繩文時代の石器

22 古墳時代の遺物

24 平安時代の遺物

挿 図

頁

Fig. 1	横俵遺跡群表采遺物分布図	1
3	横俵遺跡群位置図	4
5	グリッド設定図	9
7	横俵遺跡群標準土層図	12
9	熊の穴遺跡古墳時代面全体図	17~20
11	大久保遺跡全体図	24
13	大久保遺跡 H-2号住居址	62
15	熊の穴遺跡 J-2号住居址	64
17	熊の穴遺跡 J-4号住居址	66
19	熊の穴遺跡 繩文時代土坑(2)	68
21	熊の穴遺跡 H-2号住居址	70
23	熊の穴遺跡 H-4号住居址	72
25	熊の穴遺跡 H-6号住居址	74
27	熊の穴遺跡 H-8号住居址	76

頁

Fig. 2	横俵遺跡群の位置	2
4	横俵遺跡群周辺遺跡図	6
6	調査経過図	11
8	熊の穴遺跡繩文時代面全体図	13~16
10	試掘B区トレンチ概況図	21~22
12	大久保遺跡 H-1号住居址	61
14	熊の穴遺跡 J-1号住居址	63
16	熊の穴遺跡 J-3号住居址	65
18	熊の穴遺跡 繩文時代土坑(1)	67
20	熊の穴遺跡 H-1号住居址	69
22	熊の穴遺跡 H-3号住居址	71
24	熊の穴遺跡 H-5号住居址	73
26	熊の穴遺跡 H-7号住居址	75
28	熊の穴遺跡 H-9号住居址	77

Fig. 29	熊の穴遺跡 H-10号住居址	78	Fig. 30	熊の穴遺跡 古墳時代土坑(1)	79
31	熊の穴遺跡 古墳時代土坑(2)	80	32	熊の穴遺跡 その他の遺構	81
33	熊の穴遺跡 M-1号墳(1)	82	34	熊の穴遺跡 M-1号墳(2)	83
35	熊の穴遺跡 M-1号墳(3)	84	36	縄文式土器(1)	85
37	縄文式土器(2)	86	38	縄文式土器(3)	87
39	縄文式土器(4)	88	40	縄文時代の石器(1)	89
41	縄文時代の石器(2)	90	42	縄文時代の石器(3)	91
43	縄文時代の石器(4)	92	44	縄文時代の石器(5)	93
45	縄文時代の石器(6)	94	46	縄文時代の石器(7)	95
47	古墳・平安時代の遺物	96	48	古墳時代の遺物(1)	97
49	古墳時代の遺物(2)	98	50	古墳時代の遺物(3)	99
51	古墳時代の遺物(4)	100	52	古墳時代の遺物(5)	101
53	縄文包含層の遺物分布	102	54	縄文時代住居址の遺物分布	103
55	古墳時代住居址の遺物分布	104	56	古墳・平安時代住居址の遺物分布	105

表

	頁		頁		
Tab. 1	周辺遺跡一覧	7	Tab. 2	縄文時代の石器一覧	34
3	縄文時代の石器石材一覧	34	4	石器種別石材構成	35
5	縄文時代の石器観察表	52~54	6	古墳・平安時代の遺物観察表	55~60

I 調査に至る経緯

発掘調査は前橋工業団地造成組合（管理者 清水一郎）から依頼された仮称荒砥工業団地予定地の約55haを対象とし、昭和63年度に立案された。開発区域がきわめて広大であるため、当時の前橋市教育委員会文化財保護室では、遺跡の範囲や内容を把握するために表面調査を行った。踏査は、既刊の遺跡台帳・上毛古墳縦覧等の照合、検討を行なながら、耕作地一筆毎を1区画とし、その結果を地籍集成図(1/2,500)に記入する方法で実施した。さらに、表探遺物を種類、時期、数から分類し、これに基づき散布範囲と時代別遺物分布図を作成した。

この遺物分布区域図がFig. 1である。分布の濃淡については、便宜的に100片までを散布地、それ以上を濃密散布地ととらえた。また、上毛古墳縦覧に記載されている古墳が遺跡群内の上横俵・熊の穴の丘陵に多いことがわかる。さらに、遺物分布状況を見ても古墳群周辺が特に密になっており、その周辺は同時期の遺構が存在する可能性が非常に高い地域であると考えられた。

調査区内の水田、牧草地、削平客土のあった場所等の実地踏査は無理だったが、昭和61年度に荒砥北部土地改良事業に伴う発掘調査で、隣接する地域での調査が実施されているため、この成果も加味して遺跡状況を把握した。これらの結果から、本調査地の約70%が遺跡地である可能性が高いと予想された。

早速、このような調査地内の遺跡状況を前橋工業団地造成組合に回答した。そして、その後の協議・調整の結果、時間的節約等のため昭和63年度に開発優先順位の高い地区の試掘調査を実施する運びとなったが、同年度の調査については、他の公共事業に伴う発掘調査の依頼がすでにあげられていたため、直営で試掘調査を実施することは困難であった。そこで、試掘については市教育委員会の指導のもとに、山武考古学研究所及びスナガ環境測設に委託することになった。

平成元年度の調査は、市道5・5・6号線をはじめとする主要幹線道路を前橋市教育委員会の内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団が直営で担当し、昭和63年度に民間委託により試掘調査が実施された部分については、引き続き上記民間発掘機関により本調査が実施された。

また、同年7月に仮称荒砥工業団地予定地はプラス株式会社により全面買収され、プラスランドと命名されたことが発表された。

なお、本遺跡群の名称については、荒砥工業団地造成予定地の大部分を占める旧地籍の字名を採用し、横俵遺跡群とした。したがって、遺跡群の名称は便宜的な造成事業区域に限定して用いているため、今後名称の検討を必要とする。

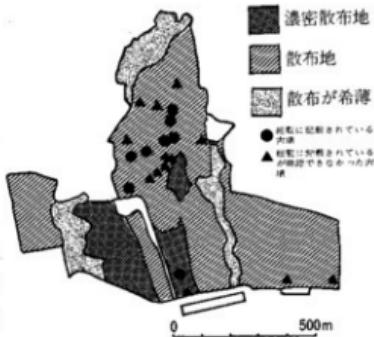


Fig. 1 横俵遺跡群表探遺物分布図

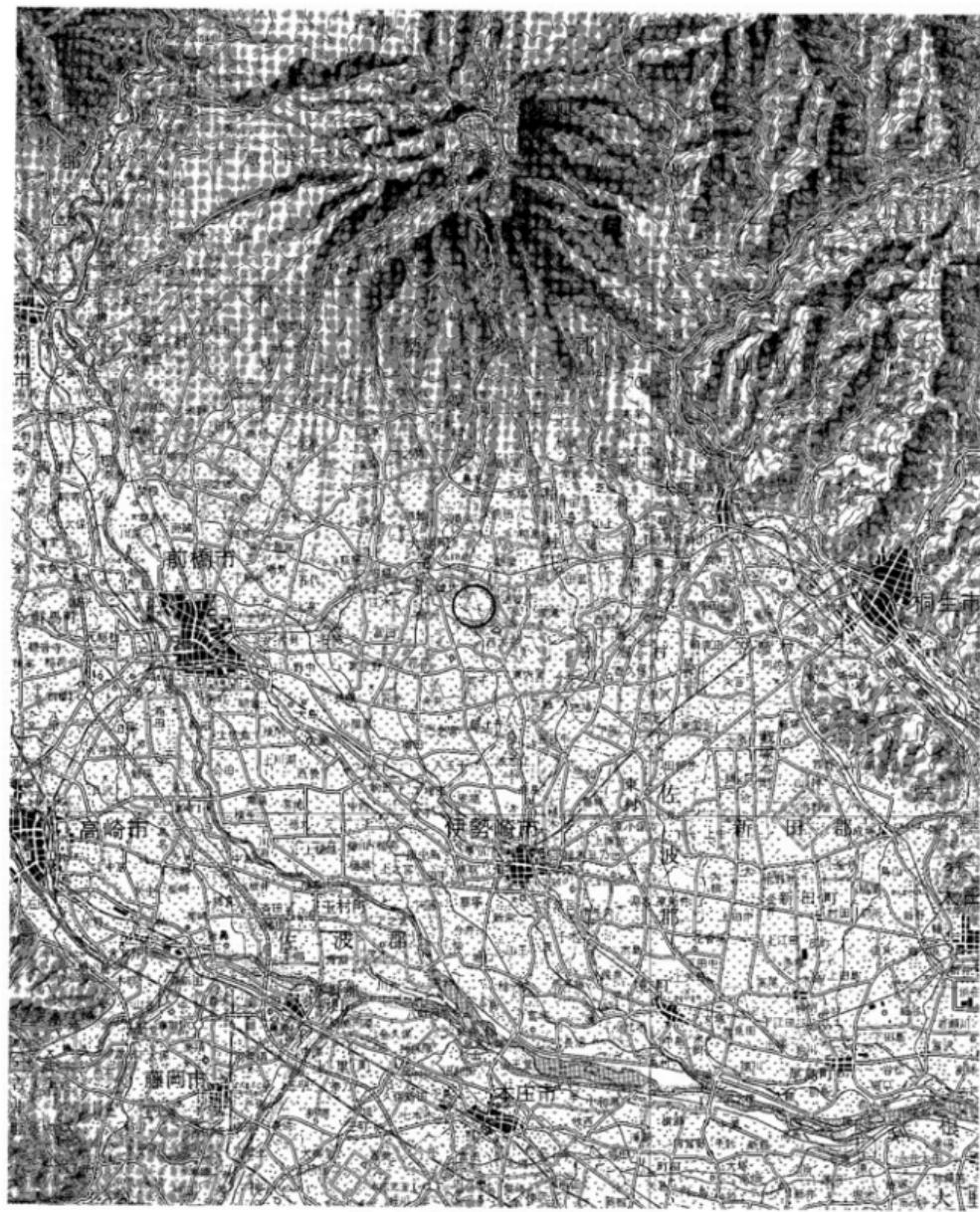


Fig. 2 横依遺跡群の位置 (1/200,000)

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

横浜遺跡群は前橋市西大室町字熊の穴・上横浜・中横浜・大久保、下大屋町字上諏訪山・大道に所在している。前橋市の市街地からは東へ約9kmの位置にあり、東西約1.2km、南北約1km、面積約55haという広大な範囲に及んでいる。遺跡群の周辺には、西方約500mに主要地方道伊勢崎・大胡線が南北に、北方約500mには主要地方道前橋・大間々・桐生線が東西に走り、間近に大胡警察署を望むことができる。また、上毛電鉄桶越駅・北原駅へは約1kmの近距離にある。すなわち、北は大胡町、東は柏川村に接する、前橋市の北東端とも言える場所に立地している。

本遺跡群の所在する地域は、地形地質上、赤城火山斜面と呼ばれる赤城山南麓のなだらかな斜面上にある。この斜面は、第四紀洪積世に活動を始めたと考えられている赤城火山の火山碎屑物・火山碎屑岩が主たる構成要素であり、それらの上を赤城・榛名・浅間山等の諸火山によって噴出された火山灰が風化し形成したローム層が厚くおおっている。本遺跡群内の台地部分の地層も比較的わかりやすく堆積しており、As-B・As-C等を含む黒土層の下に、As-YP・As-SP・As-BP・暗色帶・AT・Hr-HP等が順を追って確認された。

赤城火山斜面上には多数の中小河川が南下しているため、河川の開析によって発達する舌状台地、土砂の流下による沖積地、棚野扇状地を発達させている。本遺跡群を東西に二分する神沢川も過去に幾度かその流路を変え、氾濫を繰り返していたと思われる形跡が遺跡群内の沖積地で認められた。その多くはローム層が水成堆積しており、過去においては低湿地であったと思われる。

本遺跡群は台地部分と低地部分に大きく二つに分けることができる。台地部分の後期古墳群である上横浜古墳群を擁する上横浜・熊の穴、柏川村から西に延びる斜面上の大久保の二つである。低地部分は横浜沼から南西に広がり、さらに南に向かい傾斜も一段と緩やかになって水田地帯へとつながっている。このため、標高は最頂部で165m、最低部で137mを測る。

周辺地域では河川の流量が比較的少なく流速も早いため、昭和初期に着工した大正用水に見られるような人工の用水路、八光沼・横浜沼のような溜池・沼等の灌漑施設は古くから発達していたと考えられる。ただ、本遺跡群付近は比較的高塩化した土地であるため、現況では桑畠が高い割合で分布し、一大養蚕地となっているほか、果樹園、野菜畠等にも広く利用されている。

今回の調査区は、荒砥工業団地造成予定地内の主要幹線道路部分である。非常に細長い調査区であったために、各遺跡の範囲を明確に把握することはできず、遺跡群内の各遺跡の呼称をつけるまでには至らなかった。また、今回の調査では、台地部分の熊の穴遺跡から縄文時代及び古墳時代の集落が検出されたが、低地部分からの遺構の検出はなく、人々の生活の匂いはなかった。過去における地形の変遷や環境の変化に起因するためであろうか。

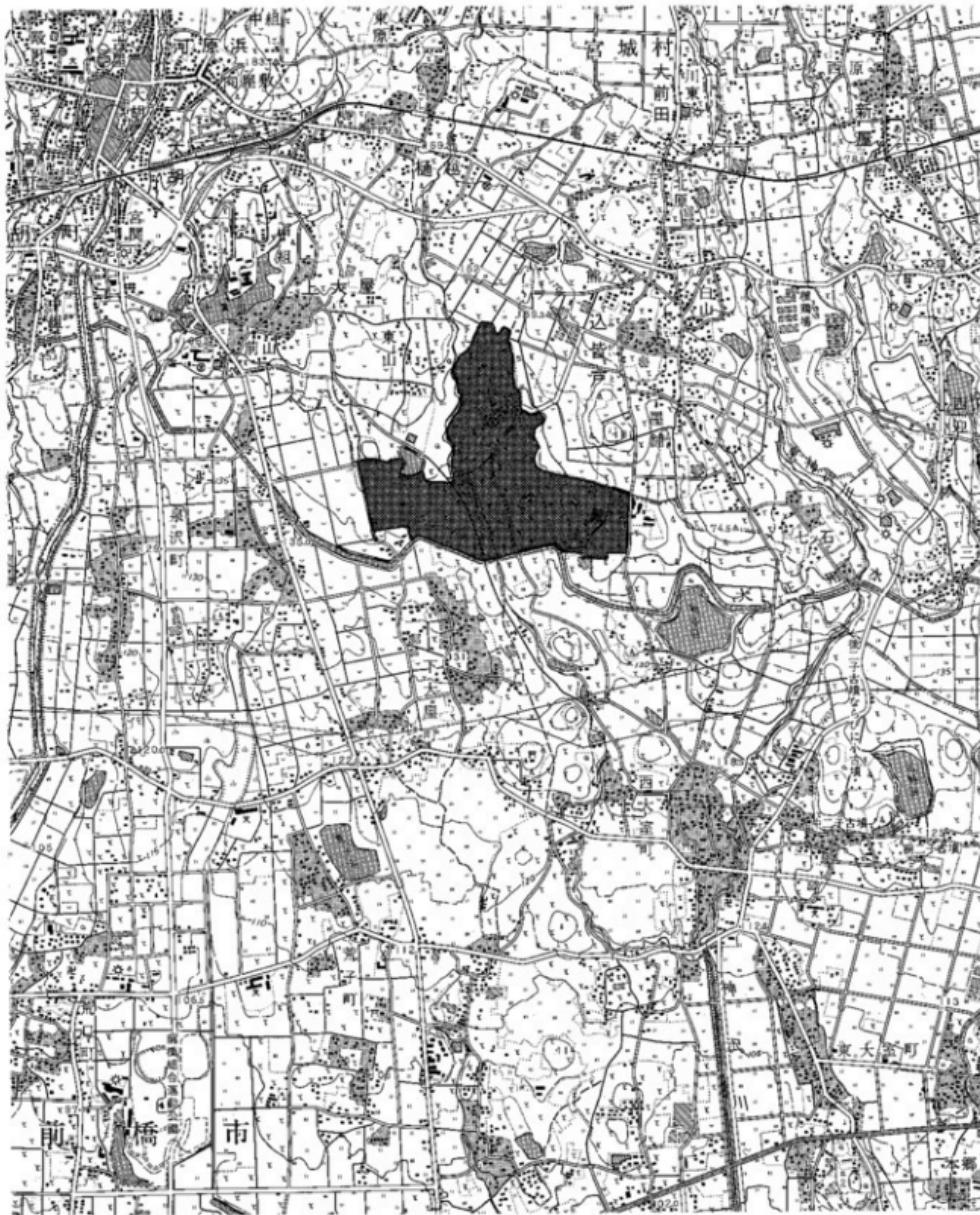


Fig. 3 横浜遺跡群位置図 (1/25,000)

2 歴史的環境

横俵遺跡群がある赤城山南麓斜面上に位置する荒砥地区は、古墳の多い群馬県下でも、最も密な分布がみられる地域の一つである。さらに、周辺地域にいたっては遺跡の包蔵地も数多く確認されている。一方、近年、土地改良事業や大規模な開発事業が極めて急激にかつ広範囲にわたって行われ、地域の景観も純農村地帯から次第に近代的で整備されたものに変化しつつある。また、それらに伴う発掘調査によって検出された遺跡の数也非常に多く、今現在も増え続けている。

今回の調査の結果、遺跡地は縄文時代と古墳時代の集落及び古墳群からなることが判明した。周辺地域の遺跡の分布状況、各時代の様相も次第に解明されつつあるため、ここでは、荒砥地区及び隣接する大胡町、粕川村及び赤堀町の各一部を含めた地域を、先土器時代から概観してみたい。

本遺跡群周辺における先土器時代の遺跡は極めて少ない。最近では昭和59年度から4カ年にわたり実施された柳久保遺跡群の調査で、頭無遺跡から細石刃やナイフ形石器等を伴う3枚の文化層が検出されている。ほかにも、三屋遺跡、西原遺跡等で尖頭器を中心とした石器が出土している。

統く縄文時代では、草創期から後期まで幅広く検出されている。なかでも、上縄引遺跡、北山遺跡、天神風呂遺跡で検出された早期～中期の集落が筆頭にあげられ、当地域の縄文文化を考えるうえで重要な資料といえる。また、柳久保遺跡群では、早期・前期の包含層、前期の住居址が検出されている。そのほかには、谷津遺跡、稻荷山遺跡、荒砥上諏訪遺跡等があげられる。晩期の遺跡はまだ発見されていない。

弥生時代の調査では、荒口前原遺跡で中期から後期初頭の住居址が、北山遺跡、下縄引遺跡、久保皆戸遺跡、西原遺跡で後期の住居址が検出されている。さらに、七ツ石遺跡では、弥生時代終末期から古墳時代初頭への過渡期とみられる住居址が10数軒調査されているが、全般に大規模な集落はまだ検出されていない。

古墳時代になると、荒砥地区には国指定史跡となっている西大室の3二子古墳をはじめ、数多くの古墳が築造されている。本遺跡群内にも後期群古墳の上横俵古墳群が存在しており、今回の調査でそのうちの一基を確認した。また、東方に隣接する七ツ石古墳群では、巨石石室を持つ古墳が二基検出され、7世紀中葉のものと考えられている。また、西方約1.7kmには6世紀初頭の箱式棺状石室を持つ山ノ上・茂木両古墳が存在している。さらに南方には、阿久山古墳群、伊勢山古墳群、中島古墳群等が連続的に位置している。一方、古墳時代の集落は、前時代までの遺跡数に比べると急激な増加がみられる。前期のものは内堀遺跡群、荒砥宮田遺跡、梅木遺跡、荒砥諏訪西遺跡、荒砥東原遺跡、大室小学校校庭遺跡等の集落のほかに、荒砥諏訪遺跡、堤東遺跡等で方形周溝墓群が検出されている。中期には集落址のほかに荒砥荒子遺跡、丸山遺跡で豪族居館址が発見されている。統く後期では北山遺跡、天神風呂遺跡、洪沢遺跡、前田遺跡等で集落址が

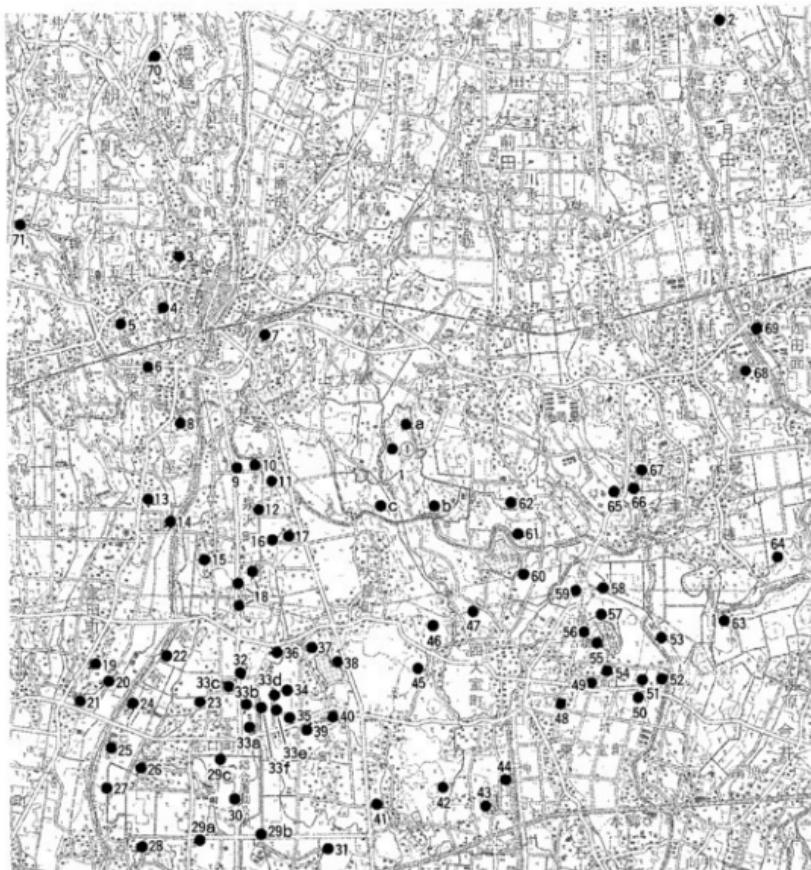


Fig. 4 横浜遺跡群と周辺遺跡 (1/50,000)

検出されている。

奈良・平安時代に至ると、近隣した台地上に多数の集落址が出現する。遺跡名をみると、柳久保遺跡、天神風呂遺跡、谷津遺跡、丸山遺跡、北山遺跡、大室小学校校庭遺跡、大久保遺跡、堤東遺跡、荒子小学校校庭遺跡、西迎遺跡等をあげることができる。また、柳久保水田址、荒砥諏訪西遺跡、荒砥宮田遺跡、荒砥前田遺跡等のような、荒砥川及び宮川流域に位置する遺跡においては、As-B 軽石によって埋没した水田址が集落址とともに発見されている。これらは当時の人々の生活を支えた水田耕作の跡を今に伝えるものである。これら以外の特殊遺構としては、上大屋・樋越地区遺跡群からは須恵器窯址、炭窯址、製鉄址遺構を含む八ヶ峰生産址遺構が、また、荒子小学校校庭遺跡からは須恵器窯址が検出されている。さらに、上西原遺跡では基壇を有する柱穴列と溝が検出され、本地域の発展の様子を窺うことができる。

Tab. 1 周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	概要	No.	遺跡名	概要
1	横須賀郡		33	柳久保遺跡群	
a 猫の穴遺跡	縄文前期集落・古墳前期集落、内墳	a 下鶴谷遺跡	先土器、縄文前期住居、奈良集落		
b 大久保遺跡	平安住居	b 柳久保遺跡	先土器、縄文前期包含層、古墳～平安集落、古墳		
c 大道遺跡	縄文後期集落・古墳前期集落、奈良・平安集落	c 開跡遺跡	古墳		
①上横須賀古墳群	後期古墳群	d 中鶴谷遺跡	古墳後期～平安集落・古墳		
2	月田古墳群	群集墳	e 顎無遺跡	先土器、縄文前期包含層	
3	殿町遺跡	平安住居	f 柳久保水田址	B種石下水田	
4	天神A・B・C地点遺跡	縄文中期・後期住居	34	大久保遺跡	奈良・平安集落
5	堀越古墳		35	顎無遺跡	弥生中期住居・古墳後期集落、平安集落
6	天神風呂遺跡	縄文前期住居・古墳後期集落、奈良・平安集落	36	荒子小学校庭遺跡	古墳後期集落・奈良・平安集落、須恵廟址
7	八ヶ峰生産址遺構	須恵窯址	37	川籠戸遺跡	奈良・平安住居
8	山ノ上・茂木古墳	箱式石棺石室	38	堤東遺跡	奈良集落・方形・前方後方形周溝墓
9	山崎遺跡	縄文	39	荒砥下押切遺跡	古墳後期集落・奈良・平安集落
10	谷津遺跡	縄文集落・古墳群・奈良・平安集落	40	荒砥中屋敷遺跡	古墳後期集落・平安集落
11	寺東遺跡	古墳中期集落・溝	41	荒砥元子遺跡	古墳時代館・古墳～平安住居
12	寺前遺跡	古墳中期集落・井戸・溝	42	立野古墳群	
13	三塹遺跡	先土器	43	丸山古墳群	
14	荒砥355号墳	前方後円墳	44	荒砥東原遺跡	縄文前期包含層・古墳前～後期集落・奈良・平安住居
15	丸山遺跡	古墳時代居館址・古墳～平安集落	45	阿久山古墳群	群集墳
16	東前田北遺跡	古墳中期集落・中世塚・溝	46	伊勢山古墳群	前方後円墳・円墳10基
17	東京西遺跡	古墳中期集落・溝	47	中島古墳群	
18	新山遺跡	a・b・c の3区に分かれた古墳群・方形周溝墓・溝	48	大室小学校校庭遺跡	古墳前期住居・奈良・平安集落
19	東原古墳群		49	荒砥上課跡遺跡	縄文前期住居・縄文草～中期包含層・古墳後期集落
20	東原遺跡	縄文前期住居・古墳後期集落・奈良・平安集落	50	荒砥五反田遺跡	古墳前期・後期集落・平安集落
21	宮下遺跡	弥生後期住居・古墳後期集落・奈良・平安集落	51	梅木遺跡	弥生後期・平安集落・古墳時代居住址
22	荒砥御跡西遺跡	古墳前期・後期集落・奈良・平安住居・C種石に係る墓・B種石下水田	52	荒砥上川原遺跡	弥生後期住居・古墳集落
23	荒砥御跡遺跡	縄文中期包含層・古墳時代周溝墓	53	久保伊戸遺跡	縄文中期包含層・弥生後期住居・古墳前期住居・奈良集落
24	荒砥宮田遺跡	縄文前期住居・古墳前～後期集落・奈良・平安集落・B種石下水田	54	前二子古墳	前方後円墳
25	荒砥前田遺跡	B種石下水田	55	中二子古墳	前方後円墳
26	荒口前原遺跡	弥生中期・後期初頭住居・平安住居	56	後二子古墳	前方後円墳
27	荒砥北原遺跡	縄文前期・中期住居・奈良・平安集落	57	内堤遺跡群	古墳前期集落・帆立貝式古墳
28	荒砥北三木堂遺跡	先土器・弥生住居・古墳前期・後期集落	58	下織引遺跡	弥生後期住居
29	荒砥大日塚遺跡	a区 古墳後期集落・奈良・平安集落 b区 B種石下水田 c区 弥生住居・古墳後期集落・B種石下水田	59	上織引遺跡	縄文早期後半～後期住居・弥生周溝墓
30	鶴谷遺跡群	古墳中期・後期集落・奈良・平安集落	60	北山遺跡	縄文草創期・前期住居・弥生後期集落・弥生周溝墓・古墳後期集落・奈良・平安集落
31	荒砥上之坊遺跡	縄文初期住居・弥生後期住居・古墳前期・奈良・平安集落・墓	61	七ヶ石遺跡	弥生後期住居
32	柳久保遺跡	古墳集落・奈良集落	62	七ヶ石古墳群	
			63	若白山古墳	前方後円墳
			64	稻荷山遺跡	縄文初期住居
			65	西原遺跡	先土器・弥生後期住居
			66	三ヶ尻遺跡	古墳前期・奈良・平安集落・方形周溝墓
			67	西迎遺跡	弥生中期・奈良・平安集落・古墳前期方形周溝墓
			68	済沢遺跡	古墳中期・後期集落
			69	前田遺跡	古墳中期・後期集落
			70	甲斐訪遺跡	縄文中期集落
			71	柴崎古墳群	

III 調査の経過

1 調査方針

荒砥地区は、近年大規模な土地改良事業や、各種公共事業に伴う開発が爆発的に相次ぎ、県内でも調査された遺跡数、面積の多い所である。それらの調査は一般的に期間が圧迫され、広範囲に及ぶ調査を実施しなければならないこと、さらに調査の実施に多数の団体があたっているため、遺跡呼称に混乱をきたしている。本遺跡群内の遺跡呼称についても、遺跡群全体をとらえる試掘調査が実施されていないことから、便宜上小字名をそのまま遺跡名とし調査を行ってきたが、上記のような混乱を防ぐためにも、正確な各遺跡の範囲、名称及び略称の決定は来年度以降の本遺跡群の発掘調査に委ねたいと考えるものである。また、横依遺跡群の名称は開発事業地内を便宜的に呼ぶものであるため、今後各遺跡の検討によってしかるべき名称を採用する必要がある。

調査を実施するにあたって、試掘及び発掘調査とも平成元年11月末までという期間的な制約があったため、試掘トレンチ設定や表土剥ぎには重機（バックフォー0.7m³）を用い時間の節約に努めた。本年度の調査範囲は、仮称荒砥工業団地造成地約55haのうち市道5・5・6号線をはじめとする主要幹線道路の部分（総面積約15,000m²）であったが、それらに対して遺跡範囲が明確にされていなかったため、表面調査の資料を参照しつつ試掘調査を実施した。そして、試掘調査の結果を直ちに検討し、必要に応じて発掘調査へ移行する方法をとった。発掘調査は表土層の除去を行い、As-Cが混じるクロボク土面もしくは、軟質（ソフト）ローム上面を出した。この時点で古墳時代以降の遺構を確認し調査を実施した。また、縄文時代の遺物包含層の調査は、土層観察用のセクション・ベルトを残し、移植ゴテ、ジョレン等を使い、人力で硬質（ハード）ローム上面まで掘り下げた。検出された遺構、遺物は、平面図、分布図等を作成し、記録をとどめながら作業を進めた。

公共座標に基づく植杭は、プラン確認と並行しながら20m方眼で実施した。さらに調査中必要に応じて4m方眼の杭を足して行った。調査区の呼称方法については、遺構が確認されなかった上原訪山を除いた、本遺跡群全体をとらえたグリッドを設定し、4mピッチで北から南へY1、Y2、Y3…と、西から東へX1、X2、X3…と呼称した。X125、Y125の公共座標は第Ⅹ系+44.5、-58.5kmである。各グリッドの呼称は北西の杭の名称を使用した。また、基準点測量は既設の仮称荒砥工業団地地区界測量の基準点を利用して行った。水準についても同様にして移動し、遺跡内にB.M.杭を50m間隔・海拔高0.5m単位で設定し使用した。

調査進行中においては、検出された遺構の配置図を平板測量にて1/200で作成し、縄文時代の遺物包含層については、グリッド毎の収納遺物数を1/1,000の図面に記し、包含層の範囲を把握した。そして、その都度その後の調査工程を検討しながら調査を行った。

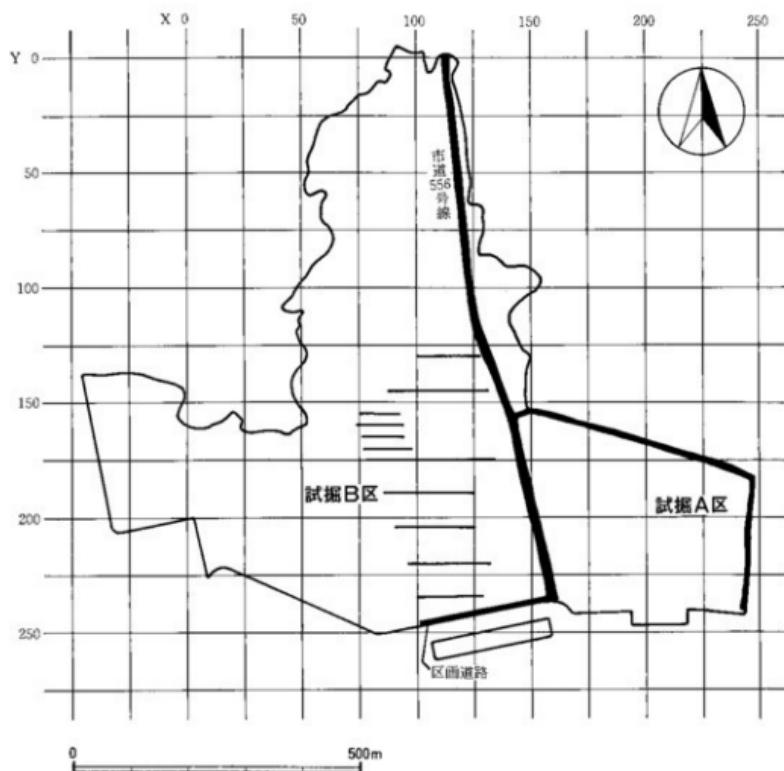


Fig. 5 グリッド設定図

試掘調査

調査区が道路部分であったため、基本的には調査区の端部に沿って幅1.3mのトレンチを設定し実施した。また、中横浜については、60mピッチの方眼杭を利用して、地形を鑑みながら60m間隔で幅1.3mのトレンチを設定し、必要に応じて20m間隔の細トレンチを設定した。深掘は各トレンチを20m間隔で設定し地形・地層観察に努めた。

発掘調査

図面作成は基本的に1/20で平板・簡易造り方測量で実施し、必要に応じて1/10、1/40の縮尺で作成した。遺物についても同様の縮尺で平面分布図を作成し、遺物台帳に記録をとりながら収納した。また、縄文時代遺物包含層の調査は分層発掘を実施し、遺物収納はグリッド単位で記録しながら層位毎に行った。

2 試掘調査

試掘調査は果樹をはじめとする作物の移転、農作物収穫及び抜根作業の遅れ等があったため、開発区全域を一度にはできなかった。また、調査区が広範囲に及んでいたことや、地形の起伏が激しいこともあり、重機搬入路に苦慮しながら掘削可能な場所をねらって順次実施した。

まず、中横儀に位置する大正用水沿いの区画道路から行った。ここは、「上毛古墳総覧」から古墳の存在が予想されたことや、表面調査の結果から、比較的遺物の散布が密であったこと等により、幅8mにわたって全面掘削し調査を行った。その結果、予想された古墳及びその他の遺構は検出されず、わずかに遺物が出土したにとどまった。

大久保については、X160ラインに沿って幅1.3mのトレンチを設定し、試掘調査を実施したが、すぐに遺構が確認されたため、直ちに全面掘削に切り替え発掘調査を実施した。

市道5・5・6号線にかかる調査区は、南北約1km、幅14m、標高差約20mという非常に細長く、地形の起伏が激しいものであり、ここをどのように試掘調査するかが、今回の調査の最大の懸念であった。さらに、熊の穴は現況では鬱蒼とした森林であり、調査範囲の設定にも非常に苦慮した。そのため、市道5・5・6号線の試掘調査は南から順に行った。

低地中横儀における試掘調査は、調査区が沖積地形であることから、埋没水田の存在が予想されたため、市道5・5・6号線の西端に沿って幅約2mのトレンチを設定したが、水田址と目される畦畔・水路・平坦面・水田土壤は検出できなかった。また、台地の縁辺部にあたる上横儀の北端では、縄文時代のいわゆる陥し穴と溝が検出されたほか、縄文式土器が若干出土した。さらに、灌漑用の溜池である横儀沼を築造する際に積まれた盛土が確認された。

今回の熊の穴の調査地は東斜面であり、生活するためには好条件の土地である。また、上横儀古墳群にも近距離にあり、古墳らしきマウンドも確認された。しかも、表面調査による遺物散布状況も非常に密であり、遺跡地である可能性は高いと予想できた。しかし、作物移転が遅滞し、調査は抜根を待てて北側から順に実施することになった。X112、X113ラインに沿ってトレンチを設定したが、すぐに遺構が確認されたため、本調査に移行した。その結果、古墳をはじめ、縄文・古墳時代の集落址が検出され、今年度の調査の主体をなすともいえる調査区となった。

6月には、大久保の柏川村及び七ツ石との境界道路（試掘A区・面積約5,600m²）の試掘調査を、道路予定地の北端及び西端に沿って、幅1.3mのトレンチを設定し実施した。その結果、遺構の存在はもとより、遺物においても数点が出土したにすぎなかった。

さらに9月には、沖積地である中横儀（試掘B区・面積約10,000m²）の試掘調査を急速実施することになった。まず、Y175ラインを基準に60mピッチのトレンチを設定、さらに遺物散布が密である場所及び上横儀古墳群に近い場所については、遺構の存在する可能性も高いため、20mピッチのトレンチを設定して行った。試掘A・B区の結果については第4章5節に後述する。

3 調査経過

本年度の調査は4月中に事前協議、事務手続きを済ませ、4月26日より開始した。まず、大正用水際にテントを設営し、大正用水沿いの区画道路及び市道5・5・6号線の遺構確認を行った。

その結果、区画道路では遺構は確認できず、大久保で住居址が2軒検出されたにとどまった。しかし、西～東傾斜の微高地である熊の穴では、この地理的環境の良さもあってか、住居址や古墳、溝等、相当数の遺構を確認した。これらの状況を踏まえ、調査拠点がテント生活からプレハブ事務所に移ったのは、7月にもなろうかという暑い太陽の日差しの中であった。

遺構が検出されたのはよいが、今度は作業員不足という問題がでてきた。今年度は当地域での大規模発掘が目立ち、多くの労働力を集められたためである。八方手を尽くしたもの、結局20名前後の体制で夏を乗り切ることになった。児童文化センターの子供達や前橋一中、四中等の生徒が見学に訪れたのもちょうどこの頃である。

本遺跡群の発掘調査は数年かかると予想されている。そこで、確実な遺構の存在を把握するために、中横儀の試掘調査を急ぐことになった。住民の農業等困難な問題をこえ、重機をフル稼働させたのが9月初旬であった。

調査の中で予想以上に手間取ったのが古墳である。石室は崩れ、黒色土に覆われていた周堀の確定に時間を要したためだが、この調査に1ヶ月以上かかった。予想外だったのは固くて深い繩文包含層もそうであった。こんな中で、繩文住居が確認されたのは10月も終わりになろうかという、秋色濃いつるべ落としの夕暮れであった。

純土は土が固い。時には手首が、肘が痛むことがあった。しかし、残り2週間という期間の中で、作業員は以前にも増して真剣に、そして時間をいとわずに働いた。この結果、11月20日にはほぼ一応の終了をみた。

調査期間中、様々な悩みはあったが、奈良・平安、古墳時代の住居址から井戸、陥し穴、さらには古墳、繩文住居址に至るまで調査できたことは意義深い。今後数年を経るとやがてここは大きな工業団地に生まれ変わる。そのとき訪れた人々が本地の歴史を知り、明日への糧を見いだしてもらえば望外の喜びというものである。

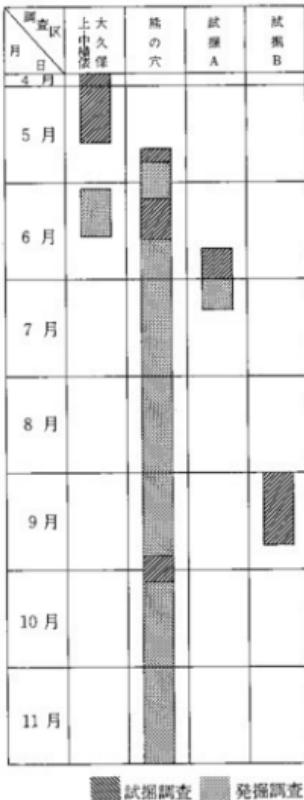


Fig. 6 発掘調査経過図

III 調査の経過

1 E17

I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX
X

I 稲作土
II 黒褐色土粗砂層 As-C 30%程度、粘性小。
III 黄褐色ソフトローム層 粘性弱まりあり、暗褐色土のブロックを半分近く含む。As-YP。
IV 黄褐色ソフトローム層 As-SP 10%霜降状。
V 黄褐色ハードローム層 As-SP 10%。
VI 黄褐色ハードローム層 IV 明黄褐色ハードローム層 ATを含む。
VII 黄褐色ローム層 暗色带、和性強弱まりあり。明黄褐色。
VIII 黄褐色ローム層 暗色带、和性強弱まりあり。明黄褐色。

1 E18

I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX
X
XI
XII
XIII
XIV

I 稲作土
II 黒褐色土粗砂層 As-C 30%程度、粘性小。
III 黄褐色ソフトローム層 粘性弱まりあり、暗褐色土のブロックを半分近く含む。As-YP。
IV 黄褐色ハードローム層 As-SP 10%霜降状。
V 黄褐色ハードローム層 As-SP 10%。
VI 黄褐色ハードローム層 As-RP 10%。
VII 黄褐色ハードローム層 IV 明黄褐色ハードローム層 ATを含む。
VIII 黄褐色ローム層 暗色带、和性強弱まりあり。明黄褐色。
IX 明黄褐色輕層 Hr-HP。
XV 棕色粘土層 粘性大、締まり大。

1 E19

I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX
X
XI
XII
XIII
XIV

I 稲作土
II 黒褐色土粗砂層 As-C 30%程度、粘性小。
III 黄褐色ソフトローム層 粘性弱まりあり、暗褐色土のブロックを半分近く含む。As-YP。
IV 黄褐色ソフトローム層 As-SP 10%霜降状。
V 黄褐色ハードローム層 As-SP 10%。
VI 黄褐色ハードローム層 As-BP 10%。
VII 黄褐色ハードローム層 IV 明黄褐色ハードローム層 ATを含む。
VIII 黄褐色ローム層 暗色带、和性強弱まりあり。明黄褐色。
IX 明黄褐色輕層 Hr-HP。
XII 棕色粘土層 Hr-HP。
XI 棕色粘土層 粘性大、締まり大。

1 E21

I
II・III
IV
V
VI
VII

I 稲作土
II 黒褐色土粗砂層 As-C 30%程度、粘性小。
III 黄褐色ソフトローム層 粘性弱まりあり、暗褐色土のブロックを半分近く含む。As-YP。
IV 黄褐色ソフトローム層 As-SP 10%霜降状。
V 黄褐色ハードローム層 As-SP 10%。
VI 黄褐色ハードローム層 As-BP 10%。
VII 黄褐色ハードローム層

Fig. 7 横倅遺跡群標準土層図

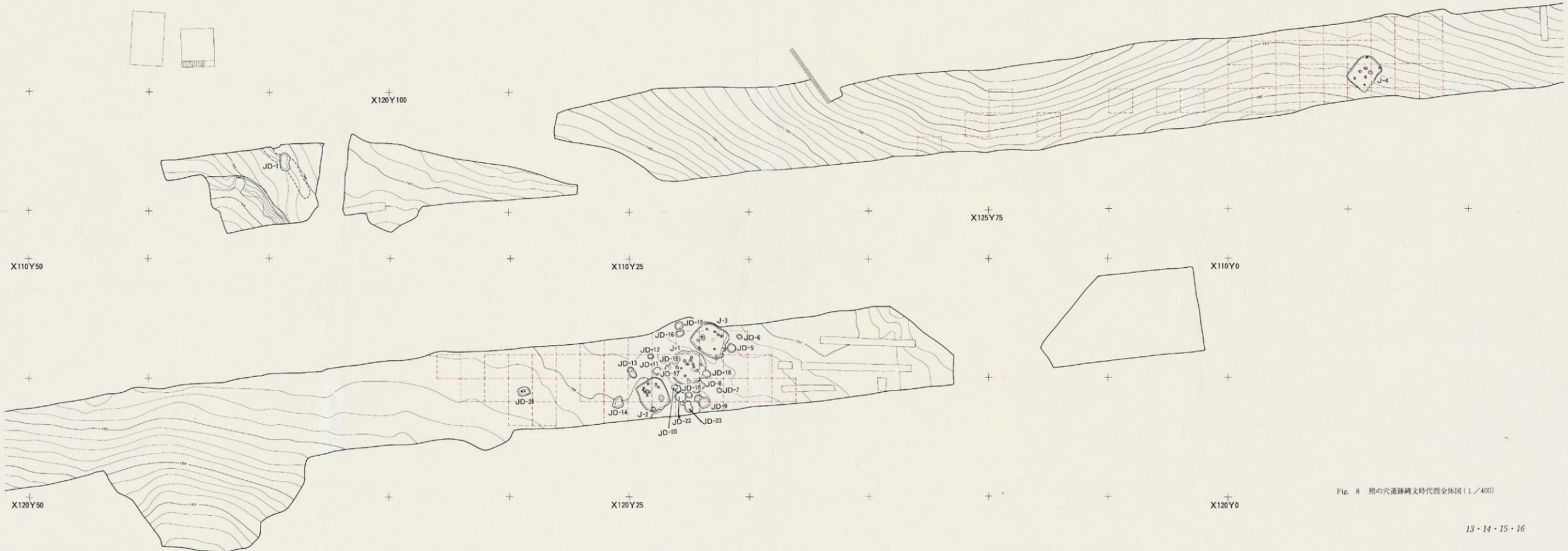


Fig. 8 熊の穴遺跡縄文時代面全体図 (1/400)

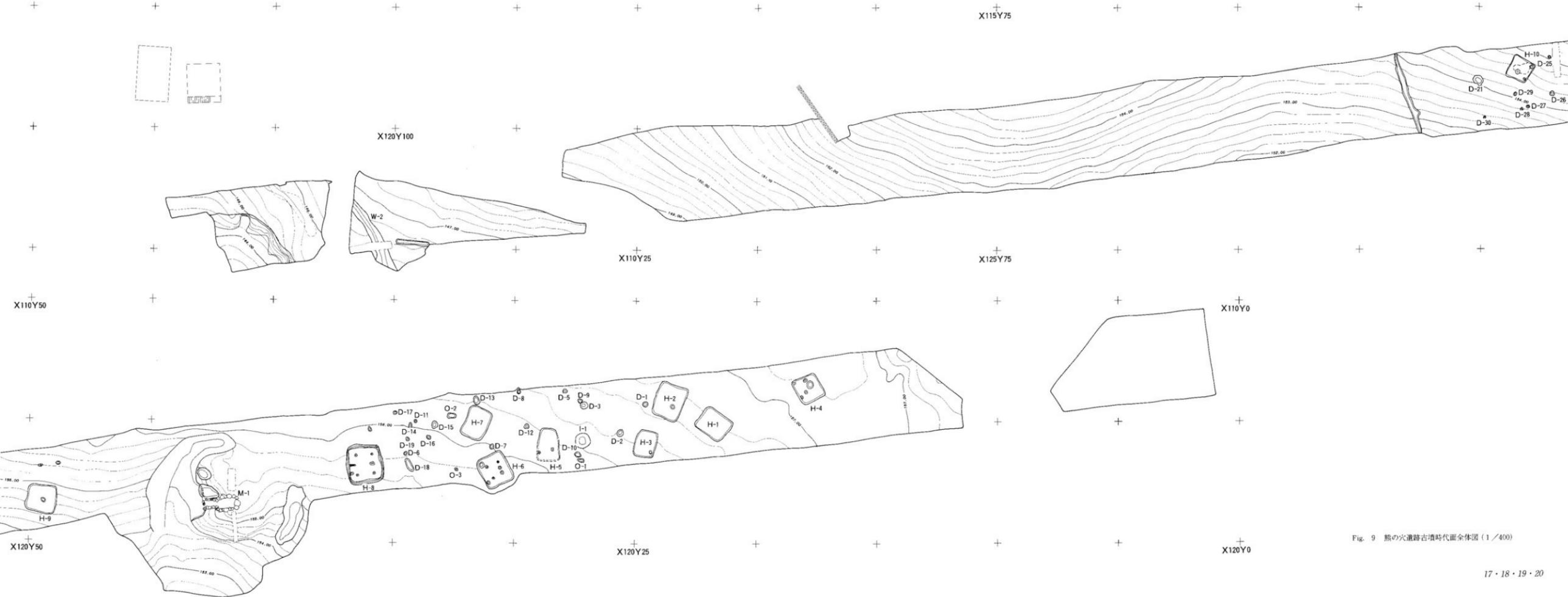


Fig. 9 熊の穴遺跡古墳時代面全体図 (1/400)

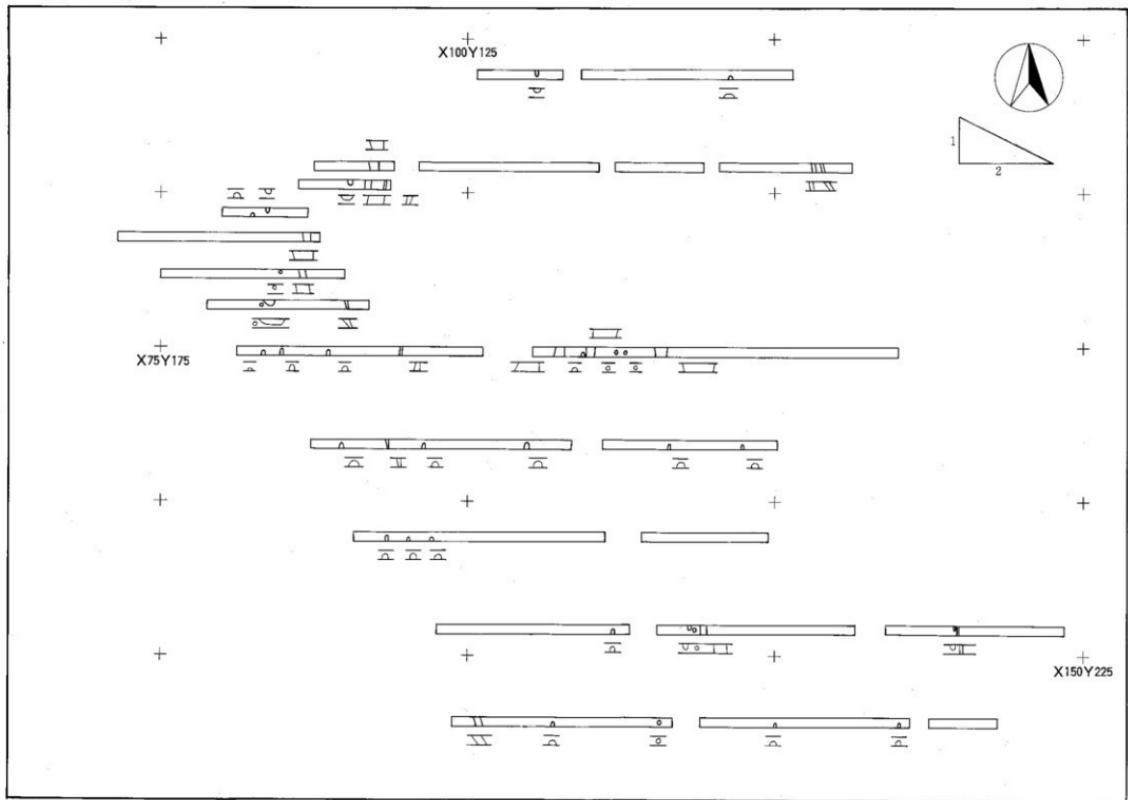


Fig. 10 試掘トレンチ概況図

IV 遺 跡 の 調 査

遺跡の概観

本遺跡群は広大な裾野を持つ赤城山の南麓に立地している。この赤城山南麓のうち標高200m以下の地域には、比高差の少ない低台地が形づくられている。さらに、山麓を南下する河川及び低台地から湧出する小支流等によって樹形図状に開析が進み、複雑な谷地形も形成されている。

本遺跡群は北側の台地上にある上横依遺跡（E18）、熊の穴遺跡（E19）、東側の台地を占地する大久保遺跡（E21）、沖積地に広がる中横依遺跡（E17）、さらに、神沢川の西側の平地に位置する大道遺跡（E14）によって構成されている（上源訪山については昭和63年度に実施した試掘調査の結果、遺跡地ではないと言ふことが判明している）。

遺跡名・略称及び各遺跡の有機的関連は、今後の発掘調査に委ねる内容であるが、今年度の本調査團直管分（委託調査分の大道遺跡を除く）の発掘調査の成果を時代を追ってみてみたい。

縄文時代 熊の穴から前期の住居址、土坑及び同時期の遺物包含層が検出された。また、大久保、上横依、中横依においても前期から後期に至る遺構、遺物が確認されている。

古墳時代 熊の穴から前期の集落が検出されたほか、終末期の古墳が1基確認された。これは、上横依古墳群との関連性が考えられ、集落とともに周辺における存在が予想されるものである。

また、古墳総観から中横依にも古墳の存在が予想されたが、今回の調査では確認できなかった。

平安時代 大久保で住居址が2軒検出されたが、その周辺での遺物の出土は少なかった。

1 中横依遺跡

今年度、本遺跡と位置づけた場所は、本遺跡群の南端にあたる大正用水沿いの区画道路部分及び市道5・5・6号線の谷地部分である。区画道路部分は平坦地であるが、西から東へ緩やかな傾斜をもつ。調査範囲は南北8m、東西230m、面積1,840m²に及び、標高は136～138mを測る。また、市道5・5・6号線にかかる部分は、北から南へ延びる谷地形であり、標高は134～137mを測る。上横依遺跡との境界線については、今回便宜的に使用したものであるため、今後の検討を必要とする。

このうち市道5・5・6号線部分の調査は、調査区が現況では低湿地であり、古代の埋没水田の存在が予想されたが、試掘調査を実施した結果、遺構の検出はもとより遺物も確認されなかった。

区画道路部分の調査は、谷地にかかる部分を除いた道路予定地についてすべて実施した。調査グリッドはX100～148、Y235～244グリッドの範囲である。ソフトローム面で確認調査を行ったが、遺構の検出はなく、遺物が約90点出土しただけであった。そのうち縄文時代の石器3点が検出された。その内訳は石錐（61, Fig. 43, PL. 19）、打製石斧（80, Fig. 44, PL. 20）、礫器（106, Fig. 46, PL. 21）である。

2 大久保遺跡

本遺跡は荒砥工業団地造成予定地の南東部にあたる丘陵地に立地している。現況では全体にわたって森林であるが、一部は畑にも利用されている。今年度の調査区は本遺跡の西端にあたる市道5・5・6号線がかかる舌状に張り出した台地の縁辺部であり、幅14mの道路幅のうち台地部分を本遺跡とした。そのため3つの調査区に分かれている。今回の調査ではそのうちの一一番南の調査区から、平安時代の住居址が2軒検出されたが、その他の調査区においては、遺構はもとより遺物も数点出土したにすぎなかった。遺跡地の西側は中横浜遺跡の谷地の部分となっており、中横浜の沖積地との比高は3~4mを測る。また、調査区の標高は137~138mであり、比較的平坦な場所に立地している。

検出された遺構のほかには、縄文時代の遺物が数点出土している。そのうち土器では後期加曾利E式と思われる、網代をもつ深鉢の底部(37, Fig. 39)が、石器では石錐(55, Fig. 43, PL. 19)1点、凹石(96, Fig. 45, PL. 20)1点が特筆すべきものとして挙げることができる。

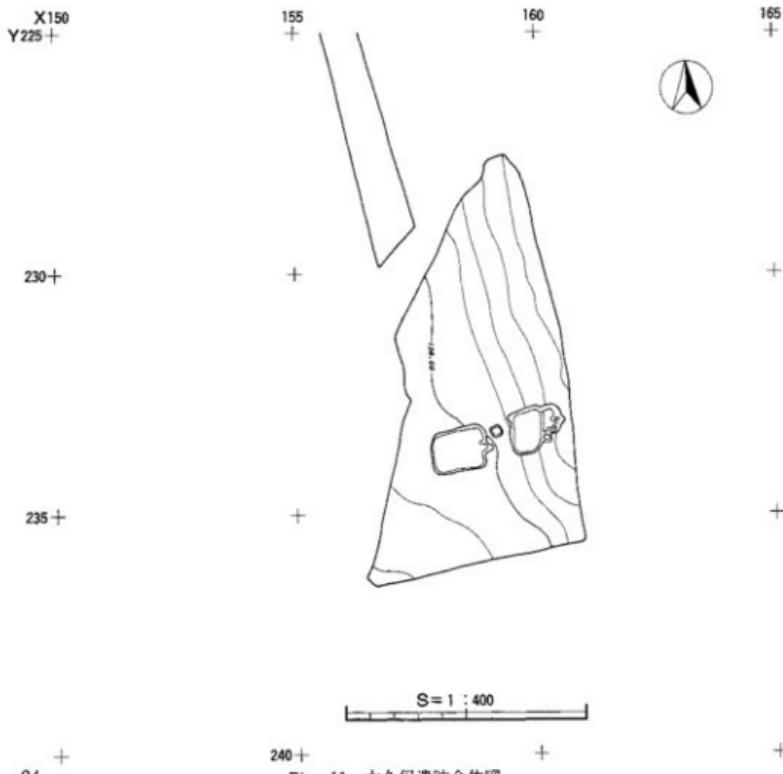


Fig. 11 大久保遺跡全体図

(1) 平安時代の遺構と遺物

H-1号住居址

位置 X157~159、Y233~234グリッド 標高 135.7m

挿図 Fig. 12 写真 PL. 12

面積 12.4m² 方位 N-83°-E

形状 長軸4.30m、短軸3.10mの長方形を呈する。壁高は36cmを測る。壁は垂直に近い角度で掘り込まれている。

床面 やわらかい床面である。一部攪乱が入っていたこともあり、検出するのが難しかった。全体的に凹凸面が少なく平坦に形成されていたが、住居に関する柱穴、貯蔵穴等は認められなかった。

窓址 東壁中央より30cm南へ偏った位置の壁外にある。焚口幅60cm、燃焼部長116cmを測る。構築材には主に粗粒安山岩が数点用いられており、砂質凝灰岩のものも検出されている。

遺物 土師器は壺(1~3・5~10)、壺(13)、鉢(14)が検出された。そのうち、壺では『東』『中』と書かれた墨書き土器が1点ずつ出土している。ほかには、壺2点、台付壺1点、壺2点がある。また、須恵器では壺(4・11)、高台付壺(12)が出土している。出土遺物総数は412点である。

H-2号住居址

位置 X159・160、Y237・238グリッド 標高 135.7m

挿図 Fig. 13 写真 PL. 12

調査面積 (3.8)m² 方位 N-87°-E

形状 住居西半分が農業用のゴミ穴により破壊されていたため、規模ははっきりしない。調査範囲は東西(1.62)m、南北2.11mの長方形を呈する。壁高は67cmを測る。壁は垂直に近い角度で掘り込まれている。

床面 堅硬な床面が認められたが、竈の両側が壁面にかけてややくぼんでいた。また、南壁は攪乱が入り込み、検出が難しかった。住居に関する柱穴、貯蔵穴等は認められなかつた。

窓址 東壁中央の15cm南へ偏った位置の壁外にある。焚口幅46cm、燃焼部長65cmを測る。構築材には粗粒安山岩が用いられていた。

遺物 土師杯(15・16・18)、須恵杯(17)が出土している。出土遺物総数は41点である。

3 上横俵遺跡

今回の調査で本遺跡と位置づけた場所は、市道5・5・6号線の横俵沼の西側から南へ下がり、中横俵遺跡の5・5・6号線の調査区と位置づけた境界までである。ただ、この境界線については、旧字の区画をそのまま今回便宜的に使用したものであり、今後の調査の結果に伴い検討を必要とする。調査区は中横俵遺跡から続く沖積地が主となるが、横俵沼の西側部分は一段高くなり、熊の穴の台地の縁辺部となっている。そのため標高は130~149mを測る。

低地部分については古代の埋没水田の存在が予想されたため、幅2mのトレンチを設定し試掘調査を実施した。その結果、遺構は確認されず流れ込みと思われる遺物が数点検出されたに過ぎなかった。

横俵沼の西側の台地部分においては、表土を除去した結果、横俵沼を築造する際に行ったと思われる土盛りが確認され、広範囲にわたって擾乱を受けていた。ここでは、縄文時代のいわゆる陥し穴と思われる土坑1基、古墳時代の溝1条が検出された。また、その他遺構は伴わないが、縄文時代前期諸式の深鉢の破片及び土器片、さらに土師器片等が出土している。そのうち縄文時代の遺物については、本調査区の北に接する熊の穴遺跡とほぼ同時期のものが出土していることから、熊の穴遺跡との関連及び境界・区画についても今後再検討しなければならないことである。

(1) 縄文時代の遺構と遺物

JD-1号土坑

位置 X122・123、Y104グリッド 挿図 Fig. 7 写真 PL. 12

形状 長径291cm、短径145cmの中央部がややくびれた梢円形を呈し、深さ86cmを測る。底面は平坦である。いわゆる「陥し穴」と思われる。

(2) 古墳時代の遺構と遺物

W-1号溝

位置 X122~125、Y99~101グリッド 挿図 Fig. 8 写真 PL. 12

形状 南西から北東に向かい比高45mを測る。全般的に幅150cm、深さは南西端で30cm、北東端で75cmである。断面形は逆台形を呈する。

遺物 数点の土器片が検出されたが、復元できるものはなかった。

4 熊の穴遺跡

今年度調査を実施した市道5・5・6号線のうち、北は大胡町との境界、南は横浜沼の北西を走る道路までを本遺跡と位置づけた。大部分が台地の東斜面上に立地しており、東西幅14m、南北380mの細長い調査区である。さらに、北から南へ緩やかな傾斜をもっていることから、標高は149m～157mを測る。調査グリッドはX111～124、Y10～93グリッドの範囲である。

本遺跡では縄文時代及び古墳時代の2時代の集落が検出された。ほかにも、終末期の古墳1基が確認されている。今年度の調査の主体をなす調査区であるといえる。

(1) 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構・遺物は本調査区の北側及び中央部やや南寄りの場所の2カ所でまとめて検出された。それは、竪穴住居址4軒、土坑19基と遺物包含層によって構成されている。そのうち北側のまとまりでは、住居址3軒、土坑19基をはじめ、遺物も多数検出された。ただ、南側のまとまりにおいては、包含層から遺物が多数出土したもの、遺構は住居址が1軒確認されたにすぎなかった。検出された4軒の住居址は、それらに伴う土器の形式から諸磯式期の所産であると考えられる。また、土坑の所産時期は住居址と並行するものと思われ、主に諸磯式期の土器が多く出土した。

包含層からは縄文式土器2,276点、石器114点が検出された。土器は前期のものが多く、中でも前期の諸磯b式土器が主体を占め、全体の95%以上を占めていた。その他の時期の遺物は極めて少なかった。石器は住居内から39点、土坑内から6点、その他包含層から69点出土した。

1 住居址

J-1号住居址

位 置 X113～115、Y21～23グリッド 標 高 155.8m

挿 図 Fig. 14 写 真 PL. 3

面 積 21.8m² 方 位 N-59°-E

形 状 住居内で3基の土坑と重複しているが、長径5.81m、短径5.22mの梢円形を呈する。壁高38cm、壁の掘り込み角度およそ90°を測る。

床 面 踏み固められたかなり堅緻な床面が検出された。ハードローム層を掘り込んでおり、全体的に平坦である。

IV 遺跡の調査

炉 址 住居中央付近で地床炉と思われる焼土がまとまって検出されたが、炉址であると断定できなかった。

柱 穴 全部で15個検出された。このうちP₄・P₆・P₈・P₁₀は主柱穴であると考えられる。各柱穴の規模は、P₁・長径48cm、短径32cm、深さ41cm、P₂・長径40cm、短径28cm、深さ26cm、P₃・長径42cm、短径39cm、深さ36cm、P₄・長径64cm、短径45cm、深さ51cm、P₅・長径28cm、短径26cm、深さ21cm、P₆・長径30cm、短径24cm、深さ42cm、P₇・長径56cm、短径42cm、深さ35cm、P₈・長径50cm、短径30cm、深さ54cm、P₉・長径35cm、短径32cm、深さ35cm、P₁₀・長径42cm、短径38cm、深さ51cm、P₁₁・長径43cm、短径41cm、深さ19cm、P₁₂・長径19cm、短径16cm、深さ16cm、P₁₃・長径34cm、短径30cm、深さ16cm、P₁₄・長径34cm、短径30cm、深さ49cm、P₁₅・長径20cm、短径18cm、深さ16cmを測る。

遺 物 土器は多孔付の浅鉢（25、26）が1点出土した。土器片の総数は345片であった。石器は9点検出された。内訳は、尖頭器1、削器2、打製石斧4、磨石1、磨石・凹石1である。

重 複 住居南側でJ D-17、J D-19と、住居北側でJ D-18と重複する。また、住居北側でH-1と、住居南側でH-2と重複し本住居が先行する。

J-2号住居址

位 置 X 114~116、Y 23・24グリッド **標 高** 155.6m

構 図 Fig. 15 **写 真** PL. 4

面 積 19.9m² **方 位** N-61°-E

形 状 長軸4.95m、短軸4.90mの隅丸方形を呈する。壁高は42cmを測り、壁は垂直に近い角度で掘り込まれている測る。

床 面 ハードローム層を掘り込んで、ほぼ平坦に造られている。全体にわたって堅緻な床面が認められた。

炉 坂 存在しなかった。

埋 蔡 住居中央南西寄りで、胴部から下を欠損した深鉢（1）が正立状態で出土した。

柱 穴 全部で10個検出。各々の規模は、P₃・長径40cm、短径40cm、深さ60cm、P₄・長径36cm、短径29cm、深さ20cm、P₅・長径27cm、短径25cm、深さ46cm、P₆・長径24cm、短径20cm、深さ19cm、P₇・長径37cm、短径30cm、深さ14cm、P₈・長径41cm、短径32cm、深さ57cm、P₉・長径23cm、短径22cm、深さ44cm、P₁₀・長径23cm、短径19cm、深さ18cmを測る。

貯藏穴 P₁・長径113cm、短径94cm、深さ72cm、P₂・長径80cm、短径67cm、深さ75cmの2個が検出された。

遺 物 土器は埋甕のほかに深鉢2点（6ほか）が出土した。出土した土器片の総数は126片であった。石器は石錐1、石錐2、石匙1、削器1、打製石斧1、石核2の計8点が出土。

重複 住居南東部でH-3と重複し、本住居が先行する。

J-3号住居址

位置 X112-114、Y20-22グリッド 標高 155.8m

構図 Fig. 16 写真 PL. 4・5

面積 21.0m² 方位 N-37°-E

形状 長軸5.65cm、短軸5.03cmの長方形を呈する。壁高は80cmを測り、壁は垂直に近い角度で掘り込まれている。

床面 ハードローム層を掘り込み、全体的に平坦で堅緻な面が造られている。

炉址 住居中央部に地床炉と考えられる焼土が、長径54cm、短径42cm、厚さ4cmの範囲の規模で検出された。

埋甕 住居中央やや南寄りの所で検出された。底部を欠く深鉢(10)を正立状態で用いる。埋設坑の大きさは長径35cm、短径30cm、深さ26cmの楕円形である。

柱穴 8個検出された。各々の規模は、P₁・長径49cm、短径42cm、深さ62cm、P₂・長径49cm、短径37cm、深さ46cm、P₃・長径26cm、短径24cm、深さ16cm、P₄・長径30cm、短径29cm、深さ43cm、P₅・長径52cm、短径40cm、深さ59cm、P₆・長径25cm、短径22cm、深さ29cm、P₇・長径59cm、短径56cm、深さ33cm、P₈・長径46cm、短径38cm、深さ35cmを測る。

遺物 土器は埋甕のほかに、深鉢4点(9・13・16・18)が出土した。出土した土器片の総数は140点であった。石器は石鏃2、石錐2、削器5、打製石斧4、磨石1、凹石1、敲石1、石棒1、石核1の合計18点が出土した。

J-4号住居址

位置 X118・119、Y58-60グリッド 標高 152.2m

構図 Fig. 17 写真 PL. 5

面積 18.0m² 方位 N-41°-E

形状 長軸5.10m、短軸4.16mの隅丸長方形を呈する。壁高は最高で43cmを測るが、傾斜地に立地しているため、東側の壁の残存状態は極めて悪く、検出できない部分もあった。また、分かりづらい土層のため壁の検出が難しかった。

床面 ハードローム層を踏み固めた床面が認められた。全体的に平坦に造られている。

炉址 住居中央やや北東寄りの所で、地床炉と考えられる焼土範囲が2カ所確認された。その規模は、東側のものが長径91cm、短径65cm、厚さ8cm、北側のものが長径96cm、短径67cm、厚さ9cmを測る。

柱穴 7個検出された。各々の規模は、P₁・長径33cm、短径27cm、深さ35cm、P₂・長径31cm、短径30cm、深さ48cm、P₃・長径46cm、短径26cm、深さ73cm、P₄・長径28cm、短径27cm、

IV 遺跡の調査

深さ30cm、P₅・長径29cm、短径15cm、深さ56cm、P₆・長径26cm、短径24cm、深さ33cm、P₇・長径33cm、短径30cm、深さ59cmを測る。

遺物 土器は破片が23点検出されたのみであった。石器は打製石斧4点が出土した。

2 土 坑

本遺跡では縄文時代の土坑が当初23基検出されたが、その後の精査の結果、古墳時代の住居址の床面で検出されたJ D-1号土坑・J D-2号土坑は、その形状および遺物の出土状態、焼土検出状況等から住居址であると判断し、J-1号住居址・J-2号住居址と名称変更した。また、J D-3・4号土坑についても、同様の理由から、J-3号住居址、J-4号住居址と名称変更を行った。従って本報告書では、J D-1～4号土坑は欠番扱いとなり、検出された土坑の合計は19基となった。そのうちJ D-21号土坑は、その形状からいわゆる陥し穴と思われる。

J D-5号土坑

位置 X113、Y20グリッド 挿図 Fig. 18

形状 長径169cm、短径140cmの楕円形を呈し、深さ62cmを測る。断面形はややオーバーハングしており、底面は平坦である。

J D-6号土坑

位置 X113、Y20グリッド 挿図 Fig. 18

形状 長径80cm、短径72cmの楕円形を呈し、深さ26cmを測る。平坦な底面。

J D-7号土坑

位置 X115、Y21グリッド 挿図 Fig. 18

形状 長径84cm、短径76cmの円形を呈し、深さ42cmを測る。底面は平坦。

J D-8 a号土坑

位置 X115、Y21・22グリッド 挿図 Fig. 18 写真 PL. 5

形状 長径132cm、短径130cmの円形を呈し、深さ55cmを測る。底面は平坦であった。J D-8 bと重複する。

J D-8 b号土坑

位置 X115、Y21・22グリッド 挿図 Fig. 18 写真 PL. 5

形状 J D-8 aと重複しているが、推定長径130cm、短径125cmの円形を呈し、深さ36cmを測る。底面は比較的平坦であった。

J D-9 a号土坑

位置 X115・116、Y21・22グリッド 挿図 Fig. 18

形 状 長径206cm、短径164cm、深さ73cmの梢円形を呈する。底面は平坦であった。JD-9bと重複関係をもつ。

JD-9b号土坑

位 置 X115・116、Y21・22グリッド 挿 図 Fig. 18

形 状 JD-9aと重複し、北壁を切られているが、長径150cm、短径120cmの梢円形と推定できる。深さは24cmを測る。底面は平坦。

JD-10号土坑

位 置 X115、Y22・23グリッド 挿 図 Fig. 18

形 状 JD-20と重複するため、南壁の一部が破壊されていたが、長径122cm、短径117cmの円形と推定できる。深さは17cmを測る。

JD-11号土坑

位 置 X114、Y23・24グリッド 挿 図 Fig. 18

形 状 長軸190cm、短軸180cmの隅丸六角形を呈し、深さ95cmを測る。底面は比較的平坦であり、壁はどれもオーバーハングしている。

遺 物 石錐(40)が1点出土した。

JD-12号土坑

位 置 X113・114、Y24グリッド 挿 図 Fig. 18

形 状 長径90cm、短径86cmの円形を呈し、深さ23cmを測る。底面は平坦である。

JD-13a号土坑

位 置 X114、Y24・25グリッド 挿 図 Fig. 19

形 状 JD-13bと重複し、北東の壁の一部が確認できなかつたが、長径100cm、短径98cmの円形と推定できる。深さは32cmを測る。底面は平坦であった。

JD-13b号土坑

位 置 X114、Y24グリッド 挿 図 Fig. 19

形 状 長径116cm、短径100cmの円形を呈し、深さ60cmを測る。底面は平坦。JD-13aと重複する。

遺 物 削器(41)1点が出土した。

JD-14号土坑

位 置 X115・116、Y25グリッド 挿 図 Fig. 19

形 状 長軸200cm、短軸158cmの不整形を呈し、深さ16cmを測る。底面は全体的に平坦であり、壁は緩やかに立ち上がる。

JD-15号土坑

位 置 X112、Y22グリッド 挿 図 Fig. 19

形 状 長径142cm、短径123cmの梢円形を呈し、深さ36cmを測る。底面は比較的平坦である。

J D-16号土坑

位置 X 112・113、Y 22グリッド 挿図 Fig. 19

形状 長径124cm、短径98cmの楕円形を呈し、深さ40cmを測る。底面は凹凸が多かった。

J D-17号土坑

位置 X 114、Y 23グリッド 挿図 Fig. 14・19

形状 J-1と重複するため北側の壁は破壊されていたが、長径93cm、短径92cmの楕円形と推定できる。深さは48cmを測る。底面は平坦であった。

遺物 石核(42)が1点出土した。

J D-18号土坑

位置 X 114、Y 21グリッド 挿図 Fig. 14・19

形状 J-1と重複関係をもち、南側の壁は破壊されていたが、長径120cm、短径104cmの楕円形と推定できる。深さ83cmを測る。西側の壁が袋状にややふくらんでいる。底面は平坦である。

遺物 凹石(43)が1点出土した。

J D-19号土坑

位置 X 114、Y 22・23グリッド 挿図 Fig. 14・19 写真 PL. 5

形状 J-1と重複するが、長径150cm、短径126cmの楕円形と推定できる。深さは75cmを測る。平坦な底面を持つ。

遺物 石錐(44)1、打製石斧(45)1点が出土した。

J D-20号土坑

位置 X 115、Y 22・23グリッド 挿図 Fig. 19

形状 長径100cm、短径88cmの楕円形を呈し、深さ82cmを測る。底面は平坦であり、壁は垂直に立ち上がる。J D-10と重複関係をもつ。

J D-21号土坑

位置 X 115、Y 29グリッド 挿図 Fig. 19

形状 長軸213cm、短軸130cmの不整形を呈するが、底面は隅丸長方形である。深さは87cmを測る。底面は平坦で2個の円形の坑底穴を有する。規模は径18cm、深さ40cmである。いわゆる陥し穴と考えられる。

J D-22号土坑

位置 X 115・116、Y 22・23グリッド 挿図 Fig. 19

形状 長径168cm、短径162cm、深さ56cmの楕円形を呈する。垂直な壁をもち、床面は平坦。

J D-23号土坑

位置 X 115・116、Y 22グリッド 挿図 Fig. 19 写真 PL. 5

形状 長軸190cm、短軸104cmの不整形を呈し、深さ56cmを測る。平坦な床面をもつ。

出土土器 (Fig. 36~39, PL. 13~17)

縄文時代の住居址及び土坑から出土した土器のうち、接合、復元できたものは合計10点であった。

J-1

2は平行沈線文を斜位と横位にめぐらし、空白部は半円状の沈線をめぐらす胴部片である。

4はR Lの地文に平行沈線を間隔をおいてめぐらし、下部にはR Lの地文部だけを残している。

3は深鉢胴部片であり、4と同様に横位の平行沈線とR Lの縄文をめぐらしている。

J-2

5は外反して開く深鉢で、口唇部は肥厚している。口縁部は波状をなし、口唇部には刻み、その下に沈線、R Lの縄文を横位にめぐらしている。さらにその下は平行沈線を菱形に組んで、その中を竹管文で埋めており、以下にはそれら文様の繰り返しがみられるようである。

7・8はキャリバー形深鉢の口縁部で、それぞれ平行沈線文の間を斜位に沈線をめぐらせている。

1は外反気味に開く深鉢で、口縁部は2単位の波頂部をもつ。浮線文は口縁部から2本1組で横位に、胴部中頃まで間隔をあけて施し、中頃は曲線等で変化をみせている。さらに、間をR Lの縄文で充填している。

6はキャリバー形に口縁部が開く深鉢の口縁～胴部分である。口唇部から2本1組の沈線を横位、斜位、山形にめぐらし、胴部では横位に、さらにその下部はR Lの縄文を充填している。

Aは底部～胴部を残存する深鉢で、沈線を2～3本1組で間隔を開けて横位にめぐらし、その間をR Lの縄文で充填している。

J-3

Cは外反気味に口縁部が開く深鉢である。口唇部に刻みをもち2本1組の沈線文を横位にめぐらし、その下部では菱形の中を渦巻文で埋める文様をなす。

16ははじめに2本1組の沈線を横位にめぐらし、その後にR Lの縄文を充填している深鉢である。

18は口唇部に刻み、その下に隆帯、平行沈線、隆帯をめぐらし、その下の胴部には貝によるV字形の連続押型文様を形成している深鉢である。

19は外反気味に開く深鉢で波頂部をもつ。2本1組の平行沈線文の間をR Lの縄文で充填している。

JD-19

25は口縁部に多孔をもつ浅鉢である。

3 包含層の遺物

土器 (Fig. 36~39, PL. 15~17)

縄文時代の包含層は、遺構が分布する X113~X116, Y20~Y30 グリッド、X116~X120, Y56~Y67 グリッドとほぼ同様な範囲にみられた。ここは台地の縁辺部にあたり、緩く傾斜する調査区に流れ込むような形で多くの土器が検出された。出土土器はほとんどが前期のものであり、大きく諸磯式土器、黒浜式、浮島興津式に分けられる。このうち主体となるものは諸磯式であり、ほかのものはごく少数であった。さらに諸磯式を、A 種沈線文系土器、B 種浮線文土器、C 種爪形文土器、D 種縄文を施すものに分類した。

Tab. 2 縄文時代の石器一覧

器種	区分				J	J	J	J	土	包	合
	1	2	3	4					坑	含	計
石頭器			0	1	2	0	1	16	20		
尖頭器	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
石錐	0	2	1	0	1	0	1	1	1	5	
石匙	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	
削器	2	1	6	0	1	15	25				
打製石斧	4	1	4	4	4	1	15	29			
磨製石斧	0	0	0	0	0	0	1	1	1		
磨石・凹石・敲石	2	0	3	0	1	11	17				
三角錐形石器	0	0	0	0	0	0	1	1	1		
異形石器	0	0	0	0	0	0	1	1	1		
蜂の巣石	0	0	0	0	0	0	1	1	1		
礫器	0	0	0	0	0	0	1	1	1		
石棒	0	0	1	0	0	0	1	2			
石核	0	2	1	0	1	5	9				
合計	9	8	18	4	6	69	114				

Tab. 3 縄文時代石器石材一覧

石材群 種類	第1群石材				第2群石材				第3群石材				第4群石材				第5群石材				合計	
	A 黒 チ 曜	B チ ヤ ト	C 珪 質 成 岩	D 玉 質 成 岩	E 黒 質 色	F 質 色	G 点 紋 質 色	H 黑 色	I 灰 色	J 變 色	K 細 粒	L 石 英 閃 綠	M 輝 輝 綠	N ホ ル ン フ エル	O 玄 武 岩	P 雲 母 石 英 片 岩	Q 蛭 石 英 片 岩	R 砂 岩				
石頭器	4	10	1	1				3											1	20		
尖頭器		1																			1	
石錐		1		4																	5	
石匙			1																		1	
削器	2	1	19		1	1	1														25	
打製石斧				16	2			2	3		1	2					1	2	1	29		
磨製石斧																					1	
磨石・凹石・敲石					1				1	1										13	1	17
三角錐形石器					1																1	
異形石器	1																				1	
蜂の巣石																				1	1	
礫器																				1	1	
石棒		2			2			5													2	
石核		2																			9	
合計	4	17	1	1	45	2	1	9	3	1	3	1	1	2	2	1	16	4	114			

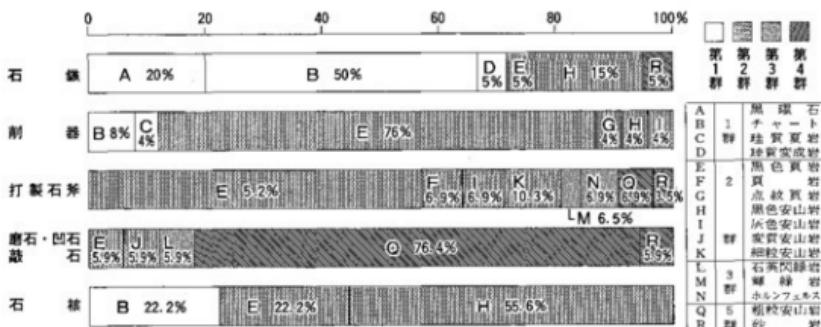
石 器 (Fig. 43-46, PL. 18-21)

石器は合計114点（そのうち熊の穴遺跡からは109点）検出された。器種でみると、打製石斧、削器、及び石鎌が目立つ。石材では、黒色頁岩が全体の約4割を占める。そのほかにはかなり良質なチャートが、石器あるいは剣片として多量に検出されている。それに比較すると黒曜石の出土は極めて少なかった。

これらの石材を産地との距離、サイズ、硬さや緻密さ、粘りなどから便宜的に第1から第5群石材に分類したのがTab. 4である。第1群石材は緻密な加工に適する石材である。本遺跡ではチャートが多いが、遠隔地から搬入された黒曜石や珪質頁岩については少ないことがわかる。小形の石器に利用されることは産地との移動の距離、産出形状、粘りの弱さが考慮された結果といえよう。第2群石材は県内の一般的石器石材である黒色頁岩・黒色安山岩を代表格とするものである。中形の加工石器に利用されることは、大きい素材が提供され、粘りがあり、産地が近いことの結果といえる。ただ、中には小形の石器にも利用されている。第3群石材としたものは、再加工には向きで円盤のまま利用されるものである。目的に適うサイズ・形状の素材を近くの河床から採取したと考えられる。第4群石材とした雲母石英片岩も長く利用される石材で、後期以降は石棒などの第2の道具に多用される石材である。第5群石材とした粗粒安山岩は赤城山や榛名山を形成している岩石であり、山麓では至るところにみられる。きめが粗く柔らかい石材であり巨大な原材料も入手が可能である。磨石・凹石や蜂の巣石に利用されることが多いが、打製石斧等に利用されることもある。

それぞれの遺物分布については、種類別に偏在性はあまりみられなかった。斜面上に不規則に散在していたことから、集落から廃棄行為としてなされた結果と考えられる。

Tab. 4 石器種別石材構成



(2) 古墳時代の遺構と遺物

調査の結果、古墳時代の遺構は竪穴住居址10軒、古墳1基、井戸1基、土坑27基、溝1条が検出された。これらの遺構は基本的にソフトローム上面で確認され、その出土遺物からみても古墳時代前期の所産であると考えられる。住居址は本調査区内の北側にまとまって検出されたが、今年度の調査区が西から東の緩やかな傾斜地上であることから、西方にあたる台地の頂上付近に向かって、さらに集落が延びるものと推定できる。また、出土遺物をみると祭祀性をもつと思われるものが比較的多く検出されている。

M-1号墳は上毛古墳総覧には記載もれのものであったが、その形状・規模等から後期群集墳である上横原古墳群との関連性が期待できると思われる。

1 住居址

H-1号住居址

位置 X114・115、Y20~22グリッド 標高 149.2m

挿図 Fig. 20 写真 PL. 6

面積 15.7m² 方位 N-38°-E

形状 長軸4.81m、短軸3.72mの長方形を呈する。壁高46cm、壁の掘り込み角度は105°を測る。

床面 全体的に平坦に形成されていたが、使用面がハードローム層まで掘り込まれていなかつたので、全体的にやわらかく検出が難しかった。住居に関係する柱穴、貯蔵穴等は認められなかった。また、南西隅に棒状の炭化材がまとまって検出された。

炉址 中央部よりやや南西寄りの所で焼土が検出されたが、確認できなかった。

遺物 小甕(21)及び器台1点が出土している。出土遺物総数は390点である。

重複 北壁の一部がJD-7と、住居中央から南にかけて、J-1、JD-8、JD-18と重複し、本住居が新しい。

H-2号住居址

位置 X113・114、Y22~24グリッド 標高 155.9m

挿図 Fig. 21

面積 20.7m² 方位 N-24°-E

形状 長軸5.33m、短軸4.71mの長方形を呈する。壁高45cm、壁の掘り込み角度は95°を測る。

床面 凹凸面が少なくほぼ平坦に形成されていたが、西半分はいわゆるベッド状遺構と思われる、床面より一段高い部分が認められた。また、わかりにくく土層のため、床面や壁に

至っても検出が難しかった。住居に関係する柱穴、貯蔵穴等は認められなかった。

炉 址 住居中央部のやや北東寄りに検出された。形状は楕円形を呈する。長径83cm、短径68cm、深さ13cmを測る。

遺 物 小壺(20)、小甕(22)のほかに甕が1点出土している。出土遺物総数は523点である。

重 複 住居北側でJ-1、JD-17、JD-19と、東壁の一部がJD-11と、南側でJD-12と重複し、本住居が新しい。

H-3号住居址

位 置 X115・116、Y24・25グリッド **標 高** 156.0m

挿 図 Fig. 22 **写 真** PL. 6

面 積 11.3m² **方 位** N-16°-E

形 状 長軸4.25m、短軸3.20mの長方形を呈する。壁高36cm、壁の掘り込み角度は100°を測る。

床 面 使用面がハードローム層まで掘り込まれていなかったため、やわらかく検出しにくかったがほぼ平坦に形成されている。南西部分については黒土が埋まり、他の床面より下がるようにみえた。住居に関係する柱穴、貯蔵穴等は認められなかった。

炉 坂 北東隅に検出された。円形を呈し、長径60cm、短径59cm、深さ12cmを測る。

遺 物 壺(23)と小壺(24)が出土。出土遺物総数は210点である。

重 複 住居北西でJ-2と重複し、本住居が新しい。

H-4号住居址

位 置 X112-114、Y17・18グリッド **標 高** 156.9m

挿 図 Fig. 23 **写 真** PL. 6

面 積 14.0m² **方 位** N-60°-E

形 状 長軸4.06m、短軸3.85mの正方形を呈する。壁高30cm、壁の掘り込み角度は95°を測る。

床 面 凹凸面が少なくほぼ平坦に形成されているが、全体的にソフトロームのやわらかい床面である。住居に関係する柱穴、貯蔵穴等は認められなかった。

炉 坂 住居中央部西寄り(1号炉址)、西壁際中央部(2号炉址)、中央部南東寄り(3号炉址)の3基を検出。1号炉址は楕円形を呈し、長径121cm、短径83cm、深さ18cmを測る。2号炉址は円形を呈し、長径73cm、短径71cm、深さ9cmを測り、3号炉址は円形を呈し、長径39cm、短径38cm、深さ9cmを測る。

遺 物 塚(25)、小壺(26)、高杯(27)が出土している。出土遺物総数は163点である。

H-5号住居址

位 置 X115・116、Y28・29グリッド **標 高** 156.0m

H 重跡の調査

挿図 Fig. 24 写真 PL. 6

面積 $(14.5)m^2$ 方位 $N - 0^\circ - E$

形状 長軸 $(4.90)m$ 、短軸 $3.20m$ の長方形を呈する。壁高は $35cm$ 、壁の掘り込み角度は 110° を測る。

床面 ほぼ平坦に形成されているが、全体的にやわらかかった。炉址の検出により床面と判明した。住居に関係する柱穴は認められなかった。

炉址 北東隅に検出された。楕円形を呈し、長径 $53cm$ 、短径 $41cm$ 、深さ $10cm$ を測る。

貯蔵穴 南東隅に検出 (P_1)。規模は長径 $40cm$ 、短径 $30cm$ 、深さ $21cm$ を測る。

遺物 壺(28)のほかにも壺が2点出土している。出土遺物総数は168点である。

H-6号住居址

位置 X 116・117、Y 30・31グリッド 標高 $155.1m$

挿図 Fig. 25 写真 PL. 6・7

面積 $19.2m^2$ 方位 $N - 63^\circ - E$

形状 長軸 $5.00m$ 、短軸 $4.62m$ の正方形を呈する。各辺とも直線的であり、壁の掘り込み角度は 97° 、壁高は $100cm$ を測る。

床面 平坦に形成されており、全体的に踏み固められた堅い面が認められた。焼失した住居のためか、多量の炭化材が中央部から壁に向かって放射状に散在していた。

炉址 住居中央北西寄りに検出された。円形を呈し、長径 $53cm$ 、短径 $51cm$ 、深さ $11cm$ を測る。炉辺石2個を有する。

周溝 南西から南東にかけて一部存在していた。幅 $3 \sim 10cm$ 、深さは平均 $3cm$ 程度である。

柱穴 4個の主柱穴が検出された。各々の規模は、 P_1 ・長径 $52cm$ 、短径 $38cm$ 、深さ $86cm$ 、 P_2 ・長径 $27cm$ 、短径 $25cm$ 、深さ $49cm$ 、 P_3 ・長径 $46cm$ 、短径 $37cm$ 、深さ $58cm$ 、 P_4 ・長径 $24cm$ 、短径 $24cm$ 、深さ $51cm$ を測る。

貯蔵穴 南西隅 (P_5 ・長径 $98cm$ 、短径 $80cm$ 、深さ $77cm$) と南東隅 (P_6 ・長径 $67cm$ 、短径 $47cm$ 、深さ $43cm$) に2基検出された。

遺物 小壺(30)、椀(31)、高杯(32)、器台(33)、壺(34)が出土した。ほかに土玉(29)、壺1点がある。また床面から敲石1、埋土から蜂巣石1が検出された。出土遺物総数は365点である。

H-7号住居址

位置 X 114・115、Y 30~32グリッド 標高 $155.9m$

挿図 Fig. 26 写真 PL. 7

面積 $15.7m^2$ 方位 $N - 30^\circ - E$

形 状 長軸5.09m、短軸3.38mの長方形を呈する。壁の掘り込み角度は110°であったが、残存状態はあまりよくなかった。壁高は28cmを測る。

床 面 凹凸が少なくほぼ平坦に形成されているが、北から南へ向かってわずかに傾斜しており、その差は10cm程度である。全体にわたってやわらかかった。柱穴、貯蔵穴等は認められなかった。

炉 址 微量の焼土、炭化物は認められたが、炉址は確認されなかった。

遺 物 壺(37)、土玉(35)が出土している。出土遺物総数は40点である。

H-8号住居址

位 置 X115~117、Y35~36グリッド 標 高 135.6m

挿 図 Fig. 27 **写 真** PL. 8

面 積 25.9m² **方 位** N-80°-E

形 状 長軸5.81m、短軸5.61mの正方形を呈する。壁は各辺とも直線的であり、壁の掘り込み角度は115°、壁高は103cmを測る。

床 面 全体的に平坦に形成されており、踏み固められた床が認められた。また、南壁中央部に深さ5cm程度、長さ1.2m程度の間仕切り溝が検出された。

炉 址 中央よりやや北寄りに検出。形状は橢円形に近い形を呈し、長軸63cm、短軸47cm、深さ8cmを測る。炉辺石1個を有する。また、炉の北側で焼土がまとまって検出された。

周 溝 全周。幅10~25cm、深さは平均7cm程である。

柱 穴 全部で7個検出。主柱穴は、P₁・長径32cm、短径24cm、深さ56cm、P₂・30cm、短径23cm、深さ55cm、P₃・長径23cm、短径21cm、深さ55cm、P₄・長径45cm、短径24cm、深さ56cm。このほかにP₇・長径33cm、短径30cm、深さ11cm、P₈・長径44cm、短径28cm、深さ13cm、P₉・長径32cm、短径27cm、深さ16cmが確認された。

貯蔵穴 北西隅(P₅・長径72cm、短径66cm、深さ26cm)と南壁際中央よりやや東(P₆・長軸85cm、短軸61cm、深さ40cm)に検出された。

遺 物 ミニチュア壺(36)、土玉(38)、勾玉(39)、梳(40)のほかに、磨製石器1点、壺1点が検出された。出土遺物総数は863点である。

H-9号住居址

位 置 X117~118、Y48~50グリッド 標 高 154.2m

挿 図 Fig. 28 **写 真** PL. 8

面 積 15.0m² **方 位** N-12°-E

形 状 長軸4.63m、短軸4.20mの正方形を呈する。壁高は60cm、壁の掘り込み角度は100°を測る。傾斜地に位置しているため、西壁に比べ東壁の残存状態は悪かった。

床面 全体的に平坦に形成されているが、西壁際から東壁際へ徐々に傾斜する床面であり、その差は20cm程度である。踏み固められた堅い床面が全体にわたって認められた。柱穴、貯蔵穴等は検出されなかった。

炉址 中央よりやや北東寄りに検出。橢円形を呈し、長径72cm、短径58cm、深さ7cmを測る。
遺物 梱(41)、高杯(42)、甕(45)が出土している。出土遺物総数は325点である。

H-10号住居址

位置 X117・118、Y52・53グリッド **標高** 148.4m

挿図 Fig. 29 **写真** PL. 8

面積 11.8m² **方位** N-58°-E

形状 長軸3.55m、短軸3.51mの正方形を呈する。壁高は32cm、壁の掘り込み角度は100°を測るが、傾斜地に位置しているため、東壁の高さは10cm程度と極めて残りが悪かった。

床面 ほぼ平坦に形成されているが、北西から南東へ全体に傾斜している。その差は20cm程度である。

炉址 中央よりやや南東寄りに検出された。円形を呈し、長径85cm、短径82cm、深さ12cmを測る。

貯蔵穴 北隅に検出された(P₁)。橢円形を呈し、長径61cm、短径56cm、深さ41cmを測る。このほかに、P₂・長径29cm、短径28cm、深さ12cmがある。

遺物 台杯甕が1点出土している。出土遺物総数は119点である。

2 土 坑

本遺跡では土坑が30基検出されたが、その後の精査の結果、D-4号土坑についてはその形状および遺物の出土状態等から、井戸ではないかと判断し、I-1号井戸と名称変更した。さらに、D-20号土坑、D-22号土坑は、土坑と確定できなかった。従って本報告書では、D-4号土坑、D-20号土坑、D-22号土坑は欠番扱いとなり、検出された土坑の合計は27基となった。

D-1号土坑

位置 X114、Y24グリッド **挿図** Fig. 30 **写真** PL. 9

形状 長径80cm、短径74cmの円形を呈し、深さ25cmを測る。底面は凹凸が多い。

D-2号土坑

位置 X115、Y25グリッド **挿図** Fig. 30

形状 長径105cm、短径65cmの橢円形を呈し、深さ20cmを測る。断面形浅い摺鉢状。

D-3号土坑

位置 X114、Y26・27グリッド 挿図 Fig. 30

形状 長径123cm、短径110cmの円形を呈し、深さ50cmを測る。

遺物 土師器片が18点出土したが、図示できるものはなかった。

D-5号土坑

位置 X113、Y27グリッド 挿図 Fig. 30

形状 長軸68cm、短軸68cmの円形を呈し、深さ30cmを測る。

D-6号土坑

位置 X116、Y34グリッド 挿図 Fig. 30 写真 PL. 9

形状 長径62cm、短径40cm、深さ16cmの楕円形を呈する。断面形は摺鉢状。

遺物 瓢が2点出土している。

D-7号土坑

位置 X115・116、Y30・31グリッド 挿図 Fig. 30

形状 長径69cm、短径63cm、深さ33cmの円形を呈する。

D-8号土坑

位置 X113、Y29グリッド 挿図 Fig. 30

形状 長径81cm、短径71cmの楕円形を呈し、深さ22cmを測る。

D-9号土坑

位置 X114、Y27グリッド 挿図 Fig. 30

形状 長径74cm、短径67cmの円形を呈し、深さ26cmを測る。底面は平坦。

D-10号土坑

位置 X116、Y27グリッド 挿図 Fig. 30 写真 PL. 9

形状 長径102cm、短径87cmの楕円形を呈し、深さ14cmを測る。底面は平坦であった。

遺物 土師器片が11点出土したが、図示できるものはない。

D-11号土坑

位置 X114・115、Y34グリッド 挿図 Fig. 30

形状 長径43cm、短径42cmの柱穴状の小円形土坑。深さは27cmを測る。

遺物 土師器片が8点出土したが、図示できるものはなかった。

D-12号土坑

位置 X115、Y29グリッド 挿図 Fig. 30

形状 長径76cm、短径60cmの楕円形を呈し、深さ31cmを測る。

D-13号土坑

位置 X113・114、Y31グリッド 挿図 Fig. 30

形状 長径149cm、短径89cmの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。

IV 遺跡の調査

D-14号土坑

位置 X115、Y34グリッド 挿図 Fig. 30

形状 長軸80cm、短軸27cmの不整形を呈し、深さ11cmを測る。底面は平坦。

D-15号土坑

位置 X115、Y33グリッド 挿図 Fig. 30

形状 長径112cm、短径90cmの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。

D-16号土坑

位置 X115、Y33グリッド 挿図 Fig. 30

形状 長径61cm、短径59cmの円形を呈し、深さ22cmを測る。底面は平坦であった。

D-17号土坑

位置 X114、Y35・36グリッド 挿図 Fig. 30

形状 長径63cm、短径42cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。

遺物 土師器片が3点出土しただけであった。

D-18号土坑

位置 X116・117、Y34グリッド 挿図 Fig. 31

形状 長径218cm、短径76cmの楕円形を呈し、深さ29cmを測る。底面は平坦。

D-19号土坑

位置 X115、Y34グリッド 挿図 Fig. 31

形状 長径53cm、短径52cmの柱穴状の小円形土坑。深さは35cmを測る。

D-21号土坑

位置 X118、Y54・55グリッド 挿図 Fig. 31 写真 PL. 9

形状 長径162cm、短径143cmの隅円長方形を呈し、深さ171cmを測る。底面は平坦である。

遺物 小壺(50・53)、壺(51)のほかに石鎚1点が出土している。

D-23号土坑

位置 X116、Y48グリッド 挿図 Fig. 31

形状 長径109cm、短径108cmの円形を呈し、深さ40cmを測る。底面は平坦であった。

D-24号土坑

位置 X116・117、Y49グリッド 挿図 Fig. 31

形状 長径106cm、短径84cmの楕円形を呈し、深さ41cmを測る。底面は凹凸が多い。

D-25号土坑

位置 X117、Y52グリッド 挿図 Fig. 31

形状 長径51cm、短径42cmの楕円形を呈し、深さ20cmを測る。底面は凹凸が多い。

D-26号土坑

位置 X118、Y51・52グリッド 挿図 Fig. 31

形 状 長径70cm、短径68cmの円形を呈し、深さ24cmを測る。底面は凹凸が多い。

D-27号土坑

位 置 X119、Y52・53グリッド 挿 図 Fig. 31

形 状 柱穴状の小円形土坑。長径49cm、短径41cmの楕円形を呈し、深さ47cmを測る。底面は平坦であった。

D-28号土坑

位 置 X119、Y53グリッド 挿 図 Fig. 31

形 状 長径55cm、短径49cmの楕円形を呈し、深さ36cmを測る。

D-29号土坑

位 置 X118、Y53グリッド 挿 図 Fig. 31

形 状 長径57cm、短径46cmの楕円形を呈し、深さ18cmを測る。底面は平坦である。

D-30号土坑

位 置 X119、Y55グリッド 挿 図 Fig. 31

形 状 長径50cm、短径38cmの楕円形を呈し、深さ25cmを測る。底面は平坦。

3 井 戸

I-1号井戸

位 置 X115・116、Y26・27グリッド 挿 図 Fig. 32 写 真 PL. 9

形 状 長径220cm、短径188cmの楕円形を呈するが、中段から下は長方形となる。深さは223cmを測る。底面は平坦であり、壁の掘り込み角度は105°を測る。

遺 物 ミニチュア碗(46)、高杯(47)、鉢(48)、台付甕(49)、片口(52)が出土した。ほかには小甕1点、台付甕1点がある。

4 溝

W-1号溝

位 置 X116-120、Y57・58グリッド 挿 図 Fig. 8

形 状 南西から北東に向かい比高143.5cmを有する。調査区外にも延びるものと考えられるが、規模は東西の両端では幅30cm、深さ5cmであり、中央部では全体的に幅80cm、深さ20cm前後を測る。断面形はなだらかに立ち上がる。

遺 物 甕の底部が1点出土している。

5 古 墳

M-1号墳 (Fig. 33, PL. 10)

熊の穴遺跡のX 115~121、Y 38~44グリッドに位置する。上毛古墳総覧には記載もれの古墳であり、表採の段階では椎木林におおわれ、周辺よりやや土の高まりを感じる程度であった。

墳丘

表土を除去すると墳丘上には人頭大から握りこぶし大の礫が散乱していた。後にトレンチを入れたところ、As-C混じりの黒土を基盤にロームやAs-Cまじりの土などを交互に積み上げたいわゆる版築（石室近くで約2m）が認められた。すなわち、西から東へ下がる斜面上に墳丘をつくる「山寄せ」の形式である。

周堀

全般にAs-C混じりの黒褐色土に覆われていた。また、西側部分ではAs-Bの純層も認められている。ソフトロームの面まで掘りくぼめてあり、深さは0.5m~0.8m、幅は1m~3mを示し、墳丘をとりまくようにはば円形状にめぐらされていた。しかし、周堀の掘り方は不定形であり、墳丘北西方向は周堀が切れていた。また東から南にいたる所についても堀を確認できなかった。前者は渡り状遺構とも考えられる。

周堀は石室羨門前で最も深く幅も広い。その付近には人頭大からこぶし大の礫が散乱していた。また、その部分の周堀を覆っていたAs-C混じりの黒色土中からは、須恵器長頸壺の頭部分にあたる破片が出土している。

なお、周堀底部のローム面の下には粘性をもつ黒土層がある。東側の周堀の下にも同じ層が認められた。このことから、この辺りはかつて谷地が入り込んでいたところに黒色土が堆積したものと判断した。

埋葬主体部

表土を除去した段階で、墳丘のはば中央部から各石の頂部が認められたため、石室の輪郭が推定できた。

石室の中に入り込んだ土砂を取り除くと、石室内には天井を構築したと思われる最大幅1m、最大長2mの紡錘状の安山岩をはじめ、大小10個の自然石が落ちこんでいるのが確認された。羨道部にも羨道壁を構築していたと思われる50cm大の安山岩が土砂とともに崩れていた。これらを取り除いた結果、次のような石室が確認できた。

主軸方向はN-10°-Wであり、主軸長は5mを測る。形状は羨門～玄門～玄室へとつながる両袖型石室である。羨門を構成する石は片方のみ残存しており、高さ0.8m、幅0.5mではば梢円形を呈する。また羨道は奥行3m、幅0.7mを測る。側壁は二段まで残っており裏込め石で固められていた。ここを構成する石は安山岩で自然石の小口を出して積んでいた。敷石は5cm大の礫が一部に敷きつめられていた。

また、羨道と玄室の境界をなすしきみ石は人頭大の礫の長径部をつないでいた。玄門は安山岩でなっており、幅は羨道より0.8m広い1.5mを測る。この玄室も羨道同様自然石を横積みにしたいわば自然乱石積みでできており、高さは三段まで確認している。さらに、その裏を10~20cm大の円・角礫で固めている。つまり玄室は縦2m、横1.5m、高さ1mのはば長方形状を呈するものの東壁にやや膨らみ、終末期古墳の特徴を示すとされる胴張りを有していることが判明した。奥壁は、1m、高さ0.8mのはば長方形を有する。

床面には地山面に直径2~3cmの大円礫と、さらに5~7cmの大円礫をしきつめてある。また奥壁から0.6mのところに間座が構築されていた。握りこぶし大の礫を5石横に並べたもので、西の部分は欠けていた。

なお、石室は地山面を約35~40cm掘り込んだ「掘り方」の中に敷設されている。

遺物

墳丘部分では周堀でもふれたように、前庭状構造のAs-C混じりの埋土中から須恵器の長頸壺の頭部と肩部にあたる破片が出土している。接合の結果、頭部は肩部からほぼ直角に立ち上がり、徐々に外反しながら口縁部にいたるものであった。同様な長頸壺が柏川村西原古墳群にも出土していることから、底部は大きく外側に張り出した高台を有しているものと思われる。7世紀第2四半期は下らないものとみられる。

また、羨門の外には杯が出土している。口縁部が緩やかに内湾しながら立ち上がるもので、7世紀のものに比定されよう。さらに、羨道近くでは古錢「祥符通寶」と「寛永通寶」が出土している。

なお、埴輪は検出されなかった。

埋葬主体部では、間座を構成する礫の下から耳環が1つ検出された。また玄室のしきみ石近くでは釘とおぼしき鉄製品が1つ出土している。

その他

古墳丘下のAs-C混じりの黒色土層の中から器台や壺、壺など多くの土師器類が出土した。大壺(Fig. 88, PL. 24)はその破片を接合したものである。

以上述べたように本古墳は次のような特徴をもつことが明らかになった。

主軸方位N-10°-W、標高153m~156mの丘陵縁辺に立つ、いわゆる「山寄せ」の円墳であり墳丘最大径は16m、周堀を含めると22mを測る。

羨門、羨道、玄門、玄室を備えた両袖型の石室を持った古墳である。さらに石室については、しきみ石、間座、胴張りを施している。石材については輝石安山岩、角閃石安山岩などを用いている。また、遺物は7世紀前半と思われる長頸壺、杯が出ていることから時代はそれを下らないと思われる。周堀を埋めているAs-C及びAs-Bから時期はその間に求めることができるであろう。

IV 遺跡の調査

M-1号墳

墳丘

位置 X115~121、Y38~44グリッド 標高 153~156m

挿図 Fig. 33 写真 PL. 10

面積 800m²

形状 円墳

埋葬主体部

位置 X118、Y41~42グリッド 標高 154.2m

挿図 Fig. 34・35 写真 PL. 10・11

面積 5.1m² 方位 N-10°-W

形状 両袖型

(3) その他の遺構と遺物

1 落ち込み

落ち込みは合計3基検出され、O-1からO-3と名称をつけた。3基とも遺物は伴わなかつたが、ソフトローム上面で検出されたことから古墳時代前期のものと推定できる。

2 炭窯址

K-1号炭窯址

位置 X117・118、Y42グリッド 挿図 Fig. 32

形状 M-1号墳の墳丘を利用し構築されていた。全長2.70m、幅12.8mの不整形を呈し、残存壁高47cmを測る。壁面は非常によく焼けており、焼土が多量に出土した。また、東壁に積まれた切り石が良好な状態で検出された。

遺物 数点の土器片のほかに古銭（祥符通寶・寛永通寶）が出土した。

5 試掘調査

今年度の発掘調査はプラスランド予定地内の幹線道路である市道556号線、大正用水沿いの区画道路を主体として行ったが、その他に、2地点における試掘調査を実施した。このうち、本遺跡群の南東にあたる大久保の丘陵の北側及び西側を走る境界道路予定部分を試掘A区、大正用水の北側に広がる中横儀・上横儀の沖積地を試掘B区と呼ぶことにした。

(1) 試掘A区 (Fig. 5)

A区の試掘調査は東西に走る道路（長さ約420m、幅8m）、南北に走る道路（長さ約220m、幅8m）について実施した。それぞれ森林内、建物や畠があるという現況であったので、試掘可能な場所をねらって調査を行った。

調査区が非常に細長いものであったことから、既設の座標は用いず、東西道路については道路予定地の南端に、南北道路については道路の西端に沿って、幅1.3mのトレンチを設定した。確認面はソフトローム面とした。

その結果、南北道路では、表土が約10cm程ときわめて浅く、遺構、遺物とも検出されなかったが、東西道路においては西側が谷地になっていることから、表土が場所によっては2mにも及んでいた。ここでは、遺構は検出されなかったが、縄文時代後期の堀之内式と思われる深鉢（36、Fig. 39）が良好な状態で出土した。そのほかにも土器片が数点認められた。

(2) 試掘B区 (Fig. 5・10)

B区の試掘調査は本遺跡群の中央に位置する中横儀及び上横儀に広がる沖積地（南北幅約500m、東西最大幅200m、面積約10,000m²）について実施した。調査は桑・野菜等の作物の収穫を待って9月に開始した。

試掘トレンチは、Y175ラインを基準に60mピッチで設定したが、北西部においては、後期群集墳である上横儀古墳群に近いため、さらに20ピッチのトレンチを設定した。合計12本のトレンチは北からA、B、C……、Lと呼んだ。それぞれのトレンチ内の様子についてはFig. 10に示した通りである。全体的に東側は土層が水成堆積しており、遺構・遺物とも認められなかった。東側では遺構らしきものも数カ所において認められたが、全体的にまばらであり、出土遺物についても同様な結果であった。ただ、20mピッチで調査した付近においては、遺構・遺物の検出状況から遺跡地である可能性が高いと推定される。

V 成 果 と 問 題 点

先述のように赤城南麓には多くの遺跡がみられる。旧石器～奈良・平安時代にわたる数々の遺跡があるのは、古代より環境に恵まれたゆえんであろうか。

今回の調査でも縄文～奈良・平安にわたる遺構や遺物が検出された。そこで今回の調査を各時代ごとにまとめてみたい。

縄文時代

今回の調査区は南北1,000m、東西500mと広範囲であり、地形的にも標高157mの丘陵地や136mの低地と分かれることから、各地区によって特徴が異なっていた。

まず丘陵地形をなす熊の穴遺跡からは住居址4軒、縄文土器片約300点を検出した。黒浜式や北白川浮島、興津など縄文前期を彩る土器片が数点出土したが、その主体となるものは諸磯a・b式土器であった。これにより遺構の存在していた時期を解明する手がかりを得たといえる。また同時に本遺跡北方の大胡バイパス建設予定地を調査した上大屋・植越地区遺跡群と同様の文様形態を示したことから、同遺跡との関連を考える資料ともなったと考える。

大久保遺跡の柏川村との境界をなす道路予定地で堀之内式の深鉢、さらに同遺跡西向き斜面縁辺では加曾利B式の深鉢も検出した。ここでは諸磯期の土器片をみていないことから、熊の穴とは異なった、約3,500年前の生活空間だったことが考えられる。道路予定地部分のみの調査だったので、当調査区での遺構検出はできなかったが、今後の調査結果を待ちたい。

なお 上横後のいわゆる陥し穴は、位置的にみると熊の穴との関連性も考えられる。

古墳時代

古墳時代に関連しているのは熊の穴遺跡である。住居址10軒などのほか、古墳1基を検出している。M-1号墳は角閃石安山岩を伴うことや石室の形態、出土遺物の検討から7世紀前半までの構築と考えられるのに対し、住居群はAs-Cや出土遺物の様相等から4世紀中頃～5世紀に比定される。つまり住居址群の生活が先にあり、何らかの理由からその住居が廃せられた後、やや年月をおいて古墳ができたものといえる。また、M-1号墳は柏川村白藤古墳群と様相が似ており、その関連を考える手がかりを与えてくれた。

住居址については古墳よりも前の生活跡といえる。古墳丘下にあった土器群は慎重に調査をしたが遺構は認められなかった。その土器群は堆や器台など祭祀用とも思われる内容を含んでいる。このことから推すと祭祀的な性格をもつた場所であったのかも知れない。今回の調査は台地の東縁辺なので、この西側には集落の中心があるとも目される。

平安時代

遺構は大久保遺跡から住居址2軒検出されたにとどまったが、いわゆる離れ国分かどうかは断定できず、今後の調査を待つこととした。

赤井戸系土器

赤井戸式土器については、今までに太田市や桐生市、栃木県足利市周辺、さらには沼田市方面でも確認されているが、その中心は赤城山南麓地域である。

この地域の標高100mから180mの間、すなわち丘陵性台地からなる柏川、新里村、扇状地を含む低台地からなる笠懸村、赤堀町、そして前橋市荒砥地区に該期の遺跡のほとんどが分布している。ちなみに柏川村の堤頭遺跡（赤井戸式期住居址12軒）は標高158mの赤城山原形面（残丘）の南端部に、また新里村の峯岸山遺跡（同8軒）は標高159mで、赤城山麓中腹より続く比較的幅の広い赤城山原形面上に立地している。

本遺跡も赤城山麓下標高157mの丘陵に立地する等の条件から、赤井戸式期の住居址の存在が十分予想された。事実、周東隆一氏は1948（昭和23）年以来、北関東西半部の主として赤城山南麓地域における後期弥生式の研究の中で熊の穴遺跡を調査し、その土器分類成果を1967（昭和42）年に発表している。（1967、考古学ジャーナル）

赤井戸式土器は、壺、甕、瓶、高杯、小形器台、碗、手捏ね土器の7つの器種に分けられる。文様では繩文を施したものと、繩文は欠落しているが輪積み痕があるものなどに特徴を見出せる。

今回、熊の穴遺跡の土器を調査してまず気がつくのは、輪積み痕を残す口縁が多いことである。さらには繩文が見当たらないこと、そして刷毛目が目立つという特徴がある。

さて、周東氏の熊の穴遺跡出土の土器分類成果に従い、氏の調査と今回の調査をまとめると次のようであった。

A. 第1類

輪積み痕を口縁に残し、繩文を口縁と胴部に押捺したものを第1類とする。氏の調査結果では、莫大な出土土器中わずか1個体分をみただけとのことだが、今回も少数出土したのみであった。

B. 第2類

口縁に輪積み痕を残し、土器の装飾とした無文土器の総称。氏の調査では輪積み痕が1段から3段までの種別がある。今回の調査でも氏の調査時と同様、一番多く出土しているのがこの類である。その多くが胴部下半分を欠いているので、器種については判断に苦しむが口縁部を中心に判断すると1~4段までが確認された。その大半は3段のものであるが、4段も6片ほど検出されている。この輪積み痕は調整がなされ、断面は起伏に乏しくほぼ線状になる。さらに頭部では無文もあるが、刷毛目もみられる。これは一次調整により本来頭部から胴部にかけて刷毛目が施されていたものであろうが、体部はその後けずり落としたみがきにより二次調整されていったのかもしれない。また口縁内部もなで調整が主だが、明らかに刷毛目がみられるものも多い。これを遺構別にみると、各段の輪積み痕口縁が単独に出土することはなく、いずれかの段を併せて出土している。

C. 第3類

複合口縁の類である。今回の調査では1類土器と同一造構出土の例がほとんどであった。

D. 第4類

櫛描波状文を有するもので、櫛式の一種であろう。今回4片が出土しているが、いずれも口縁部や胴部の一部のみであるため判断が難しい。周東氏同様簾状文のある土器は検出できなかった。波文も乱雜で、櫛式の典型をなす波状文に比べ、波文の線の間隔が平行にみえる。

E. 第5類

S字状口縁をもつ土器群である。今回はS字状口縁のほか、石田川式土器の特徴の1つである刷毛目をもつ土器もこの類としたい。S字状口縁はS字自体が崩れ気味でしかも外に聞く様相を呈している。また頸部には横線もないことから石田川式土器の系譜をひくにしても、時代的には隆盛時を過ぎたものと思われる。今回もS字状の類型に入る口縁をもつ鉢形土器が1個体出土している。

すでに述べてきたように本遺跡では壺、壺、片口、椀、高杯、瓶、器台などが出土している。

小島純一氏の赤井戸式研究の当該土器の編年は3期にわかれ、その第3期はS字状口縁及び小形器台が共伴する。これに従っていけばH-8号住居址出土のS字状口縁や器台等から、本遺跡はⅢ期以降、すなわち古墳時代前期中葉以降に存在していたと考えられる。ちなみに住居址等はAs-C混じりの黒土に覆われていた。この点から他遺跡をみると、今年度発掘調査が行われた内堀遺跡群がAs-C降下後の古墳時代前期ということではば時を同じくする。

内堀遺跡群Ⅲの出土土器は器台、壺、壺、高杯、瓶、片口等がある。しかし、体部に繩目をもつものが多く、さらに口縁部に波状文がつく土器も数多い。S字や折り返し口縁が少ないので本遺跡に類似しているが、輪積み痕を残す口縁部は極端に少ないということである。つまり赤井戸系と櫛系、ひいては石田川系の影響を受けているものの、その割合から言えば依然在地色が強く残っていると言える。

しかるに本遺跡では、刷毛目を使った台付壺、あるいはS字状口縁などから石田川式にみられる外来系の影響と輪積み口縁などから赤井戸を主とし、折り返し口縁をもつ片口などから櫛などの在地系の影響が混然一体となっている様相を呈す。

赤井戸式土器体部に見られる繩文が消えていく動向を新しいとすれば、本遺跡は内堀遺跡群より新しい時期といえる。しかし、文化もしくは土器の技法の伝播の速さや、在地民の生活の強さからみると時期を一概に決めることはできない。

荒砥地区を中心に赤井戸式土器の流れをくむ土器の出土をみると、富田遺跡群のH-50号住居址出土の壺（巻きあげ痕、部分的に刷毛目が残る）がある。これは櫛式土器の壺（口縁部横ナデ、波状文は口唇部、口縁部及び胴部に施文。折り返し口縁）を共伴しており、As-C降下直前の住居である。また、諫訪西遺跡H-5号住居址では、壺型土器が3個と手捏ね土器が出土しているが、その輪積み痕は10段以上残るものもあり、刷毛文も認められている。これは4世紀終末の住

居とみられている。

このように本地区においては、本遺跡と時期を相前後とした遺跡が数多くみられる。そこで本遺跡の出土器種から特色を述べてみる。

すでに述べたように本遺跡の出土遺物は器台やミニチュア土器等、いわゆる祭祀性のものが多い。特にM-1号墳丘下においては顕著で、器台や塔がそろって出土している。しかも大高坏等には坏部の稜線や深さ、畿内の欠山型の器台の台部は底部が大きく広がる様相から畿内東海系の影響がみられる。以上の点からさらに多数の土器群が二次焼成痕を残したことからすると墳丘下は祭祀とは関係なかったのか。ちなみに近くのI-1号戸でもミニチュア壺、小甕など祭祀に関係あるとみられる遺物が出土している。本地域は台地縁辺のためかこの古墳時代前期以降の住居以後生活の跡はみられない。ただ古墳の出現を待つのみである。

従って集落の研究としては、来年度以降実施される西隣の斜面の調査が待たれるところである。きっともっと大きな住居ができるにちがいない。

古墳時代の一時期に出現し、忽然と去っていった住民は一体どこに行ったのであろう。

赤城山は彼らに何をつぶやいたのであろうか。ただ風のみぞ知るところであろうか。

結 語

今回の目的は、55haもの規模を持つ通称ブ拉斯ランド建設予定地を縦横断する幹線道路予定地の文化財発掘調査にあった。

本地は「上毛古墳総観」や周東隆一氏の「北関東の後期弥生式土器」の研究に見られるように、古墳をはじめとする数々の遺構、遺物が眠っている、いわば文化財にとっては貴重な地であるといえる。時代別に見ても縄文～平安と長い時間にわたる存在が確認されたことで、古代の人々にとって生活しやすいところだったようである。

今後予定される発掘地は次第に台地中央へと進んでいくことから、今回の研究は横浜研究の嚆矢ともいえるのでできれば現状のまま永く保存していくことが望ましい。残念ながら今回の遺構の現状保存は不可能であった。しかし、今後の研究についてはできる限り保存を心がけて頂くよう切に望むものである。

参 考 文 献

- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1985 「梅久保遺跡群Ⅰ」
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988 「梅久保遺跡群Ⅴ」
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988 「梅久保遺跡群Ⅵ」
- 前橋市教育委員会 1988 「梅久保遺跡群の発掘調査Ⅲ」
- 群馬県教育委員会 1984 「昭和58年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報」
- 群馬県教育委員会 1985 「昭和59年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報」
- 群馬県教育委員会 1985 「足利遺跡」
- 群馬県 1988 「群馬県史 黄利編Ⅰ 原始古代Ⅰ 旧石器・縄文」 群馬県史編さん室
- 大胡町教育委員会 1986 「上大屋・穂郷地区遺跡群」
- 柏川村教育委員会 1985 「柏川村の遺跡」
- 柏川村教育委員会 1985 「西原古墳群 K5」

Tab. 5 楠文時代の石器観察表

番号	出土位置	器種	長	幅	厚	重さ	石材	備考
1	J-1	尖頭器	3.3	2.1	0.9	4.8	チャート	1の尖頭器は本遺跡唯一のものであり木葉形をなす。2・3は削器であるが3は刃部の作り出し調整が行き届いているものである。4~7は打製石斧である。5は装着部側縁にえぐりがあり、内厚なのが特徴。7は刃部に比べ基部幅が短い、いわば瘤状の形態を示す。8・9は側縁及び平坦面中央部に摩耗痕を残す。
2	J-1	削器	6.7	2.6	2.3	61.3	黒色頁岩	
3	J-1	削器	13.9	1.9	1.8	17.8	黒色頁岩	
4	J-1	打製石斧	5.6	5.3	1.7	55.0	黒色頁岩	
5	J-1	打製石斧	8.1	5.6	2.1	111.6	黒色頁岩	
6	J-1	打製石斧	7.3	4.7	1.7	69.0	頁岩	
7	J-1	打製石斧	7.7	6.0	1.2	67.6	黒色頁岩	
8	J-1	磨石	11.3	7.6	3.9	515.0	粗粒安山岩	
9	J-1	磨石・凹石	11.2	7.5	3.9	550.0	石英閃綠岩	
10	J-2	石鍬	2.2	1.6	0.4	1.1	チャート	
11	J-2	石鍬	3.5	1.1	0.6	1.9	黒色頁岩	
12	J-2	石鍬	4.4	1.9	1.0	6.4	黒色頁岩	
13	J-2	石匙	5.3	1.1	1.0	8.5	黒色頁岩	
14	J-2	削器	7.1	0.9	1.1	27.0	黒色頁岩	
15	J-2	打製石斧	3.8	3.2	0.9	15.6	ホルンフェルス	
16	J-2	石核	7.0	4.6	4.6	187.2	黒色安山岩	
17	J-2	石核	7.0	6.3	3.0	177.0	黒色頁岩	
18	J-3	石鍬	2.3	1.4	0.3	0.6	チャート	
19	J-3	石鍬	2.5	1.3	0.3	1.0	チャート	
20	J-3	石鍬	2.2	1.4	0.5	1.4	チャート	
21	J-3	削器	6.1	0.9	1.0	29.0	黒色頁岩	
22	J-3	削器	5.4	4.4	2.1	39.8	チャート	
23	J-3	削器	7.6	1.1	1.1	58.7	黒色頁岩	
24	J-3	削器	6.2	5.0	1.0	25.4	黒色頁岩	
25	J-3	削器	3.1	2.0	0.8	4.3	チャート	
26	J-3	削器	6.4	4.4	0.8	23.0	黒色頁岩	
27	J-3	打製石斧	5.2	3.3	2.1	51.0	粗粒安山岩	
28	J-3	打製石斧	5.3	5.4	1.9	69.8	黒色頁岩	
29	J-3	打製石斧	3.1	2.9	1.1	10.5	頁岩	
30	J-3	打製石斧	7.0	5.9	1.6	66.6	黒色頁岩	
31	J-3	磨石	8.0	6.5	3.2	240.0	粗粒安山岩	
32	J-3	凹石	8.5	8.4	4.5	410.0	粗粒安山岩	
33	J-3	敲石	8.9	4.8	4.9	335.0	変質安山岩	
34	J-3	石棒	10.5	3.6	2.5	178.0	変玄武岩	
35	J-3	石核	8.0	6.9	3.1	158.0	黒色安山岩	
36	J-4	打製石斧	9.5	5.8	2.1	121.7	黒色頁岩	36は撥形状の打製石斧である。
37	J-4	打製石斧	15.2	9.2	3.7	570.0	輝綠岩	
38	J-4	打製石斧	10.3	6.6	2.0	144.5	ホルンフェルス	
39	J-4	打製石斧	9.7	5.5	1.5	65.5	黒色頁岩	

番号	出土位置	器種	長	幅	厚	重さ	石材	備考
40	J D -11	石錐	3.1	2.2	0.6	2.9	黒色頁岩	
41	J D -13	削器	8.7	3.2	2.4	130.4	珪質頁岩	
42	J D -17	石核	4.5	3.2	2.8	39.0	黒色安山岩	
43	J D -18	凹石	9.8	7.5	6.2	615.0	粗粒安山岩	
44	J D -19	石錐	2.1	1.6	0.5	1.2	黒曜石	
45	J D -19	打製石斧	4.7	3.3	0.8	12.9	黒色頁岩	
46	D -21	石錐	1.9	1.6	0.4	0.9	珪質変成岩	
47	X114Y 28	石錐	2.4	1.3	0.3	0.6	チャート	
48	X118Y 63	石錐	1.7	1.1	0.3	0.6	黒色頁岩	
49	X118Y 62	石錐	1.6	1.1	0.3	0.4	チャート	
50	X120Y 65	石錐	3.0	1.9	0.4	1.6	チャート	
51	X118Y 44	石錐	2.4	2.2	0.4	1.5	黒色安山岩	
52	X117Y 59	石錐	2.1	1.8	0.2	0.6	チャート	
53	X118Y 54	石錐	1.6	1.1	0.3	0.4	黒色安山岩	
54	X115Y 42	石錐	1.5	1.4	0.3	0.6	チャート	
55	X114Y 22	石錐	1.8	1.4	0.4	0.8	黒曜石	
56	X116Y 26	石錐	3.4	1.9	0.5	1.7	チャート	
57	X117Y 40	石錐	2.3	1.8	0.3	0.8	黒曜石	
58	X116Y 26	石錐	2.6	1.5	0.4	1.1	黒曜石	
59	X114Y 34	石錐	2.0	1.6	0.3	0.8	チャート	
60	X157Y 233	石錐	2.2	1.4	0.2	0.6	砂岩	
61	X128Y 239	石錐	2.6	1.7	0.4	1.4	黒色安山岩	
62	X115Y 21	石錐	6.3	1.4	0.2	21.3	黒色頁岩	
63	X113Y 21	削器	6.1	5.9	1.9	69.7	黒色頁岩	
64	X115Y 20	削器	6.4	6.3	1.5	50.5	黒色頁岩	
65	X114Y 23	削器	4.5	3.6	1.0	16.6	黒色頁岩	
66	X119Y 59	削器	13.0	6.1	1.2	98.2	黒色頁岩	
67	X115Y 28	削器	3.7	3.3	0.7	4.5	黒色頁岩	
68	X129Y 240	削器	1.4	1.9	2.1	20.5	黒色頁岩	
69	X118Y 58	削器	7.8	4.4	1.5	48.9	黒色頁岩	
70	X119Y 59	削器	8.5	5.3	1.0	40.0	黒色頁岩	
71	X116Y 21	削器	5.8	5.0	0.9	26.3	灰色安山岩	
72	X116Y 56	削器	7.1	4.3	1.8	70.2	黒色頁岩	
73	X113Y 20	削器	5.2	3.5	1.0	13.5	黒色頁岩	
74	X118Y 62	削器	7.2	1.4	1.3	59.4	黒色頁岩	
75	X118Y 60	削器	7.6	5.5	1.0	44.2	黒色頁岩	
76	X113Y 22	削器	4.3	3.6	1.5	22.2	黒色安山岩	
77	X113Y 22	削器	9.7	6.7	1.3	94.8	点紋頁岩	
78	X118Y 62	打製石斧	3.9	3.1	0.9	16.9	細粒安山岩	

46～61は石錐である。46は平基無茎石錐で、基部がほぼ直線をなす。54も同類であるが基部はやや弧をえがく。円基石錐の部類に入るものが、47～61（54を除く）はいずれも基部にえぐりが入る凹基無茎石錐の類である。47や50、56、60など絶長のものが多いのが特徴である。

62は石錐である。黒色頁岩製で不定形な削片の一端に両端から加工、調整したものである。

63～77までは削器である。削片の側縁を調整し刃部を作っている。特に68は黒色頁岩製で、刃部の作り出しが鋭くなっている。本品は他の削器と異なる中横後遺跡出土であることから、後期のものと推定される。63～65・67・71・73・76・77はX113～118、Y20周辺から出土しており、66・70・72・74・75はX115、Y60周辺に出土している。概して前者は後者に比すると、石器自体が小さく材質も黒色頁岩などのほか、灰色安山岩、点紋頁岩などバラツキがある。

78は92は打製石斧である。83は装着部側縁に

番号	出土位置	器種	長	幅	厚	重さ	石	材	備考
79	X115Y 21	打製石斧	4.9	4.8	1.7	34.9	黒色頁岩		えぐりが入り、比較的肉厚になっている。82は側縁が直線的で、断面もほぼ直線形を示す。
80	X128Y 239	打製石斧	7.1	5.0	1.8	65.1	黒色頁岩		88や90は刃部幅に比べて、基部幅が小さい腰状を呈している。86や87は装着部側縁が平行ではあるが、刃部が幅広になっている。特に86の断面形状は反りが認められる。
81	X113Y 24	打製石斧	11.3	4.9	1.4	84.0	粗粒安山岩		
82	X119Y 64	打製石斧	9.4	4.6	1.9	117.4	砂岩		
83	X118Y 56	打製石斧	12.5	5.6	2.3	170.2	黒色頁岩		
84	X114Y 26	打製石斧	7.0	4.3	1.6	35.6	黒色頁岩		
85	X114Y 21	打製石斧	8.3	5.9	2.4	138.2	粗粒安山岩		
86	X119Y 58	打製石斧	9.7	5.9	2.0	94.1	黒色頁岩		
87	X116Y 51	打製石斧	9.6	6.1	2.3	158.6	粗粒安山岩		
88	X113Y 25	打製石斧	9.4	5.2	1.4	70.0	灰色安山岩		
89	X114Y 27	打製石斧	6.2	4.5	2.0	69.0	灰色安山岩		
90	X114Y 21	打製石斧	7.2	5.2	1.9	56.0	黑色頁岩		
91	X118Y 61	打製石斧	6.3	5.7	1.7	76.1	黑色頁岩		
92	X116Y 22	打製石斧	8.8	5.3	2.1	122.7	黑色頁岩		
93	H-6	敲石	12.8	5.7	5.2	420.0	黒色頁岩		93~101は磨石・凹石・敲石類である。94は多孔質の粗粒安山岩製で半分欠損している。片面の中央に集中打痕跡が認められる。96も片面のみ集中打痕がみえる。97は摩耗痕と敲打痕を認めることができる。98は集中打痕及び摩耗痕とともに認められる構造形の砂岩である。99は上・下後に摩耗痕がある。100~103は凹石であるが特に102は両面に集中打痕が形成されている。
94	X122Y 83	凹石	7.7	6.8	4.5	255.0	粗粒安山岩		
95	IE19 表採	凹石	8.4	7.4	4.1	320.0	粗粒安山岩		
96	X157Y 235	凹石	10.3	5.5	6.7	500.0	粗粒安山岩		
97	X113Y 18	磨石・敲石	7.6	10.0	5.8	700.0	粗粒安山岩		
98	X119Y 59	磨石・凹石	13.0	6.0	2.3	250.0	砂岩		
99	X114Y 21	磨石	9.0	6.7	3.9	350.0	粗粒安山岩		
100	X119Y 63	凹石	9.5	6.1	4.3	220.0	粗粒安山岩		
101	X115Y 26	凹石	8.9	8.2	4.5	390.0	粗粒安山岩		
102	X114Y 24	凹石	7.1	7.0	5.5	330.0	粗粒安山岩		
103	X114Y 26	凹石	11.1	8.8	4.8	600.0	粗粒安山岩		
104	X118Y 62	三角錐形石器	4.7	3.3	3.0	57.0	黒色頁岩		104は両側縁は裁打によってえぐるように加工したものである。105は用途不明である。材質はチャートで諸職住居址周辺から出土している。
105	X114Y 28	異形石器	3.8	2.9	0.5	4.2	チャート		
106	X131Y 239	鍛器	8.3	8.0	5.3	525.0	砂岩		106は鍛器である。両側縁を斜位に打ち欠いて尖頭状に整形している。
107	H-6	蜂の巣石	17.1	13.7	5.4	1360.0	粗粒安山岩		107は蜂の巣石で古墳時代住居から出土した。表面に凹穴が多数集中してつけられている。
108	X119Y 59	磨製石斧	20.3	5.5	2.8	500.0	変玄武岩		108は磨製石斧である。変玄武岩製で刃部に比べ基部は狭くなっている。
109	X115Y 19	石棒	10.5	3.3	2.4	138.6	雲母石英片岩		109は雲母石英片岩製の石棒である。長楕形を呈し、断面もほぼ指円形を呈す。
110	X115Y 24	石棒	5.2	3.5	2.7	68.6	チャート		110~114は石核である。
111	X115Y 20	石棒	6.0	4.9	3.5	150.0	黒色安山岩		
112	X114Y 22	石棒	8.8	6.5	4.4	280.0	黒色安山岩		
113	X114Y 20	石棒	5.5	6.0	1.8	81.0	チャート		
114	X115Y 22	石棒	7.1	5.0	5.6	167.3	黒色頁岩		

註) 表の記載で、大きさについての単位はcm, gである。

Tab. 6 古墳・平安時代の遺物観察表

No.	遺物番号	器 形	器形の特徴	外 面 調 整	内 面 調 整	①色調 ②焼成 ③残存 ④粘土 ⑤備考
1	I E 21 H - 1 13	环	やや丸底から直線的に立ち上がり、口唇部でやや内湾する。	底部ヘラケズリ 口唇部ヨコナデ	ヨコナデ	①にぶい赤褐色 (SYR5/4) ②良好③1/3④密
2	I E 21 H - 1 129	环	やや偏平な唇部から丸味を帯びて直線的に立ち上がり口唇部で内湾する。	底部手持ち ヘラケズリ 指頭圧 ヨコナデ	ヨコナデ	①にぶい赤褐色 (SYR4/3) ②良好③9/10④密⑤内面に油燃付着、油环として使用か
3	I E 21 H - 1 130	环	やや偏平な底部から直線的に立ち上がり口唇部で内湾する。	底部手持ちヘラケズ リ 口唇部指頭圧後ヨコ ナデ	回転ヨコナデ	①にぶい赤褐色 (SYR5/3) ②良好③1/1④密⑤内面一部油燃付着、油环として使用か
4	I E 21 H - 1 131	須恵器 环	平底、やや丸味を帯びて立ち上がり口唇付近で内湾する。	底部系切り 後周辺回転ヘラ調整 全体回転ヘラ調整	回転ナデ	①灰オリーブ色 (SY5/2) ②良好③9/10④密⑤外面口 縁部に「車」墨書きあり
5	I E 21 H - 1 ①	环	やや丸味を持って立ちあがり屈曲して口唇部で内湾する。	底部ヘラケズリ 口唇部ヨコナデ	口縁部斜状に暗文	①にぶい赤褐色 (SYR5/4) ②良好③1/1④密
6	I E 21 H - 1 9	环	底部平底、直線的に外反する。	外縁ヘラケズリ 口唇部ヨコナデ	ヨコナデ	①にぶい褐色 (SYR5/4) ②良好③4/5④密
7	I E 21 H - 1 137	环	やや丸底から直線的に外反し口唇部で一度屈曲して内湾する。	底部ヘラケズリ 口縁部指頭圧後一部 ヨコナデ	ヨコナデ	①にぶい褐色 (7.5YR5/4) ②良好③1/1④密⑤内面口 縁部に油燃付着、油环とし て使用か
8	I E 21 H - 1 396	环	やや丸味を持った底部から直線的に立ち上 がり口唇付近で内湾する。 口唇部付近で内湾する。	底部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ	ヨコナデ	①にぶい褐色 (7.5YR) ②良好③2/5④密
9	I E 21 H - 1 126	环	やや偏平な底部から丸味を持って立ち上 がり口唇付近で外反する。	底部手持ちヘラケズ リ 口縁部は指頭圧と經 ナデ	指頭によるナデ	①明赤褐色 (SYR5/6) ②良好③1/1④やや粗⑤外 面と内面の一端に二次焼 成、油环として使用か？
10	I E 21 H - 1 125	环	やや丸底で直線的に立ち上がり口唇付近で内傾する。	底部手持ちヘラケズ リ 口縁部指頭圧 一部横ナデ	横ナデ 底部に穿孔があり布 痕を残す	①明赤褐色 (SYR5/6) ②良 好③1/1④やや粗
11	I E 21 H - 1 121	須恵器 环	平底から直線的に立 ち上がり口唇付近で やや直立気味に一段 筋を持つ。	底部系切り後全面回 転ヘラ調整 口縁部回転横ナデ	回転ヨコナデ	①黒色 (SYR1.7/D) ②良好③4/5④密⑤内外面 とも黒色処理
12	I E 21 H - 1 376	須恵器 高台地	やや丸味を持って直 線的に立ち上がりに 口唇付近でやや屈曲す る。	底部回転ヘラ調整、 底部系切り後板付け 高台	底ヘラ調整	①灰白色 (N4/1) ②良好 ③1/1④密

No.	遺物番号	器 形	器形の特徴	外 面 調 整	内 面 調 整	①色調 ②焼成 ③残存 ④粘土 ⑤備考
13	I E 21 H - 1 71	甕	球形状の体部からや や内湾気味に短く屈 曲する口縁を付す。 口縁内面をなでること により腹部を若干 肥厚させている。 平底。	体部ヘラケズリ 口縁部ナデ	底部ヘラケズリ 体部上半横方向ナデ 口縁部ナデ	①にぶい橙色(SYR6/4) ②良好③1/2④密⑤体部二 次焼成
14	I E 21 H - 1 19	鉢	底部平底、底部から 外反気味に立ち上 がり中頸で内傾する。	底部ヘラケズリ 口縁部ヨコナデ	ヨコナデ	①にぶい赤褐色(SYR5/4) ②良好③1/2④密
15	I E 21 H - 2 30	杯	やや扁平な底部から 丸味を持って立ち上 がり直線的にのび る。口唇部で内傾す る。	底部手持ちヘラケズ リ 口縁部指頭一部ナデ	横ナデ 一部指頭圧痕を残す	①にぶい赤褐色(SYR5/4) ②やや良好 ③1/4④やや粗⑤内外面と もに油燃付着油环として使 用か?
16	I E 21 H - 2 29	杯	やや丸底で急激に直 立し口唇付近でやや 外反する。	底部手持ちヘラケズ リ。口縁部指頭圧痕 とナデ	横ナデ 一部指頭圧痕を残す	①にぶい赤褐色(SYR5/4) ②良好⑨/10④やや粗⑤外 面二次焼成
17	I E 21 H - 2 26	須恵器 杯	平底からやや丸味を 帯びて立ち上がり口 唇付近を外溝する。	底部糸切り 体部回転ヘラ調整	回転ヘラ調整	①灰黄色(25Y7/2) ②良好⑩/10④青⑤内面赤 色顔料付着 容器として使用か? 内面底 部に墨書きあり
18	I E 21 H - 2 10 ④	杯	平底、直線気味に立 ち上がり口唇付近で 内傾する。	底部ヘラケズリ 口唇部指頭後ヨコ ナデ	ヨコナデ	①明褐色(SYR5/6) ②良好③1/8④良好⑤密
19	H - 2 180	甕 底部	平底、外反気味に開 く。	不定方向ナデ	不定方向ナデ	①にぶい橙(SYR6/4)②良 好③1/8④良好⑤密
20	I E 19 H - 2 2	ミニチュ ア土器	やや丸底気味の底部 から直立気味。に立 ち上がりほどなく外 反して開く。	不定方向指擦で	不定方向指擦で	①にぶい赤褐色(SYR5/4) ②良好⑨/10④良好⑤密
21	I E 19 H - 2 1	小型甕	平底、やや長脚化す る球形状の体部、頭 部はしまりが緩や か、そこから外反気 味に開く。	体部はヘラケズリ 頭部ナデ、頭部は刷毛 目、口縁部は輪積模 あり	口縁部 横 体部不定方向 ナデ	②良好③1/2④良好⑤密
22	I E 19 H - 2 ①	甕	平底、ほほ球形の胴 部を保ちくの字状に 口縁部外反する。	斜め方向のケズリ後 ナデ	口縁部横方向 ナデ、頭部ナデ	①にぶい橙(SYR7/4)②良 好③1/2④良好⑤密
23	H - 3 ②	甕	平底、底部付近のみ 残存する。 底部が直立後大きくな り外溝する。	横方向ケズリ 後ナデ 圧痕あり	不定方向コヒナデ	①浅黄橙(7.5YR8/3)②良 好③1/10④良好⑤密
24	H - 3 ①	小甕	丸底、球形の体部 を持つ。 口縁部は欠損する。	体部横方向 ミガキ	横方向を主体とする ミガキ	①浅黄橙(7.5YR8/3)②良 好③4/5④良好⑤密
25	H - 4 ③	培	口縁部のみ残存	不定方向ミガキ	横方向を主体とする ミガキ	②良好③1/5④良好⑤密

No.	遺物番号	器 形	器形の特徴	外画調整	内面調整	①色調 ②焼成 ③残存 ④胎土 ⑤備考
26	H-4 ①	小壺	丸底球胴部形の体部をもつ。口縁部は欠損。	体部横方向 ミガキ	不定方向ナデ	①橙(7.5YR7/6)②良好③4/5④良好⑤密
27	H-4 ②	鉢	口縁～胴部の一部残存。口縁部はS字状。胴部は球形を呈す。	横方向を主体とする ミガキ	不定方向ミガキ	①浅黄橙(7.5YR8/3)②良好③1/4④密⑤外面に二次焼成痕あり
28	H-5 ②	壺	口縁部～胴部の一部残存。 口縁部はくの字に大きく外反する。	横方向ケズリ 後ナデ	横方向ミガキ 後ナデ	③1/3④密⑤外面二次焼成痕あり
29	H-5	土玉				
30	H-6 ③	壺	胴部と頭部の一部のみ残存球形の胴部を持ち、頭部はくびれがあるやかである。平底。	不定方向ミガキ	全面不定方向ミガキ	①黒褐色(7.5YR3/1)②良好③1/3④密⑤外面二次焼成痕あり
31	H-6 ⑥	椀	平底、球形の胴部、折り返し口縁をもつ。	胴部ヘラケズリ 折返し部ナデ	横方向を主体とする ナデ	②良好③1/3④密⑤口縁部～胴部に二次焼成痕
32	H-6 279	高杯	脚部を欠損する平底面に横線をもつ。体部はゆるやかに内湾	体部横方向を主体とするミガキ	体部横方向を主体とするミガキ	①浅黄橙色(10YR8/4) ②良好③4/5④密⑤外面二次焼成痕あり
33	H-6 256	器台	底部平面付に接線を持ち、ゆるやかに内湾する。脚部には2段の透しを3方向に施す。	脚部綫方向ミガキ後 横方向ミガキ、台部 横方向を主体とする ミガキ	台部方向を主体とする ミガキ。脚部ヘラ ケズリ後横方向を主 体とするミガキ	①明赤褐(5YR5/5)②良好 ③9/10④密⑤脚部に二次焼成
34	H-6 ④	壺	口縁部～胴部残存。 口縁部に輪積み痕。 口唇部は折り返し。	口縁部、縱方向ハケ メ 肩部～胴部縱方向ミ ガキ	横方向主体とするミ ガキ	②良好③1/3④密⑤胴部二 次焼成痕あり
35	H-6	土玉				
36	H-8 ①	ミニチュア土器	平底、球形の胴部から長い口縁部を持ち、外反している。	口縁部は横方向のナ デ。体部縱方向主体 にしたナデ	横方向のナデ	②良好③完形④密⑤胴部二 次焼成痕あり
37	H-7 ①	壺	下半胴部のみ残存平底。胴部はやや長胴化気味。	縱方向のミガキ	横方向を主体とする ミガキ	②良好③1/5④密
40	H-8 400 ②	杯	平底。丸味を帯びて立ち上がり。口唇部は直立する。	体部ヘラケズリ後ミ ガキ	横方向を主体とする ミガキ	①橙色(5YR6/8) ②良好③4/5④密
41	H-9 ①	椀	平底。胴部は内湾気味	横方向ケズリ後 口唇部近くは横、底 部近くは斜位中心の ミガキ	横方向を主体とした ミガキ	②良好③完形④密⑤底部二 次焼成痕
42	H-9 ②	鉢	口縁～胴部の一部のみ残存。球形の胴部から口縁部はゆるく外反する。	底部近くはミガキ 口縁部はナデ仕痕あり	口縁部近くは横方向 底部近くは縱方向ミ ガキ	①橙色(5YR6/8)②良好③ 1/6④密

No.	遺物番号	器 形	器形の特徴	外 面 調 整	内 面 調 整	①色剥 ②焼成 ③残存 ④胎土 ⑤備考
43	I E 19 表採 ②	壺	平底から球胴になり、くの字状に外反する。折り返し口縁。	不安定方向ケズリ 後ナデ	横方向主体としたキ ガキ	①浅黄橙(10YR8/3) ②良好 ③ほぼ完形④密⑤胴部に二 次焼成斑
44	I E 19 表採 ①	壺	平底から球胴になり、くの字に口縁が開くが口唇部近くはさらに大きく開く。	ケズリ後一部ナデ 口縁部横方向ナデ	口縁部横ナデ	①にぶい黄橙(10YR7/4) ② 良好③ほぼ完形④密
45	H - 9 ③	壺	底部～胴部の一部のみ残存。胴部は長胴気味。	縱方向主体とするナ デ	胴部ミガキ 底部ナデ	①にぶい黄橙(10YR7/3) ② 良好③1/6④密
46	I - 1 ④	碗	平底から内湾気味に立ち上がる。	ケズリ後ナデ	横方向ナデ	①にぶい黄橙(10YR7/4) ② 良好③1/2④密⑤
47	I - 1 ① 75	高杯	6種小型高杯 比較的の内厚 脚部を欠損する 中央よりやや下半部に最大径を持つ	横方向を主体とする ミガキ	横方向を主体とする ミガキ	①橙色 7.5YR7/6 ②良好 ③3/5④密⑤口縁部二次燒 成
48	I - 1 6	鉢	球形の胴部から大きいくの字に外反する口縁部をもつ平底	口縁部くびれ部に輪 模様を残す 全面横 方向ミガキ調整	口縁部ナデ後横方向 ミガキ調整 底部不 定方向ミガキ調整	①橙色(5 YR6/8) ②良好③ 5/6④密⑤外縁底部に二次 焼成
49	I - 1 ⑤	台付壺 脚	やや内湾気味に下へ開く	縱方向主体としたケ ズリ一部・ハケメが残る	不定方向ハケメ	①橙 7.5YR6/6 ②良好③ 脚はほぼ完形④密
50	D - 21 ① 埋土	壺	平底から球形の胴部に至り口縁部はくの字状に外反する	横方向密にミガキ頑 部ハケメが残る	横方向主体とするミ ガキ	②良好③ほぼ完形④密
51	D - 21 ①	小形壺	球胴状を呈し口縁部はくの字状に外反する 平底	体部横方向ミガキく びれ部縱方向ハケメ 口縁部横ナデ	全面不定方向ミガキ	①橙色 7.5YR6/6 ②良好③1/1④密⑤全面に 二次焼成
52	I - 1 175	片口	平底 球胴形を呈し口縁部は輪摺痕を意識したものが折返し状である。口唇部は撫でて面取りされる片口部分は指頭により作り出される	体部ヘラケズリ 口縁部ナデ 底部もヘラケズリ	口縁部撫無で 体部皮状工具を用いた撫で 底部に接合痕を残す	①橙色 7.5YR6/6 ②良好③1/4④密⑤底部の み縫造りで最後に体部と接 合している
53	D - 21 埋土 ②	壺	球胴形を呈す 平底上部欠損	縱方向ミガキ	ヘラケズリ後一部ナ デ	①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②良好③2/5④密⑤内外面 ともに二次焼成あり
54	M - 1 ②	壺	口縁部一部のみ残存 口縁部に四枚に分かれ各段がほぼ直角に曲る	口縁中央部に斜め方 向ケズリ口唇部に横 ミガキ	縱方向主体としたナ デ	②良好④密
55	M - 1 ②	台付壺 脚	やや内湾気味に下へ開く	横方向主体としたナ デ	横方向主体としたケ ズリ	①にぶい黄橙(10YR7/4) ② 良好③脚はほぼ完形

No.	遺物番号	器 形	器形の特徴	外面調整	内面調整	①色調 ②焼成 ③残存 ④粘土 ⑤備考
56	M-1 表採 ⑩	台付甕 脚	やや内湾気味に下へ開く	縦方向を主体としたケズリ	不定方向ナデ	①にぶい黄橙<10YR7/3>②良好③1/2
57	M-1 ⑩	器台	丸味を帯びた体部から外溝して口唇に至る。脚部は直線的に外反し端部付近で大きく裾開きになる 透孔は千鳥状2段	体部横方向を主体となるミガキ脚部縦方向を主体としたミガキ	体部・脚部共に横方向を主体としたミガキ	①にぶい黄橙<10YR7/4>
58	M-1 1426	器台	丸味を帯びた前部から外溝して口唇に至る 脚部は直線的に外反し端部付近で裾開きになる 透孔2段に3方向に穿たれている	体部横方向を主体とするミガキ脚部縦方向を主体としたミガキ	体部及び脚部ともに横方向を主体とするミガキ	①にぶい黄橙色<10YR7/4> ②良好③3/4④密⑤脚部に二次焼成痕あり
59	M-1 ⑩	台付甕 脚	外反気味に下へ開く。	縦方向主体のケズリ	横方向主体のケズリ	①明黄褐<10YR7/6>②良好 ③脚はほぼ完形④密
60	M-1 1689	壇	やや平偏気味の丸底から丸味を帯びて内溝する。	底部へラケズリ後一部ミガキ口縁部縦方向ミガキ	底部へラケズリ 口縁部縦方向ミガキ	①橙色7.5YR6/6 ②良好③3/5④密
61	M-1 2136	器台	丸味を帯びた体部から直立した口縁に至る。 脚部は中央でやや膨らみ裾開きに広がる。	口縁部撫で体部へラケズリ 後ミガキ 脚部縦方向ミガキ	体部不定方向ミガキ 脚部ケズリ後 不定方向ミガキ	①にぶい黄褐色 <10YR7/4> ②良好③4/5④密
62	M-1 1724	小型 高环 ②	半球形の体部に裾開きの脚を付す。	环部、横方向を主体とするミガキ、脚部縦方向を主体とするミガキ	环部、不定方向ミガキ 脚部横方向ナデ、成形時のヘラ痕著しい	①橙色7.5YR6/6 ②良好 ③9/10④密
63	M-1 2079	杯	壇 下半部でとめたような器形で平底を呈す。	口縁部は横方向ミガキ下半部縦方向を主体とするミガキ	横方向を主体とするミガキ器表が荒れて いる	①にぶい黄橙色 <10YR3/7> ②良好③2/3④密 ⑤外面に二次焼成痕あり
64	M-1 ⑦	瓶	折り返した縁を持つ。	縱方向主体とするミガキ	全面不定方向ミガキ	①にぶい黄橙<10YR6/4> ②良好③1/5④密
65	M-1 ⑥	瓶	平底で内湾気味に立ち上がる。	ケズリ後、横方向主体とするミガキ	横方向主体とするミガキ	②良好③ほぼ完形④密⑤外面に二次焼成痕
66	M-1 636	瓶	直線的に外反する体部から口縁付近でやや直立気味に内溝する。折り返し口縁平底。	体部不定方向 ミガキ、口縁部ヨコ 方向ケズリとナデ	全面不定方向 ミガキ	①にぶい褐色<7.5YR5/4> ②良好③3/5④密⑤外面に二次焼成痕あり
67	M-1 ④	高环	頸部に縦線を持つ、杯部は内湾気味。	横方向主体としたミガキ	横方向主体としたミガキ	①橙色7.5YR7/6 ②良好③1/2④密
68	M-1 2137	片口	体部 球形を呈す 片口部は口縁から斜め上に突出する。	体部横方向主体のミガキ 底部ミガキ	横方向主体とするミガキ 口唇部撫で	①橙色7.5YR6/6 ②良好③9/10④密⑤外反に二次焼成痕あり

No.	遺物番号	器 形	器形の特徴	外 面 調 整	内 面 調 整	①色調 ②焼成 ③残存 ④粘土 ⑤備考
69	M-1 ⑩	壺	平底 球形の胴部を持つ 口縁部欠損	不定方向ミガキ	ヘラケズリ後一部ナ デ	①にぶい橙(7.5YR7/4)② 良好③4/5④密⑤外面に二 次焼成痕
70	M-1 2195	甌	小さい平底から球形 になりくの字状に外 反する。	横方向を主体とする ミガキ	体部横ミガキ口縁部 ナデ	①橙色(7.5YR6/6) ②良好③1/2④密
71	M-1 25	甌	底部付近のみ残存す る球形の胴部からゆ るやかに内湾する。 平底	縱方向のハケメとミ ガキが多用される	不定方向ユビナデ	①赤褐色<5YR4/8> ②良好③1/5④やや粗⑤外 面に油燃付着
73	M-1 ⑩	壺	平底 球形の胴部 口縁部欠損	縱方向主体するミガ キ	不定方向ミガキ	①浅黄橙(7.5YR8/4)②良 好③1/3④密
74	M-1 ⑩	壺	口縁部~胴部の一部 残存 口縁部は外反する。	縱方向にハケメ口唇 部付近及び肩部に斜 線のハケメ 肩部は その後一部ミガキ	口縁部 横方向を主 体とするハケメ肩部 はその後ナデ	
75	M-1 ⑩	甌	平底 球形の胴部か ら外反気味の口縁部 に至る 口唇部面取りあり。	斜位方向にミガキ 口縁部 縦方向ミガ キ	不定方向ミガキ	①にぶい黄橙(10YR7/3)② 良好③1/2④密
76	M-1 ⑩	甌	折り返し口縁 底部欠損	口縁部横ミガキ 体部 横ミガキ	横方向主体としたミ ガキ	①橙(7.5YR7/6)②良好③ 3/4④密
77	M-1 990	甌	ほぼ中央に最大径を 持つ球形窓を呈し口 縁部に輪積み痕を残 す 平底	体部 ナナメ方向ミガキ 口縁部横方向ナデ	横方向を主体とする ミガキ	①浅黄橙(10YR8/4) ②良好③9/10④密⑤体部に 二次焼成痕あり
78	M-1 2162	甌	やや長胴化する体部 からくの字状に彎曲 し輪積み痕を残す口 唇部は面取りされ る 平底	縱方向を中心とする ミガキ 口縁部横方 向ナデ	横方向を主体するミ ガキ	①明褐色<7.5YR5/8> ②良好③3/5④密
79		甌	口縁部~頭部のみ残 存 口縁部はやや外反氣 味に向く	口縁部指ナデ	横方向主体とするミ ガキ	①にぶい黄橙(10YR7/4)② 良好③完形④密
80		壺	底部~胴部のみ残存 底部より外反気味に 聞く	体部ナナメ方向 ケ ズリ		①にぶい黄橙(10YR7/4)② 良好③4/5

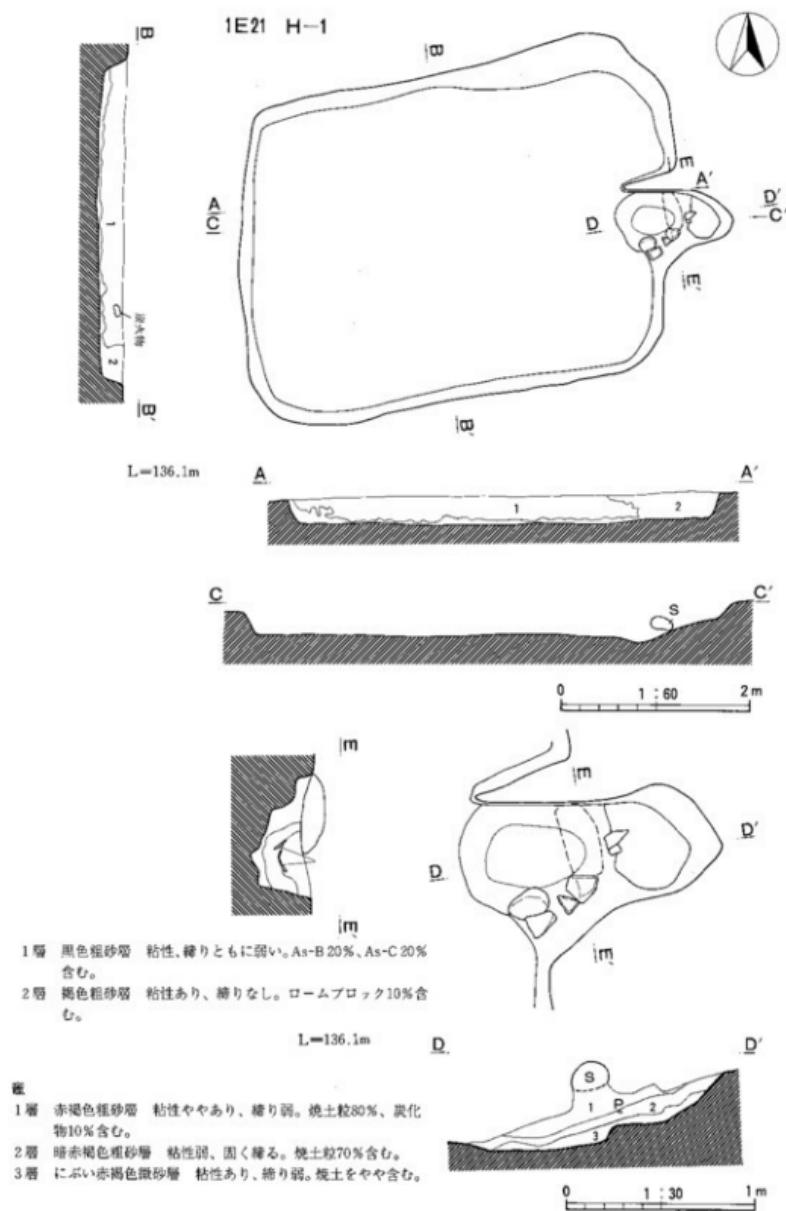


Fig. 12 1 E 21 H-1号住居址

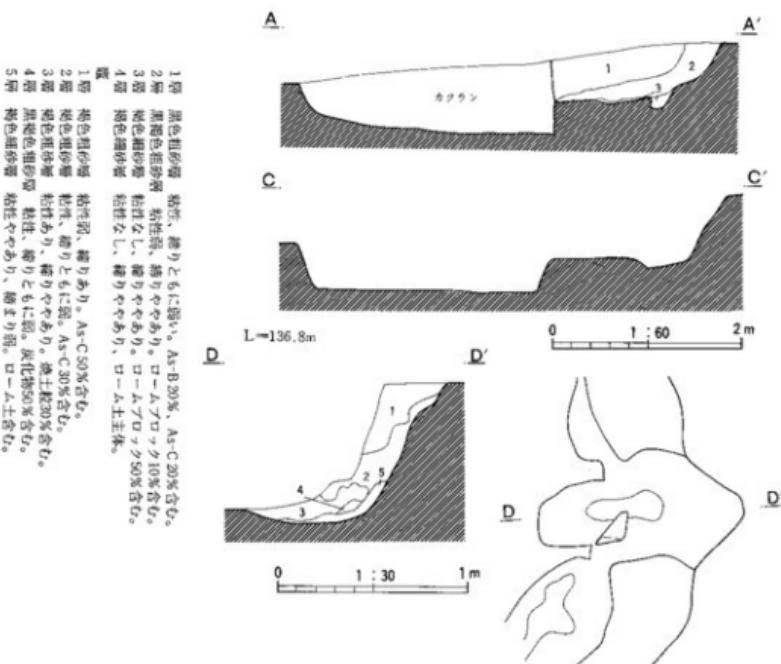
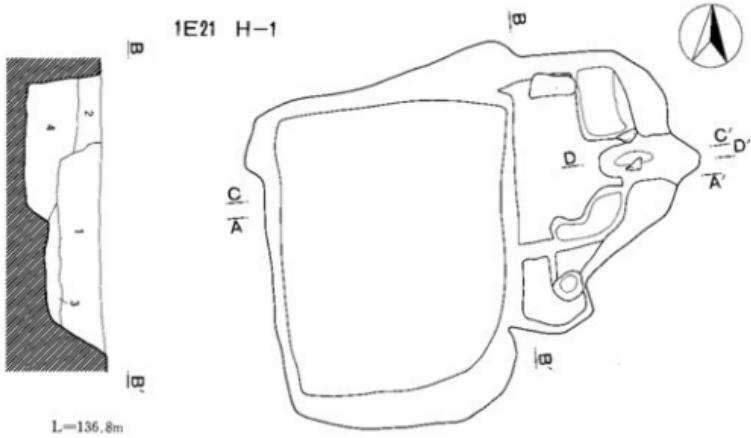
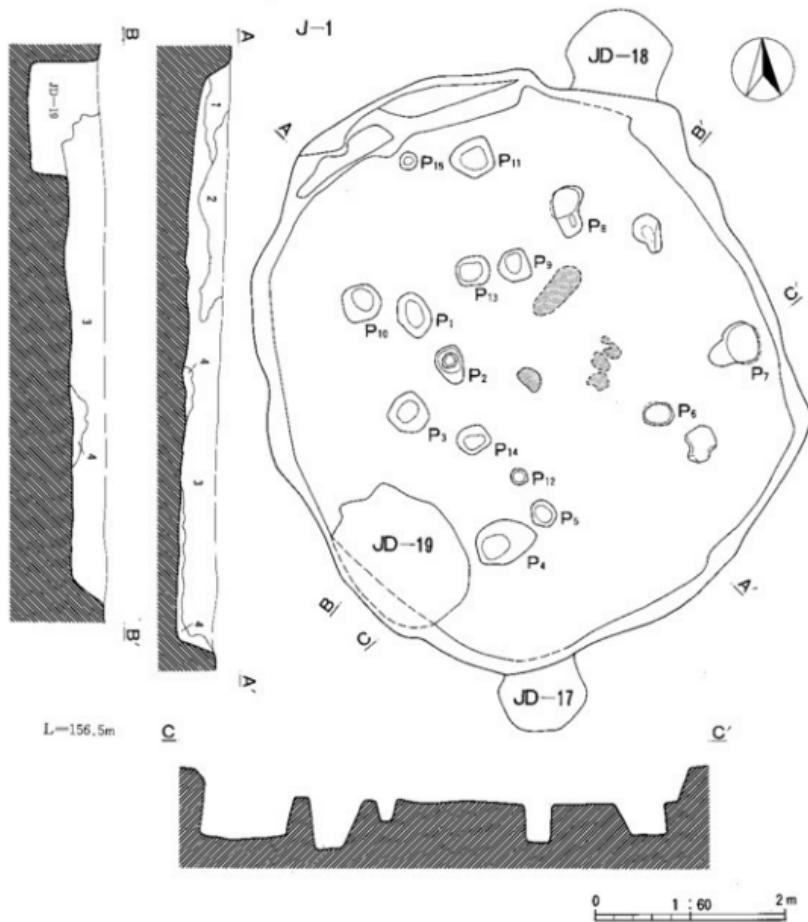
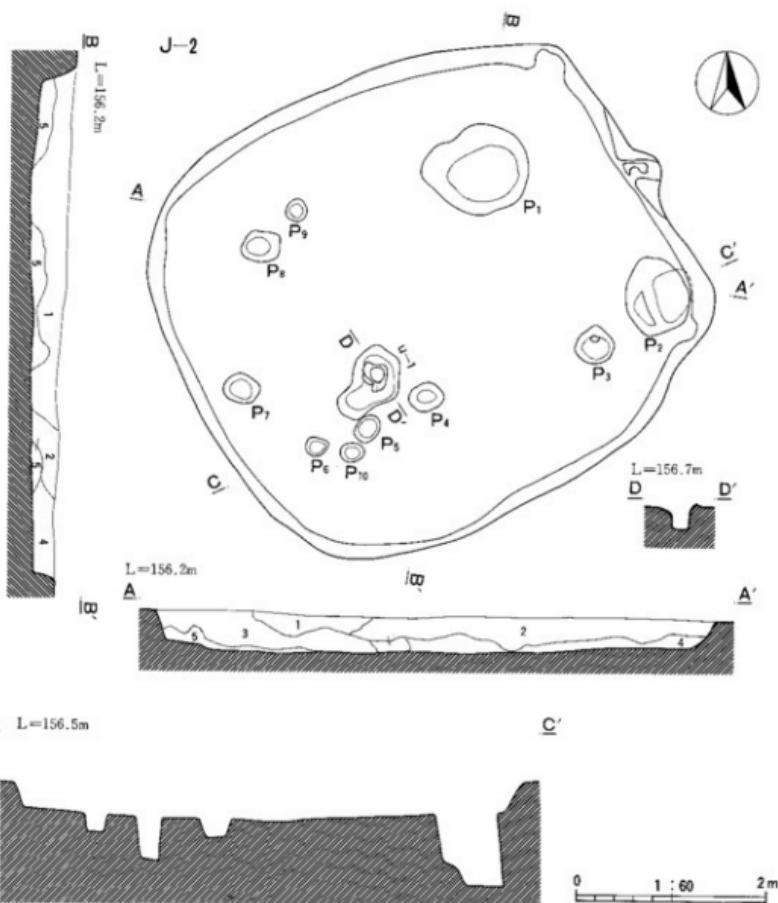


Fig. 13 1 E 21 H-2号住居址



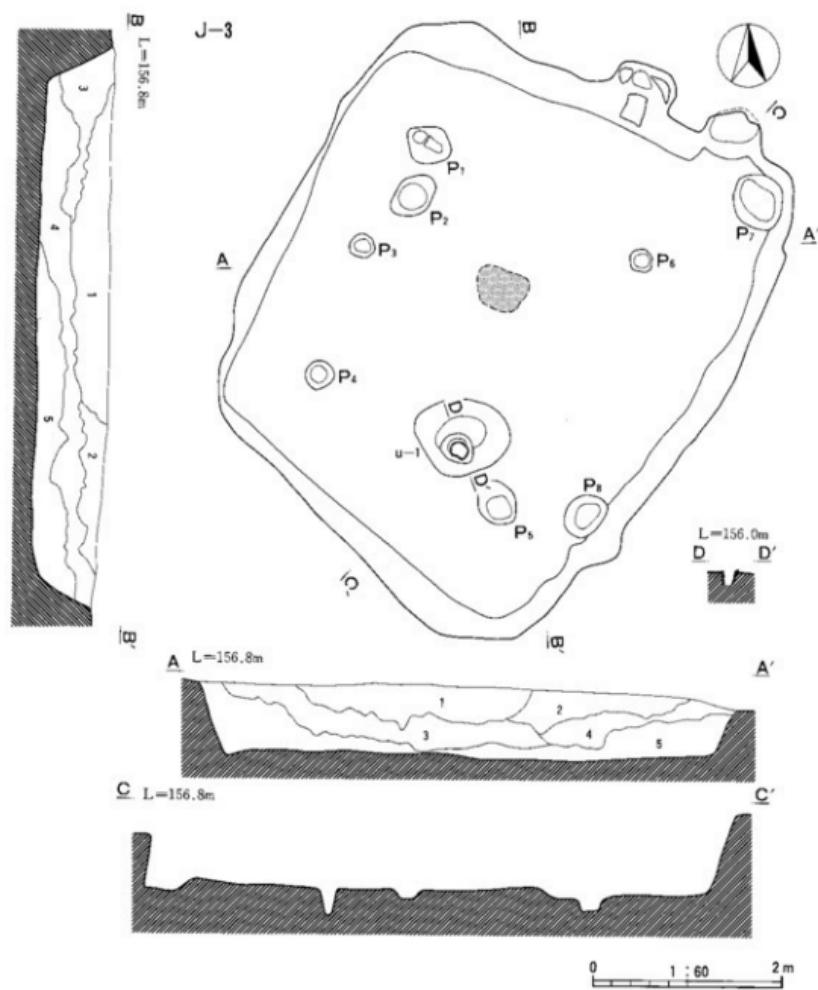
- 1層 深色細砂層 粘性、繊りともにあり。As-YP 5%含む。
 2層 深色細砂層 粘性あり、繊り弱。As-YP 5%含む。
 3層 深色微砂層 粘性あり、固く繊る。ロームブロック50%含む。
 4層 深色微砂層 粘性あり、固く繊る。As-YP 10%含む。

Fig. 14 J-1号住居址



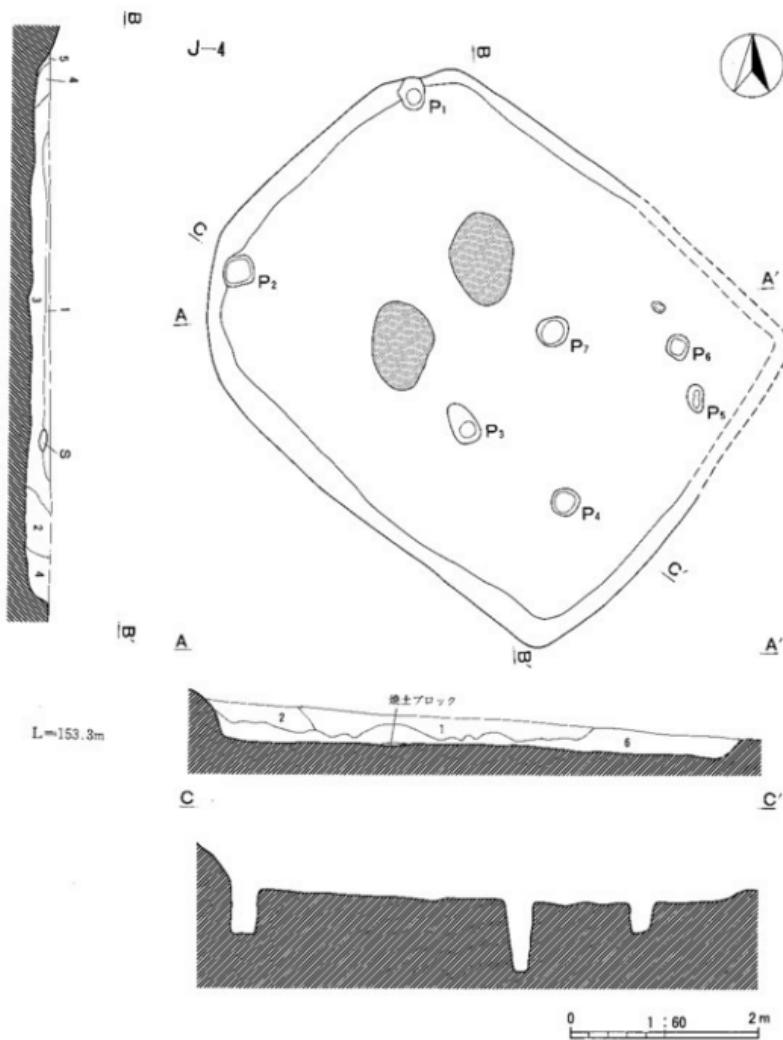
- 1層 褐色細砂層 粘性弱、固く締る。軽石30%、しみ状ローム土を含む。
 2層 黄褐色微砂層 粘性弱、固く締る。軽石20%、ローム土50%含む。
 3層 黄褐色微砂層 粘性あり、固く締る。しみ状ローム50%含む。
 4層 褐色微砂層 粘性弱、固く締る。まだら状にローム土5%含む。
 5層 褐色微砂層 粘性弱、固く締る。しみ状ローム土40%含む。

Fig. 15 J - 2 号住居址



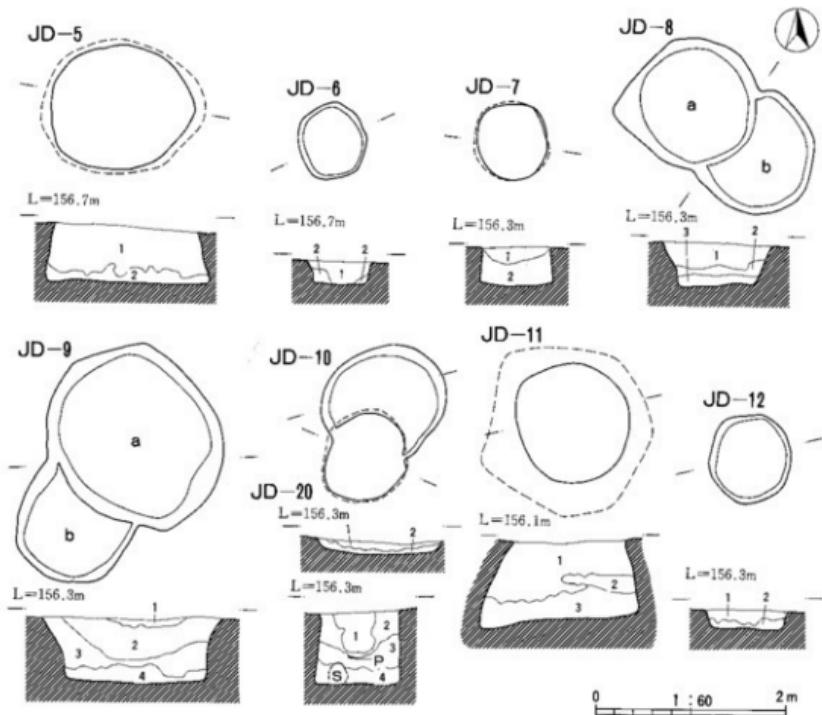
- 1層 棕褐色細砂層 粘性弱、固く締る。As-YP 20%含む。
 2層 棕褐色微砂層 粘性、締りともに強い。As-YP 20%含む。
 3層 明黄褐色微砂層 粘性弱、固く締る。As-YP 2%、焼土20%含む。
 4層 明褐色微砂層 粘性、締りともにあり。焼土ブロック30%含む。
 5層 棕褐色微砂層 粘性、締りともに強い。ロームブロック30%含む。

Fig. 16 J - 3 号住居址



- 1層 暗褐色微砂層 粘性弱、固く繋る。As-YP 20%含む。
- 2層 橙色微砂層 粘性弱、固く繋る。As-YP 20%、しみ状ローム30%含む。
- 3層 黄色褐色微砂層 粘性弱、As-YP 20%、ロームブロック10%含む。
- 4層 橙色微砂層 粘性弱、繋りあり。As-YP 10%、ロームブロック30%含む。
- 5層 暗褐色微砂層 粘性弱、繋りあり。As-YP 10%含む。
- 6層 暗褐色微砂層 粘性弱、固く繋る。As-YP 10%、ロームブロック50%含む。

Fig. 17 J-4号住居址



- JD-5
1層 暗褐色細砂層 粘性弱、固く繊る。As-YP 20%、ロームブロック10%含む。
2層 黄褐色細砂層 粘性、繊りとともに強い。As-YP 5%含む。
- JD-6
1層 暗褐色細砂層 粘性弱、固く繊る。As-YP 20%、ロームブロック10%含む。
2層 暗褐色細砂層 粘性弱、固く繊る。ロームブロック5%含む。
- JD-7
1層 暗褐色細砂層 粘性弱、繊りとともに強い。As-YP 20%含む。
2層 暗褐色細砂層 粘性弱、固く繊る。As-YP 2%、ロームブロック5%含む。
- JD-8
1層 暗褐色細砂層 粘性弱、固く繊る。As-YP 20%、ローム土を多く含む。
2層 暗褐色細砂層 粘性あり、固く繊る。As-YP 10%、ローム土を多く含む。
3層 明褐色細砂層 粘性あり、固く繊る。ローム土50%含む。
- JD-9
1層 暗褐色細砂層 粘性弱、固く繊る。As-YP 10%含む。
2層 暗褐色細砂層 粘性弱、固く繊る。As-YP 20%、ローム土を多く含む。
3層 暗褐色細砂層 粘性あり、固く繊る。As-YP 10%、ローム土を多く含む。
- JD-10
1層 暗褐色細砂層 粘性弱、繊りとともに弱い。As-YP 15%含む。ローム土主体。
2層 黄褐色細砂層 粘性あり、固く繊る。As-YP 5%含む。
- JD-11
1層 暗褐色細砂層 粘性あり、固く繊る。As-YP 20%含む。
2層 黄褐色細砂層 粘性あり、固く繊る。As-YP 2%含む。
3層 暗褐色細砂層 粘性あり、固く繊る。ローム土主体。
- JD-12
1層 暗褐色細砂層 粘性弱、固く繊る。As-YP 20%、ロームブロック5%含む。
2層 明褐色細砂層 粘性あり、固く繊る。As-YP 10%、ローム土を多く含む。
- JD-20
1層 黄褐色細砂層 粘性あり、固く繊る。ロームブロック70%含む。
2層 暗褐色細砂層 粘性弱、固く繊る。ローム土主体。
3層 暗褐色細砂層 粘性あり、固く繊る。As-YP 20%含む。ローム土主体。
4層 暗褐色細砂層 粘性、繊りとともに強い。ロームブロック30%含む。

Fig. 18 繩文時代土坑(1)

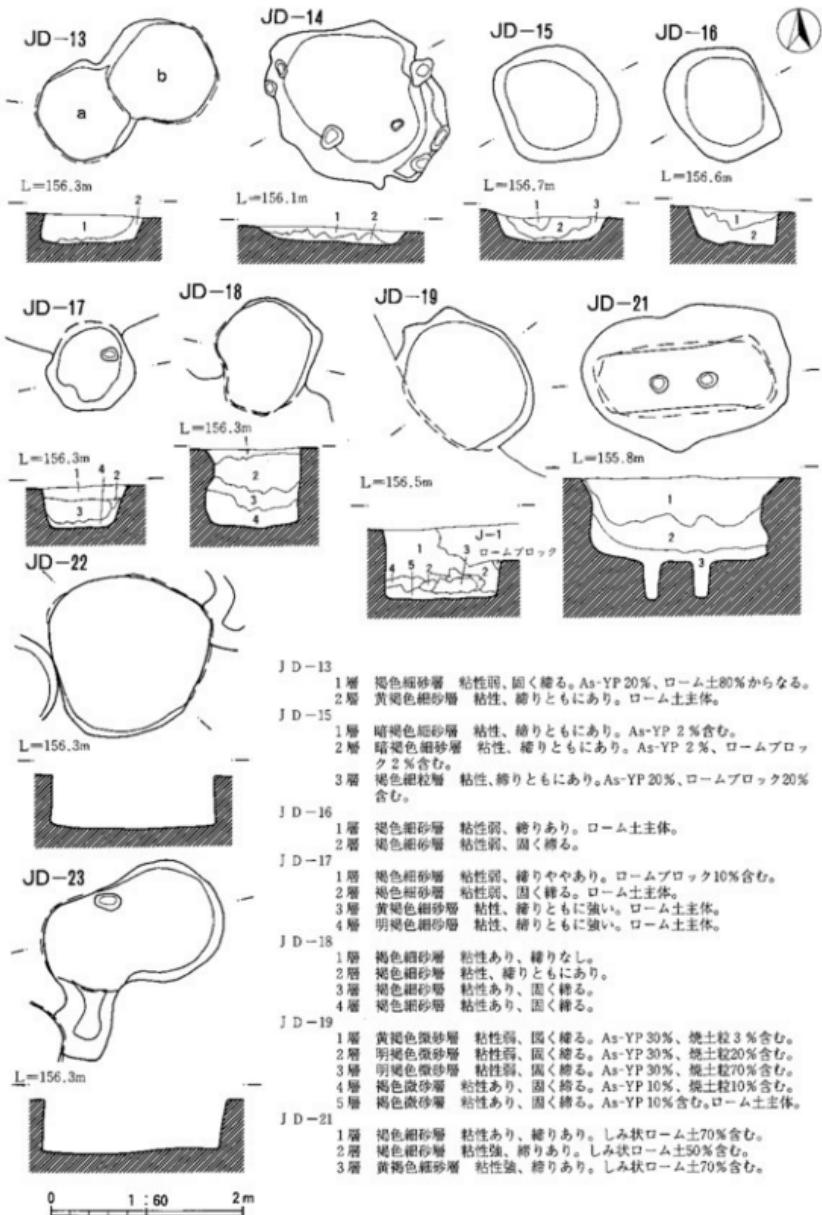
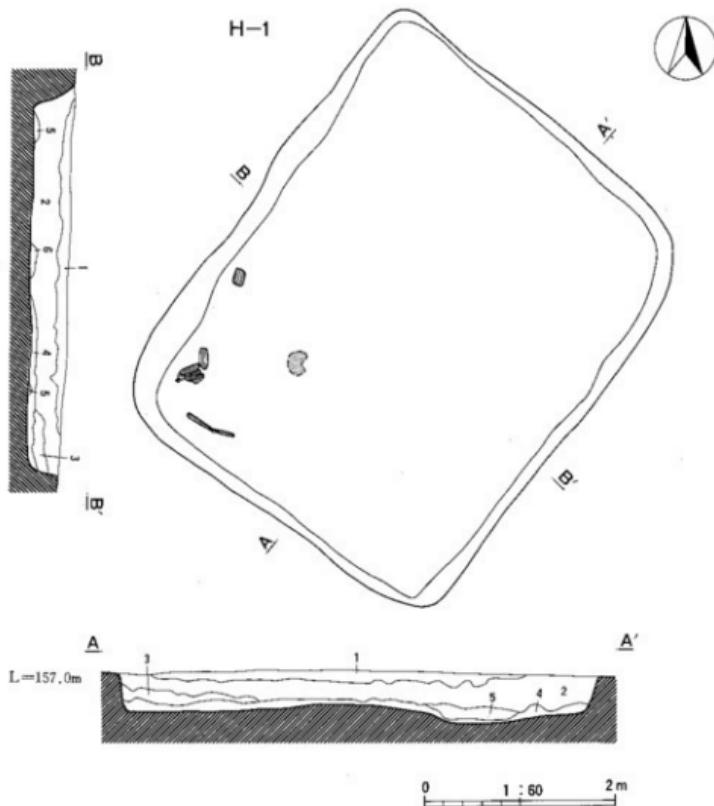


Fig. 19 繩文時代土坑(2)



- 1層 黒褐色粗砂層 粘性、繊りともに弱い。上部にAs-Bが残る。As-C 30%含む。
 2層 暗褐色粗砂層 粘性、繊りともに弱い。As-C 30%含む。
 3層 塗色粗砂層 粘性、繊りともに弱い。As-C 10%含む。
 4層 褐色粗砂層 粘性、繊りともにあり。ローム粒と3層が混じる。
 5層 黑褐色粗砂層 粘性、繊りともにあり。ローム土、焼土ブロックを含む。
 6層 塗色粗砂層 粘性、繊りあり。焼土粒 3%含む。

Fig. 20 H-1号住居址

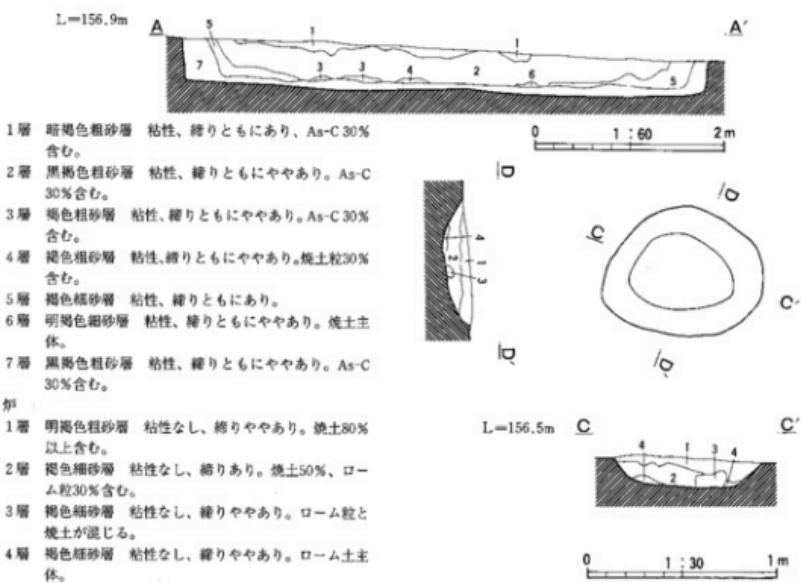
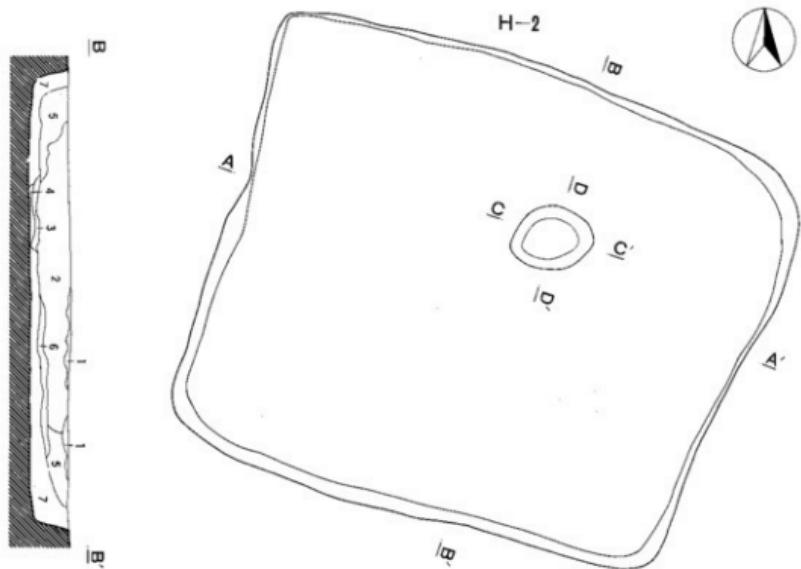
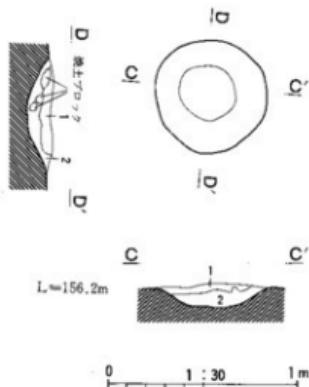
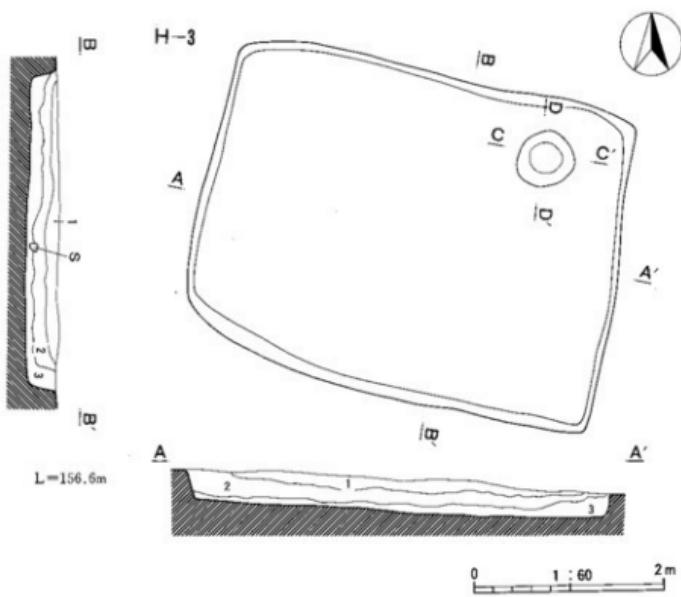


Fig. 21 H-2号住居址



1層 黒褐色粗砂層 粘性、締りともに弱い。As-C 30% 含む。

2層 暗褐色粗砂層 粘性ややあり。締り弱。As-C 5%、 ロームブロック30%含む。

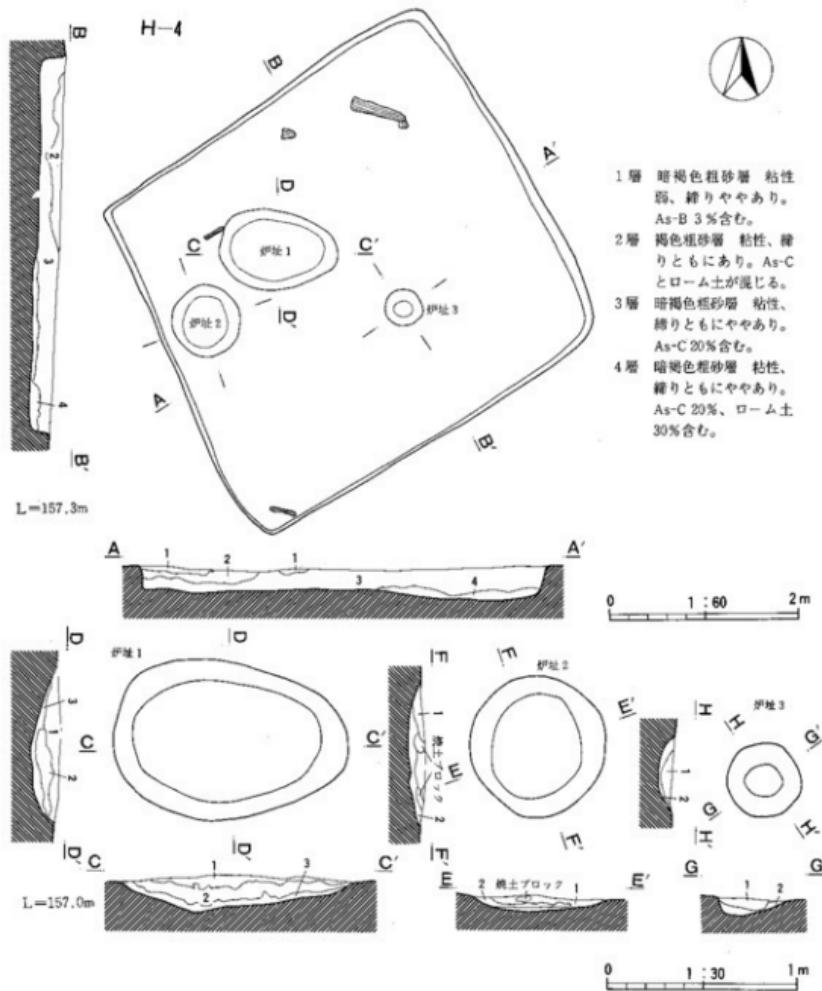
3層 暗褐色砂層 粘性あり、締りややあり。ローム土主体。

炉

1層 明褐色粗砂層 烧土ブロック70%含む。

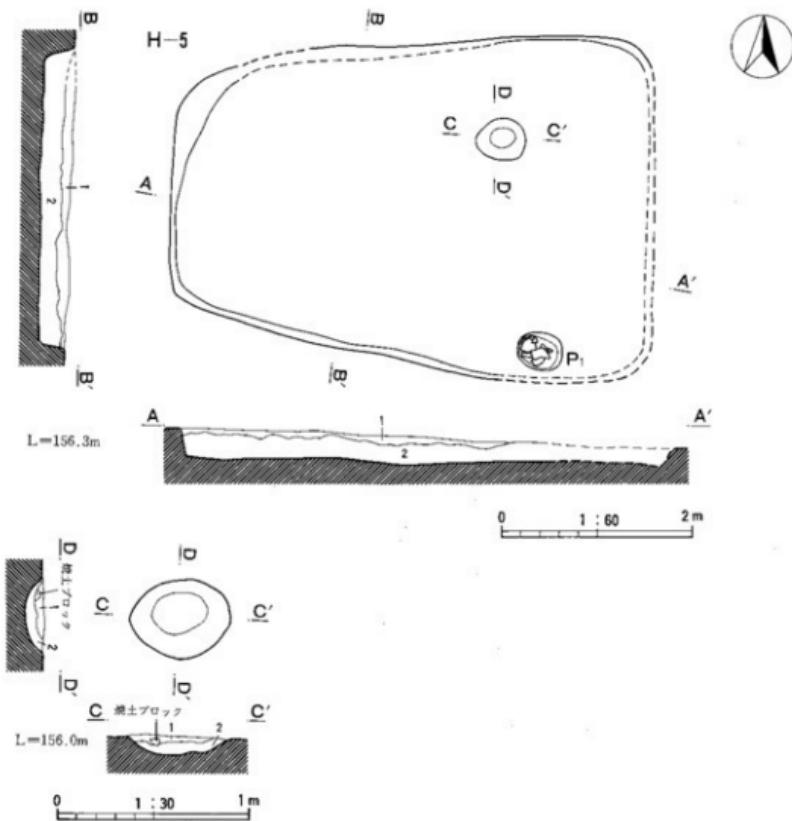
2層 明褐色粗砂層 烧土ブロック80%含む。

Fig. 22 H-3号住居址



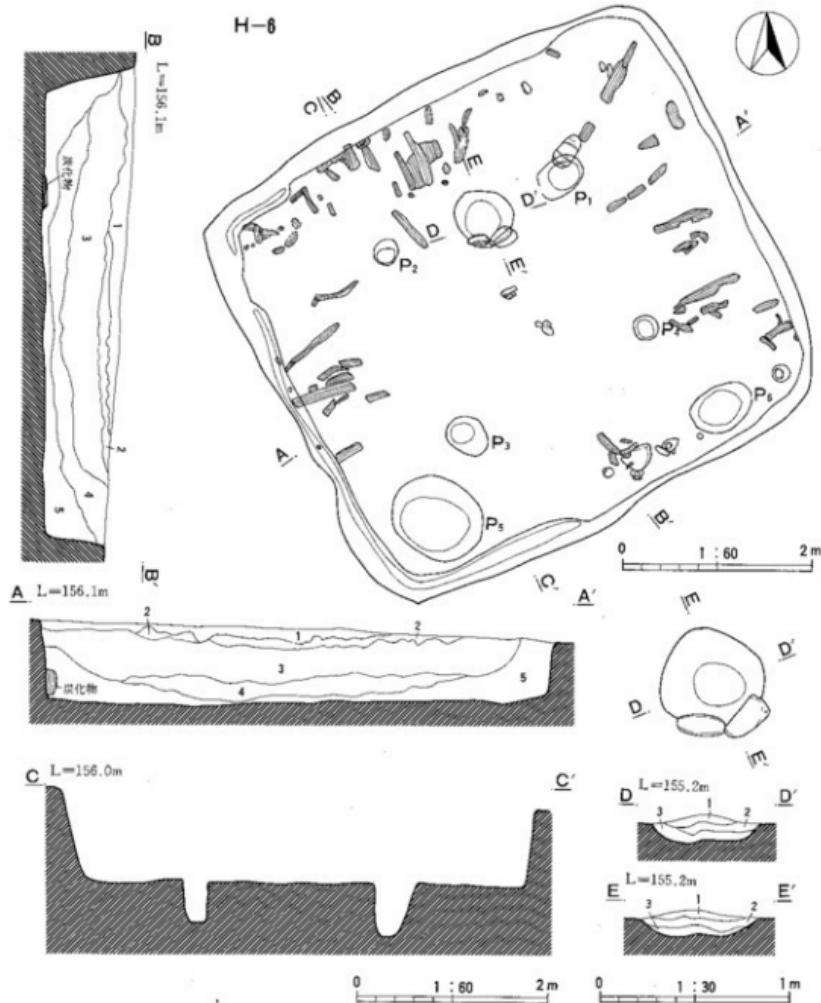
- 炉 1**
- 1層 にぶい赤褐色粗砂層 粘性なし、繊りあり。焼土が混じる。
- 2層 明赤褐色粗砂層 粘性なし、繊りあり。焼土70%含む。
- 3層 にぶい黄褐色粗砂層 粘性、繊りともになし。焼土をわずかに含む。
- 炉 2**
- 1層 にぶい赤褐色粗砂層 粘性弱、繊りややあり。焼土20%含む。
- 2層 にぶい黄褐色粗砂層 粘性弱、繊りややあり。
- 炉 3**
- 1層 褐色細砂層 粘性弱、繊りなし。
- 2層 褐色粗砂層 粘性弱、繊りなし。焼土30%含む。

Fig. 23 H-4号住居址



1層 暗褐色粗砂層 粘性、繊りとともにややあり。As-B 10%含む。
 2層 褐色粗砂層 粘性、繊りともにややあり。As-C 30%含む。
炉
 1層 褐色細砂層 粘性弱、繊りなし。焼土10%含む。
 2層 褐色細砂層 粘性弱、繊りややあり。焼土30%含む。

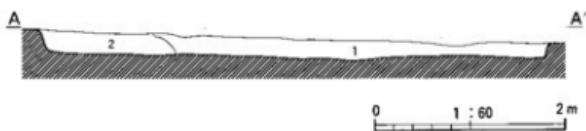
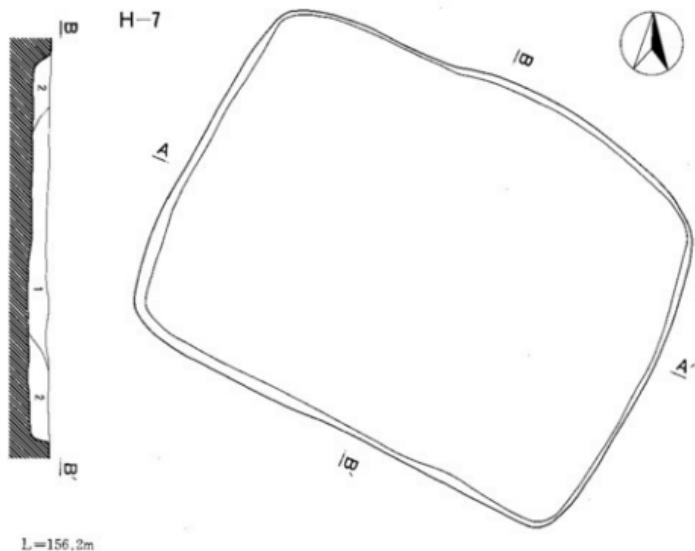
Fig. 24 H-5号住居址



- 1層 黒褐色粗砂層 粘性なし。縫りあり。As-B 20%含む。
 2層 暗褐色粗砂層 粘性なし。縫りあり。As-B 50%含む。
 3層 黒褐色粗砂層 粘性ややあり、縫りあり。As-C 30%含む。
 4層 黒色粗砂層 粘性あり。固く締る。As-C 20%含む。
 5層 暗褐色粗砂層 粘性、縫りともにあり。ローム土を含む。

 1層 暗褐色粗砂層 粘性ややあり。縫り弱。焼土ブロック20%含む。
 2層 明褐色粗砂層 粘性、縫りともにあり。焼土ブロック30%含む。
 3層 暗褐色粗砂層 粘性、縫りともあり。ローム土主体。

Fig. 25 H-6号住居址



1層 褐色粗砂層 粘性、締りとともに弱い。As-C 20%、ロームブロック10%含む。
2層 褐色粗砂層 粘性、締りともになし。As-C 20%、ロームブロック50%含む。

Fig. 26 H-7号住居址

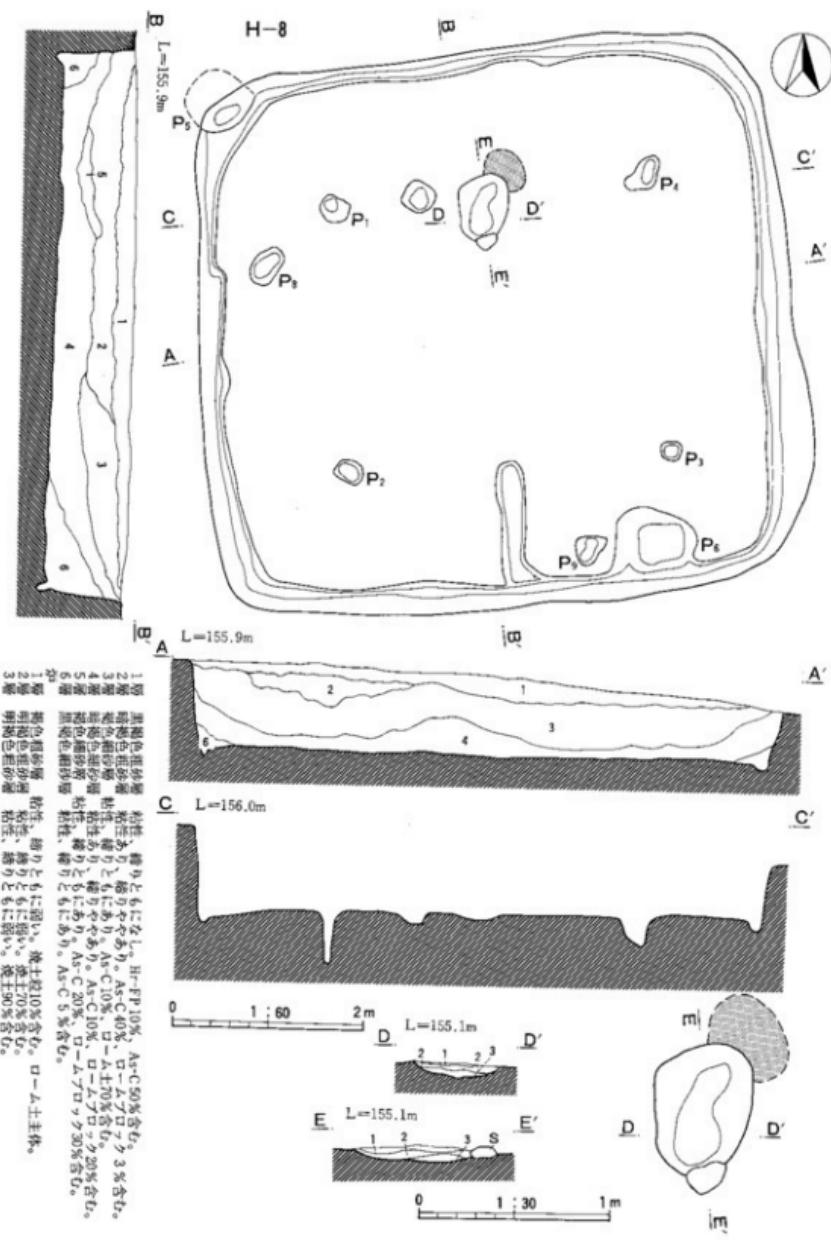


Fig. 27 H-8号住居址

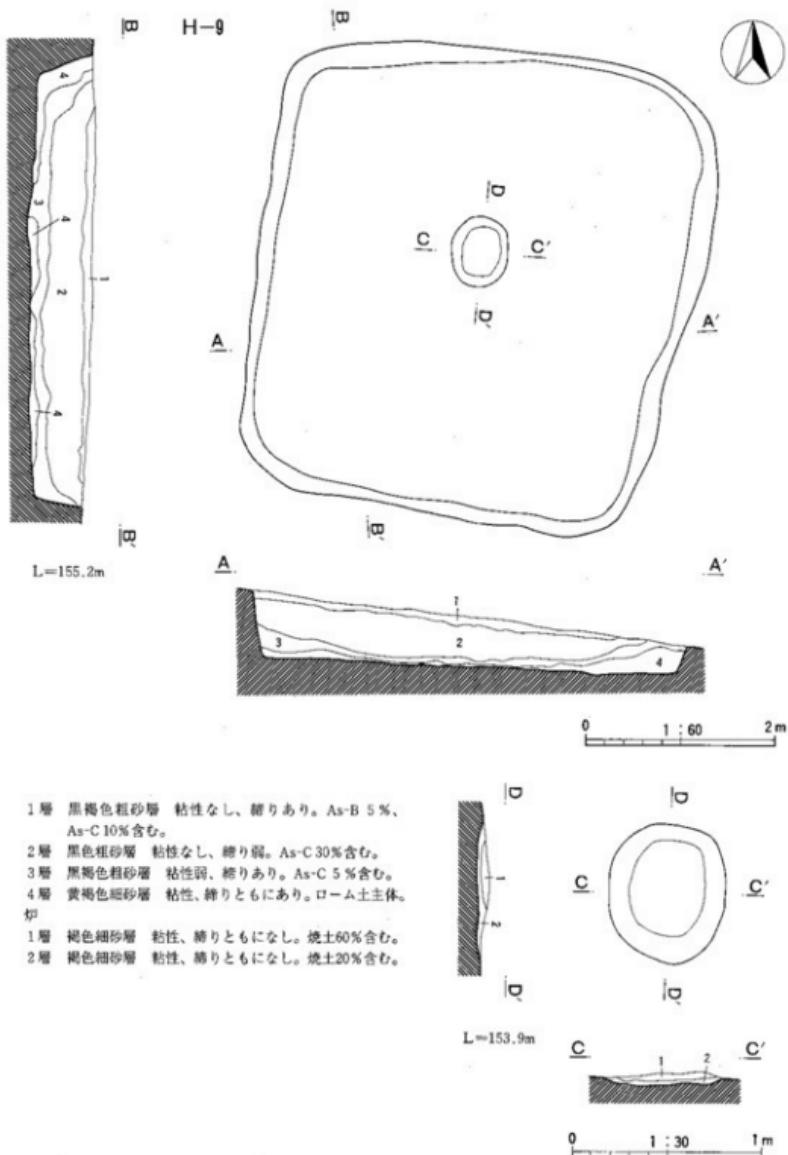
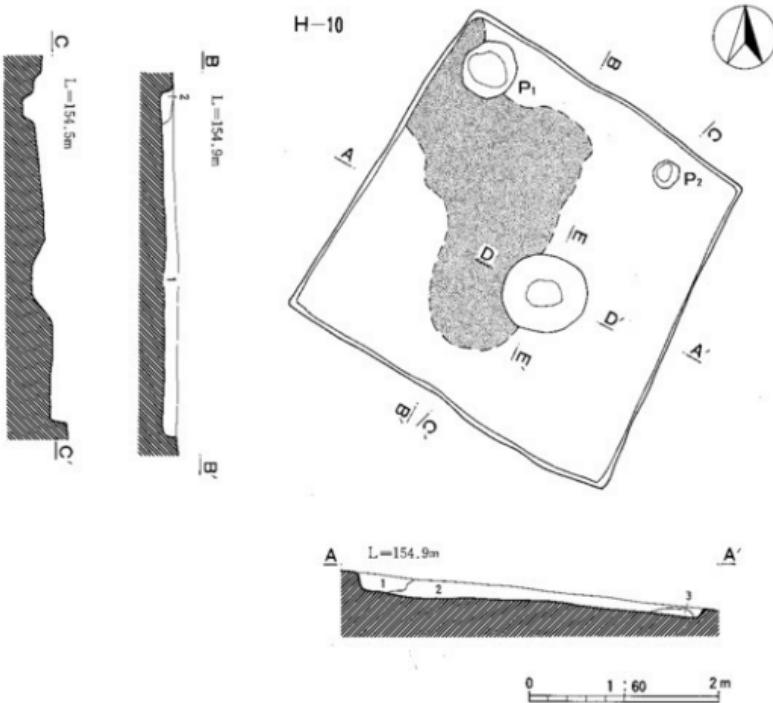


Fig. 28 H-9号住居址



1層 暗褐色粗砂層 粘性、繊りともにあり。As-C 30%、ローム粒20%含む。

2層 褐色粗砂層 粘性なし、繊りあり。ロームブロック80%含む。

3層 褐色粗砂層 粘性、繊りともにあり。As-C 10%含む。ローム土主体。

炉

1層 褐色細砂層 粘性あり、繊り弱。焼土粒10%含む。

2層 褐色細砂層 粘性なし、繊りあり。焼土90%以上含む。

3層 明褐色細砂層 粘性なし、繊りややあり。焼土60%、ローム土40%。

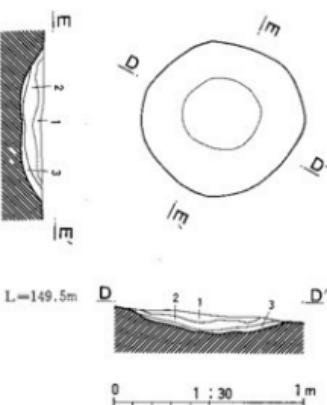
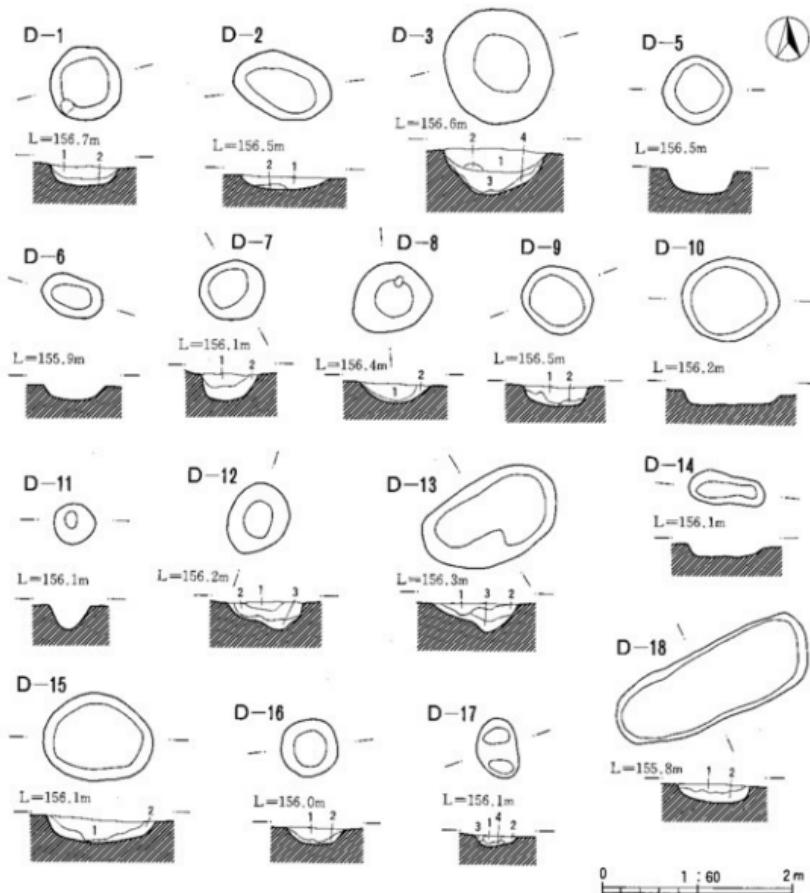
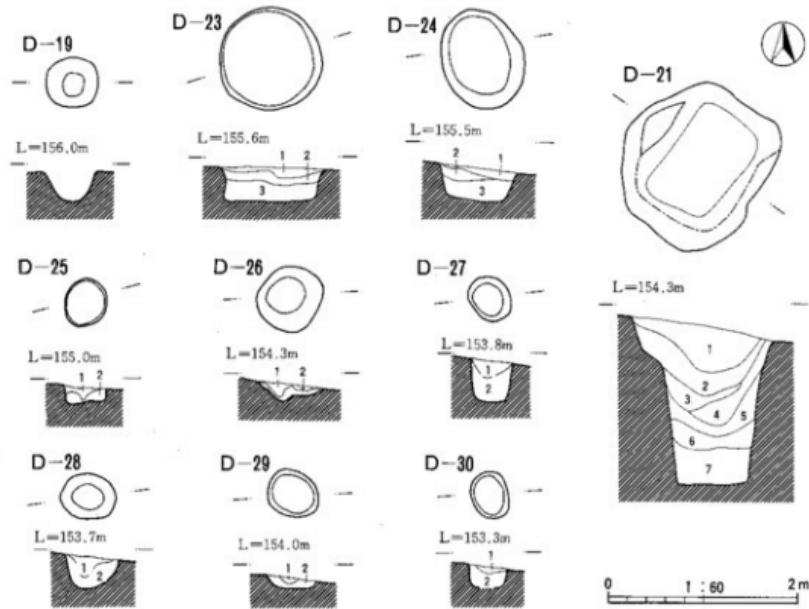


Fig. 29 H-10号住居址



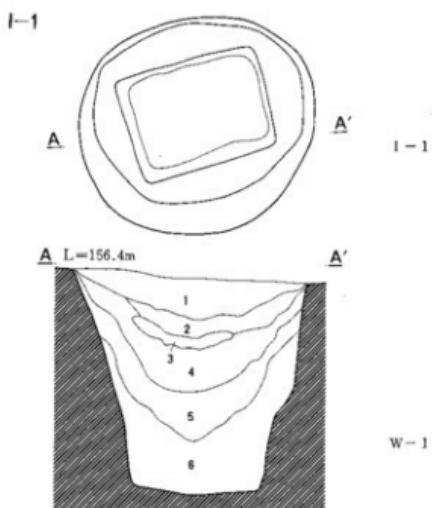
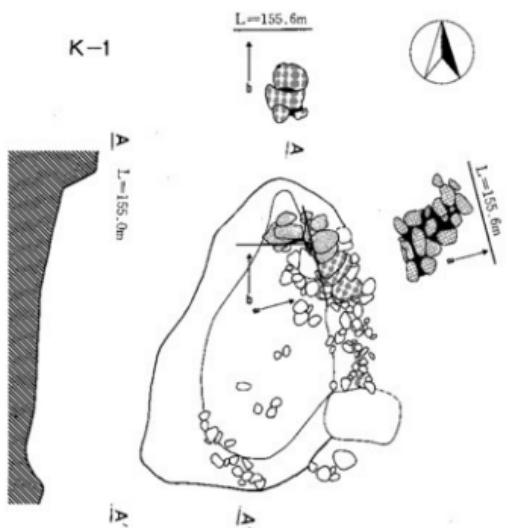
- D-1 1層 暗褐色粗砂層 粘性、繊りともになし。
- D-2 1層 黒色粗砂層 粘性、繊りともになし。
2層 暗褐色粗砂層 粘性あり、繊り弱。
- D-3 1層 暗褐色粗砂層 粘性、繊りともにあり。
2層 黑色粗砂層 粘性あり、繊り弱。
3層 暗褐色粗砂層 粘性あり、繊りなし。
4層 暗褐色粗砂層 粘性、繊りともにあり。
- D-7 1層 黑褐色粗砂層 粘性、繊りともになし。
2層 暗褐色粗砂層 粘性ややあり、繊りあり。
- D-8 1層 黑褐色粗砂層 粘性弱、繊りあり。
- D-9 1層 暗褐色粗砂層 粘性弱、繊りなし。
2層 暗褐色細砂層 粘性弱、繊りあり。
- D-10 1層 暗褐色粗砂層 粘性弱、繊りなし。
2層 暗褐色細砂層 粘性弱、繊りあり。
- D-11 1層 暗褐色粗砂層 粘性弱、繊りなし。
- D-12 1層 暗褐色粗砂層 粘性なし、繊りあり。
2層 暗褐色細砂層 粘性なし、繊りあり。
- D-13 1層 暗褐色細砂層 粘性弱、繊りややあり。
2層 暗褐色細砂層 粘性弱、繊りややあり。
3層 暗褐色粗砂層 粘性弱、繊りややあり。
- D-14 1層 暗褐色粗砂層 粘性なし、繊りあり。
- D-15 1層 暗褐色粗砂層 粘性弱、繊りあり。
2層 暗褐色細砂層 粘性弱、繊りあり。
- D-16 1層 暗褐色粗砂層 粘性なし、繊りあり。
- D-17 1層 暗褐色粗砂層 粘性弱、繊りややあり。
- D-18 1層 暗褐色粗砂層 粘性弱、繊りあり。

Fig. 30 古墳時代土坑(1)



- D-16
1層 黒褐色粗砂層 粘性なし、繊りあり。
2層 暗褐色粗砂層 粘性弱、繊りあり。
- D-17
1層 褐色粗砂層 粘性あり、繊りなし。
2層 黒褐色粗砂層 粘性なし、繊りあり。
3層 暗褐色粗砂層 粘性、繊りとともに強い。
4層 暗褐色粗砂層 粘性なし、繊りあり。
- D-18
1層 褐色粗砂層 粘性弱、繊りあり。
2層 褐色細砂層 粘性弱、繊りあり。
- D-23
1層 褐色繊砂層 粘性なし、繊りあり。
2層 暗褐色微砂層 粘性弱、繊りあり。
3層 暗褐色微砂層 粘性弱、繊りあり。
- D-24
1層 褐色粗砂層 粘性なし、繊りあり。
2層 暗褐色微砂層 粘性弱、繊りあり。
3層 暗褐色微砂層 粘性弱、繊りあり。
- D-25
1層 褐色粗砂層 粘性あり、繊りなし。
2層 褐色粗砂層 粘性なし、繊りややあり。
- D-26
1層 1
2層 2
3層 3
- D-27
1層 1
2層 2
3層 3
4層 4
5層 5
6層 6
7層 7
- D-28
1層 1
2層 2
- D-29
1層 1
2層 2
- D-30
1層 1
2層 2
- D-21
1層 黒褐色細砂層 粘性弱、繊りあり。
2層 暗褐色微砂層 粘性なし、繊りややあり。
- D-27
1層 黑褐色細砂層 粘性弱、繊りあり。
2層 暗褐色微砂層 粘性なし、繊りややあり。
- D-28
1層 暗褐色微砂層 粘性なし、繊りあり。
2層 暗褐色微砂層 粘性なし、繊りあり。
- D-29
1層 暗褐色微砂層 粘性あり、繊りややあり。
2層 黑褐色微砂層 粘性ややあり、繊りあり。
- D-30
1層 黑褐色細砂層 粘性弱、繊りあり。
2層 暗褐色微砂層 粘性なし、繊りややあり。
- D-31
1層 暗褐色粗砂層 粘性弱、繊りややあり。
2層 暗褐色粗砂層 粘性弱、繊りややあり。
3層 黑褐色粗砂層 粘性、繊りとともに弱い。
4層 暗褐色細砂層 粘性弱、繊りややあり。
5層 明褐色細砂層 粘性弱、繊りややあり。
6層 板暗褐色細砂層 粘性、繊りとともになし。
7層 暗褐色細砂層 粘性、繊りとともに弱い。

Fig. 31 古墳時代土坑(2)

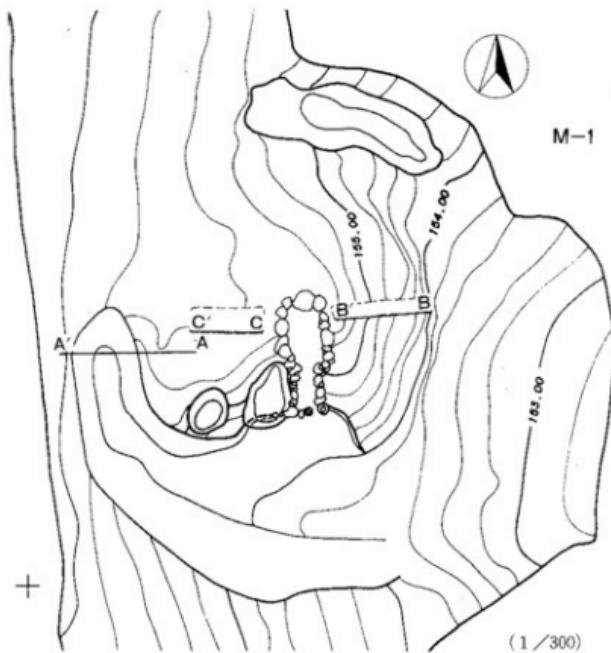


1層 黒色粗砂層 粘性弱、締りあり。As-B 10%、As-C 30%含む。
2層 褐色粗砂層 粘性特にあり。締りあり。As-C 30%、ローム土を多く含む。
3層 黒褐色粗砂層 粘性、締りとともにあり。As-C 30%、ローム粒 5%含む。
4層 暗褐色細砂層 粘性、締りともに弱。As-C 5%、ローム土を含む。
5層 褐色細砂層 粘性あり、締り弱。ローム土を多く含む。
6層 褐色細砂層 粘性、締りとともにあり。ロームブロック 20%含む。

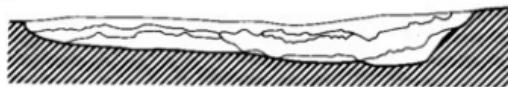
1層 黒褐色粗砂層 粘性ややあり、締りあり。As-C 50%含む。
2層 晴褐色細砂層 粘性強、締りあり。ローム粒 50%含む。



Fig. 32 K-1号炭窯址・I-1号井戸



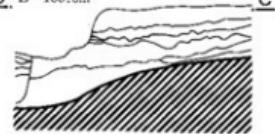
A. L=156.2m



B. L=155.5m

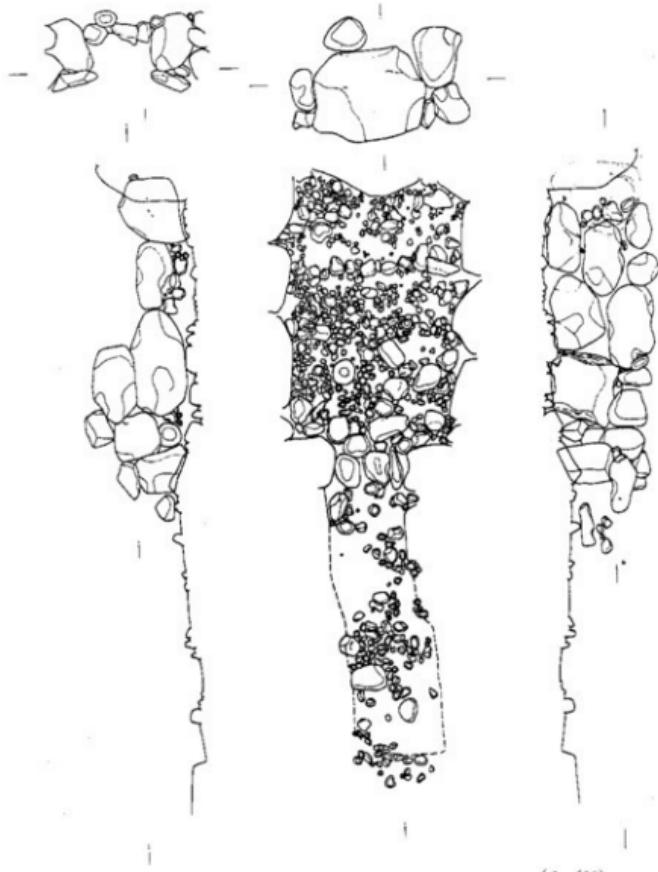


C. L=155.5m



0 1 : 80 2 m

Fig. 33 M-1号墳(1)



(1/60)

Fig. 34 M-1号墳(2)

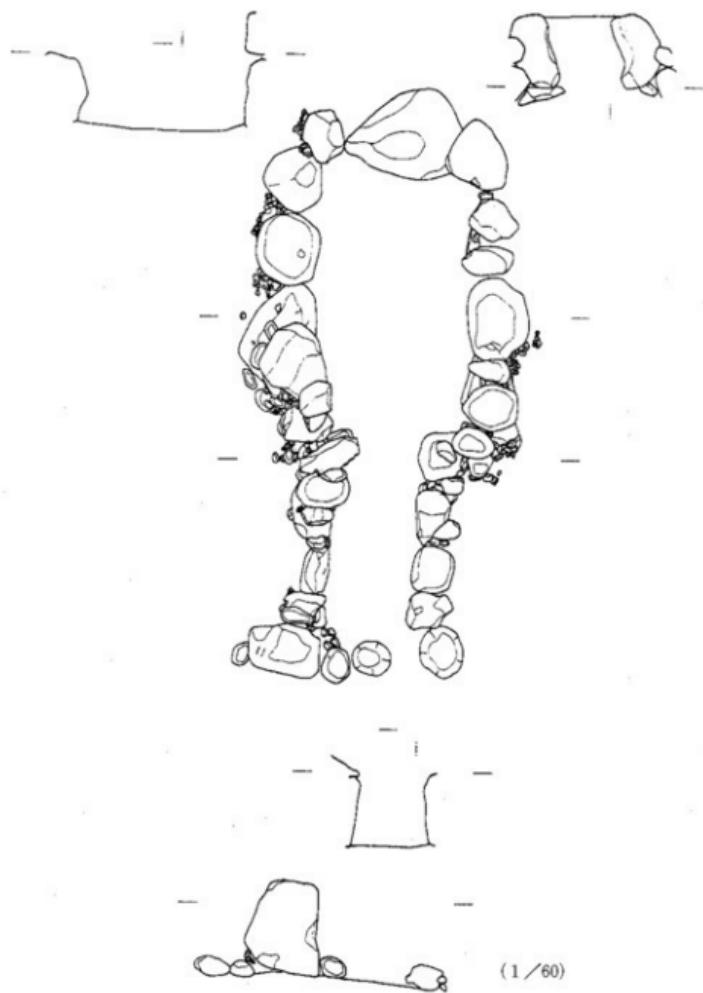
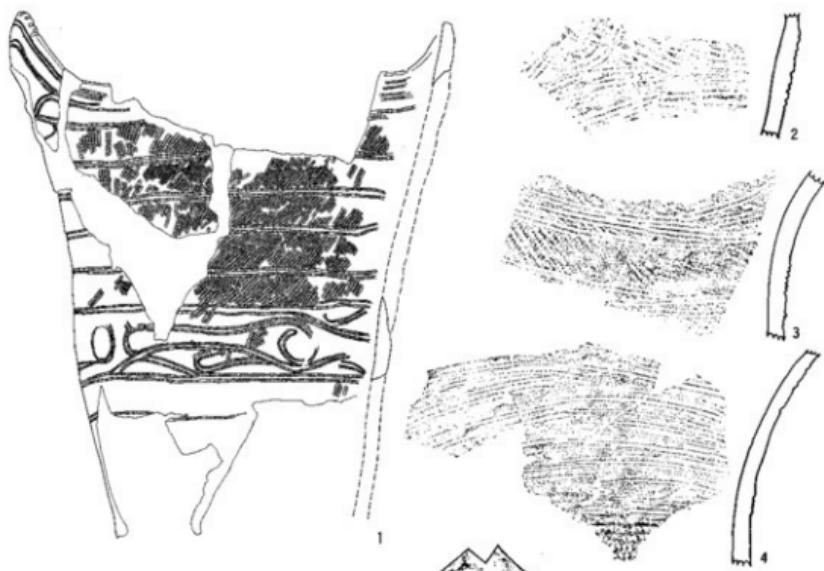
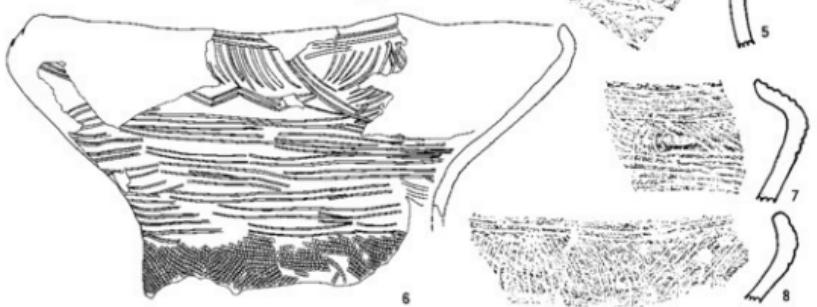


Fig. 35 M-1号墳(3)



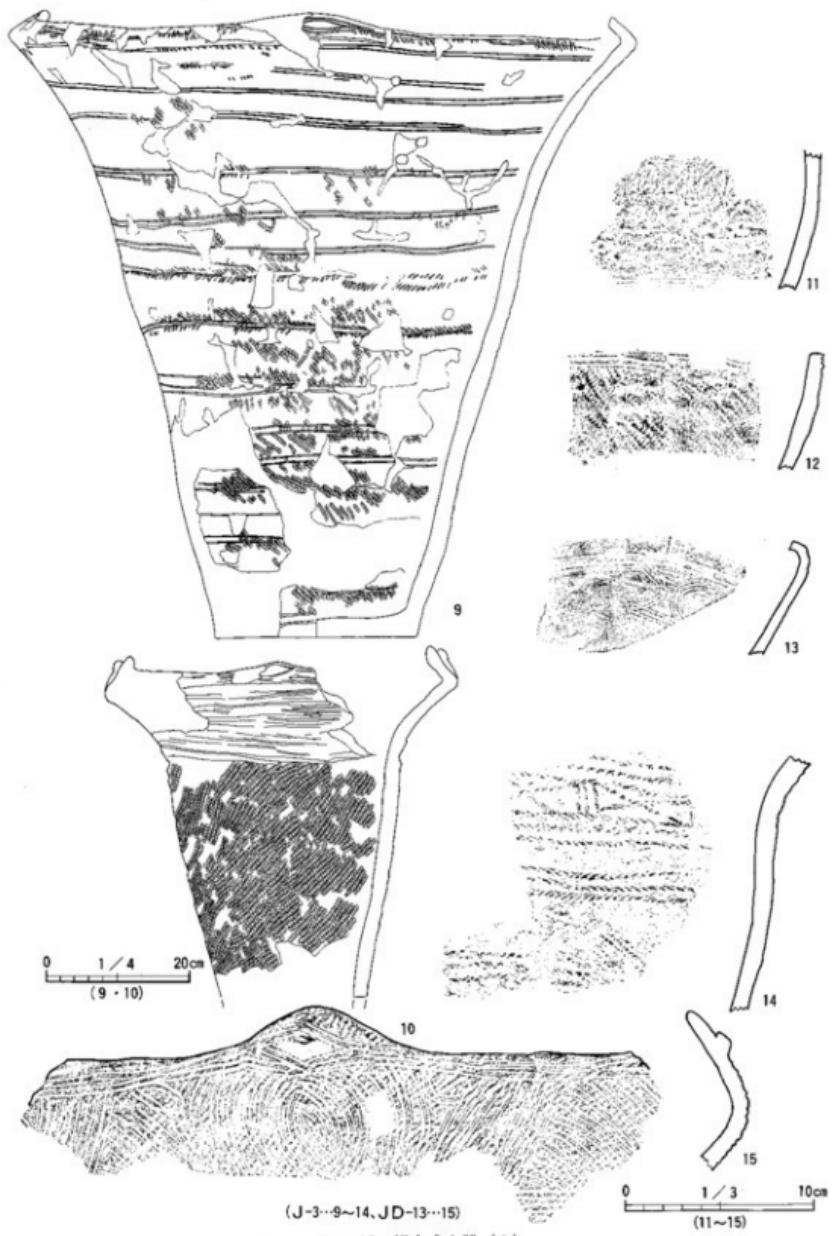
0 1 / 4 20cm
(1 - 6)



(J-1-2-4, J-2-1-5-8)

Fig. 36 縄文式土器 (1)

0 1 / 3 10cm
(2 - 5 - 7 - 8)



(J-3-9~14、JD-13~15)

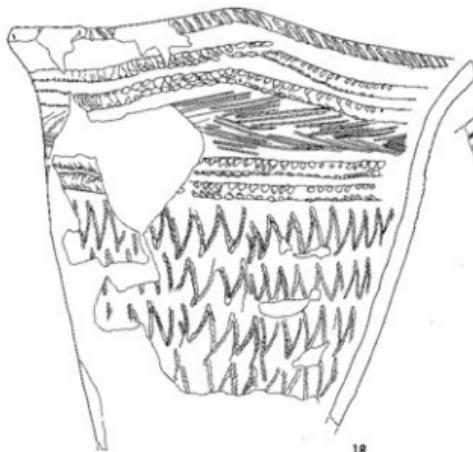
Fig. 37 繩文式土器 (2)



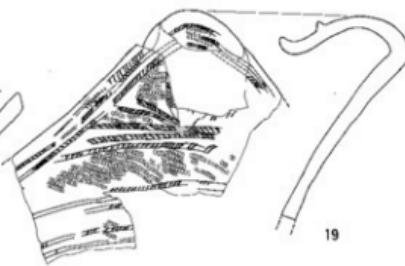
16



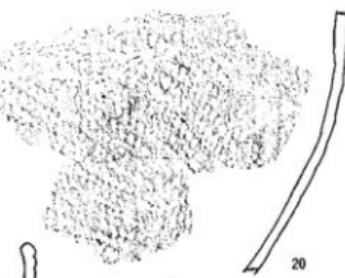
17



18



19



20



21



22



24

0 1 / 4 20cm

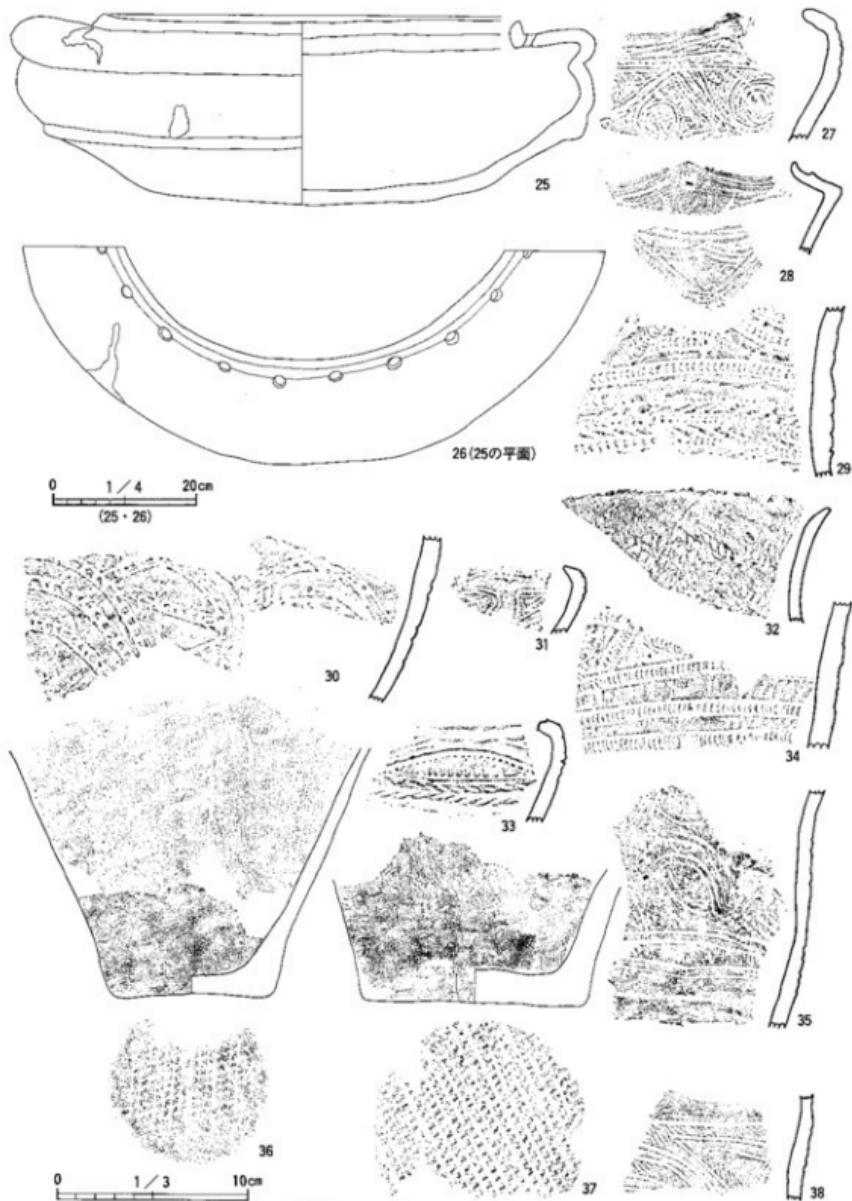
(16 - 18 - 19 - 21)

(J-3-16-19, J-4-20-22, JD-9-23-24, JD-19-21)

0 1 / 3 10cm

(17 - 20 - 22-24)

Fig. 38 纹文式土器 (3)



(JD-19-25, JD-20-27, 包含層-28-35, 1E21-36-37, 1E17-38)

Fig. 39 縄文式土器 (4)

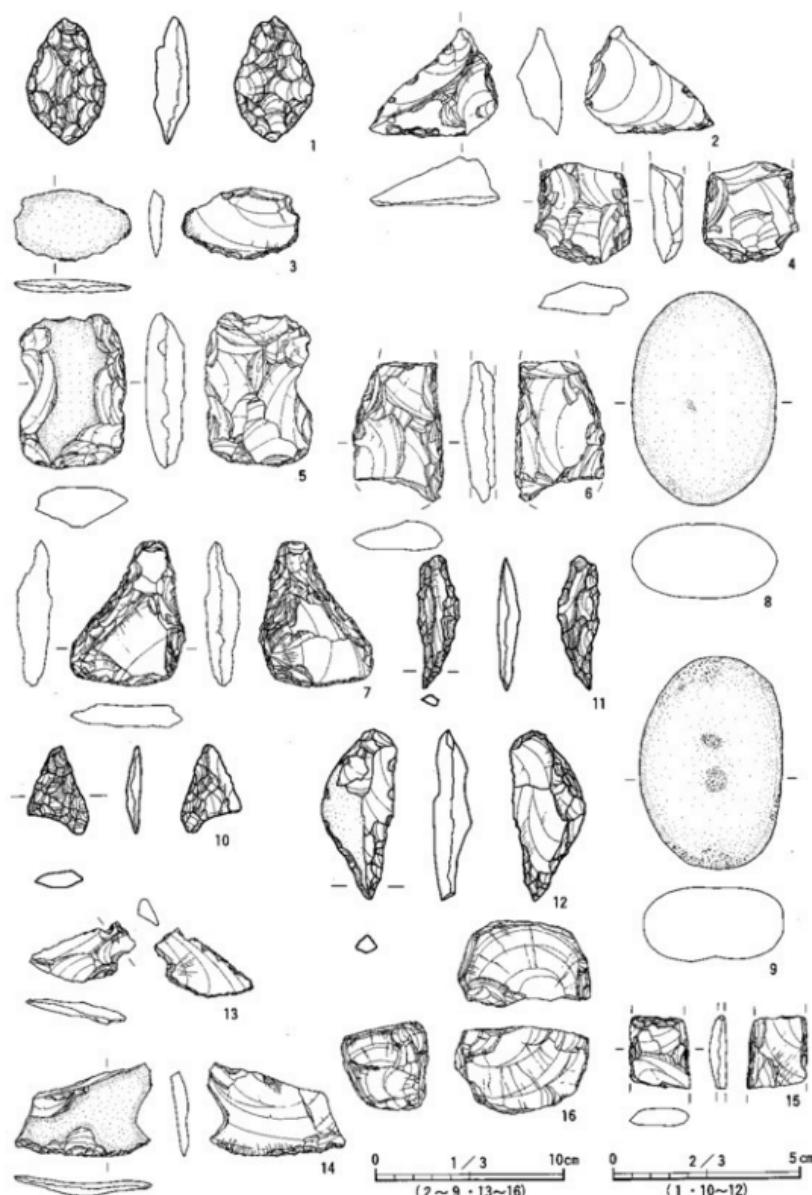


Fig. 40 縄文時代の石器 (1)

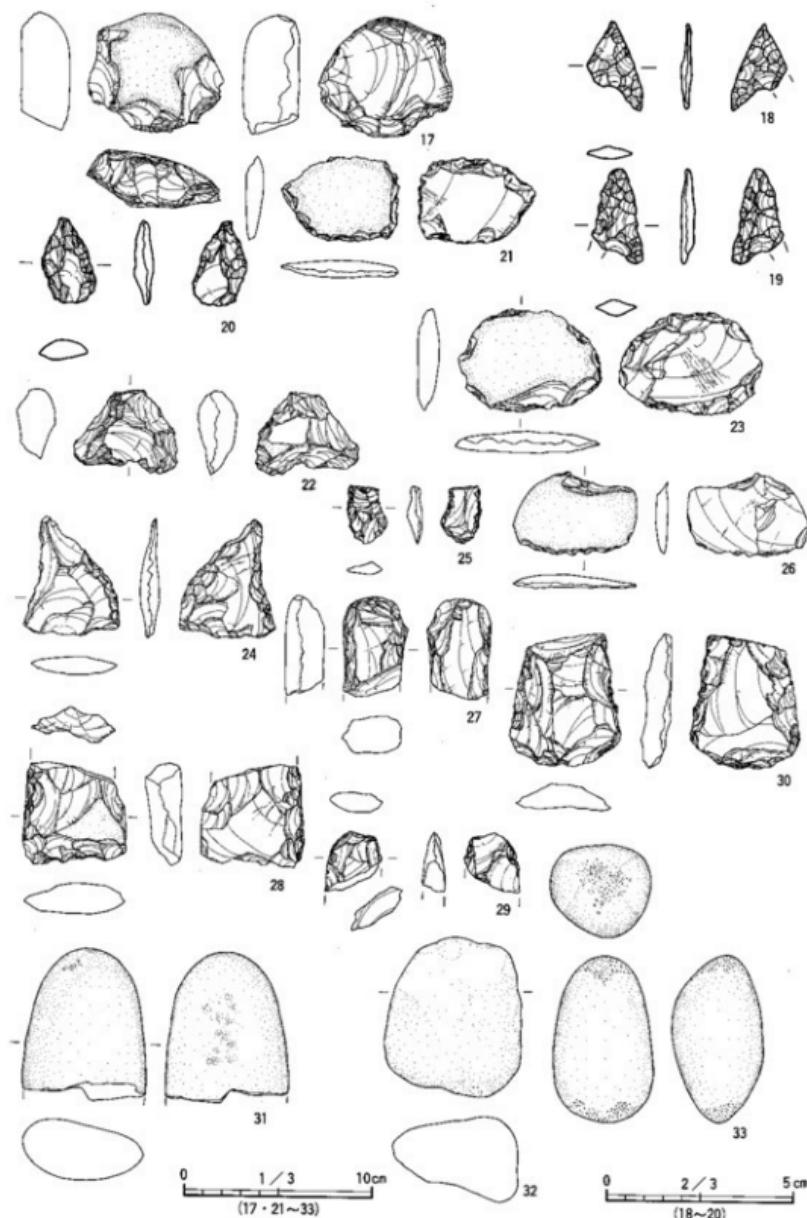


Fig. 41 純文時代の石器 (2)

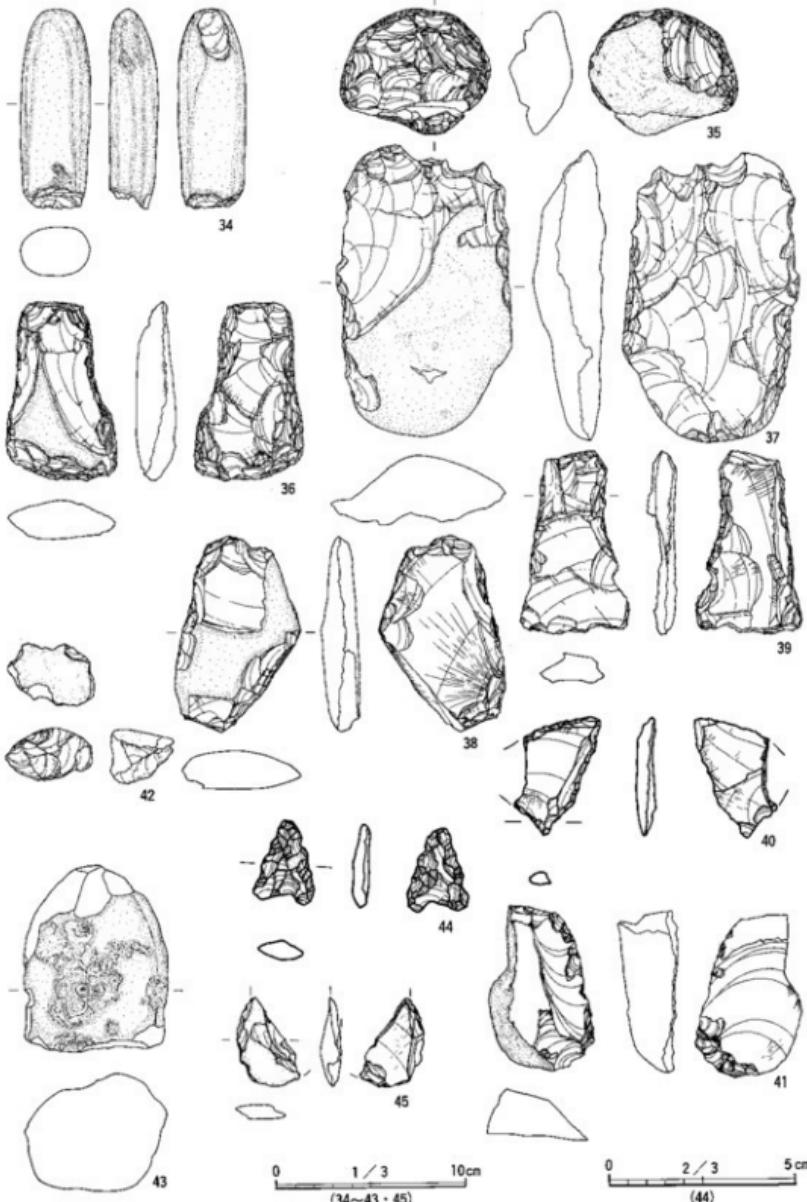


Fig. 42 縄文時代の石器 (3)

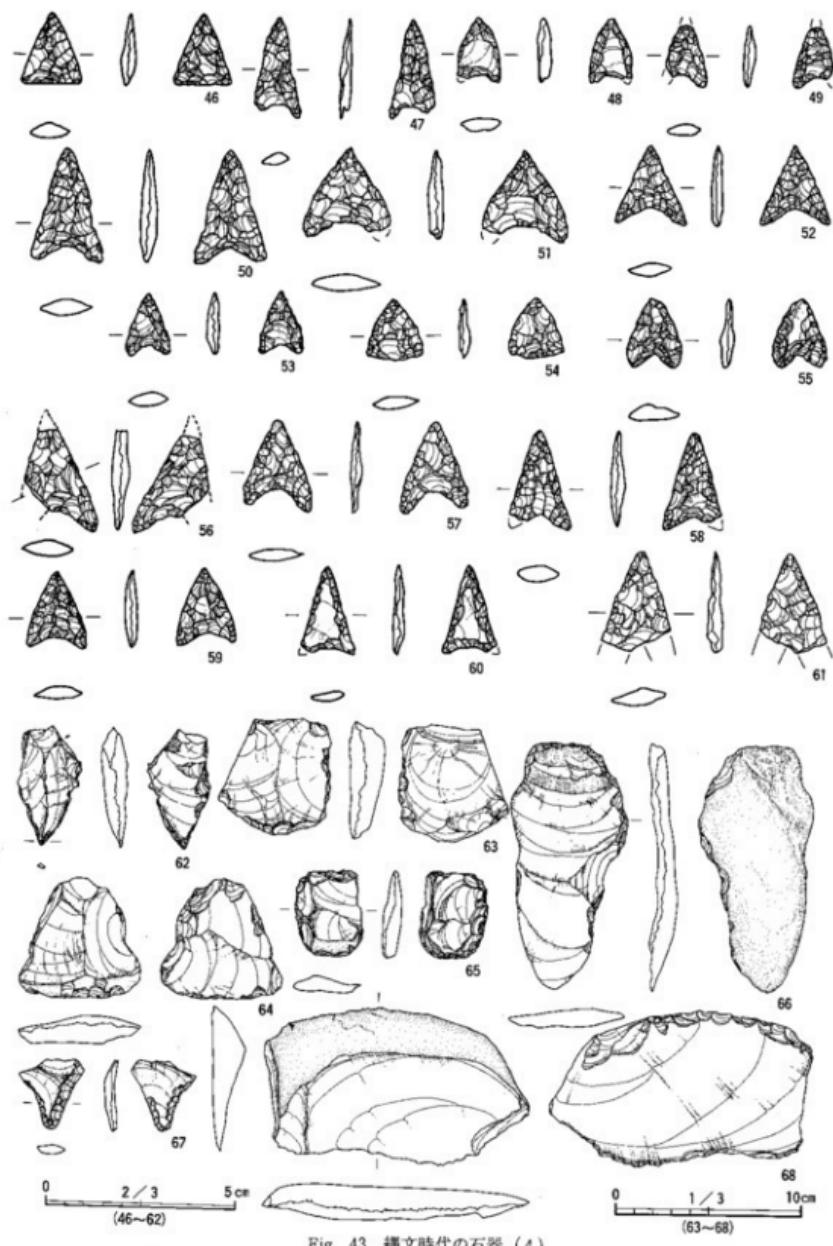


Fig. 43 純文時代の石器 (4)



Fig. 44 縄文時代の石器（5）



Fig. 45 縄文時代の石器 (6)

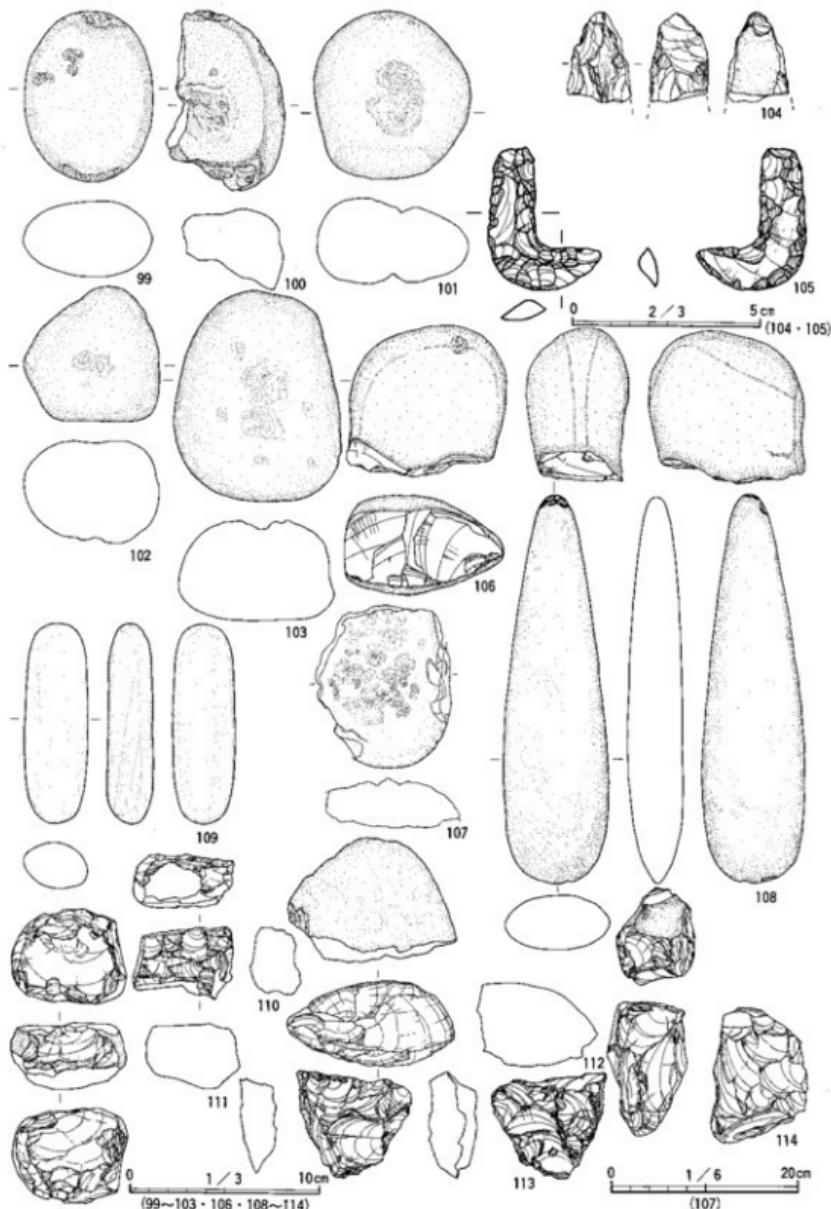


Fig. 46 縄文時代の石器 (7)

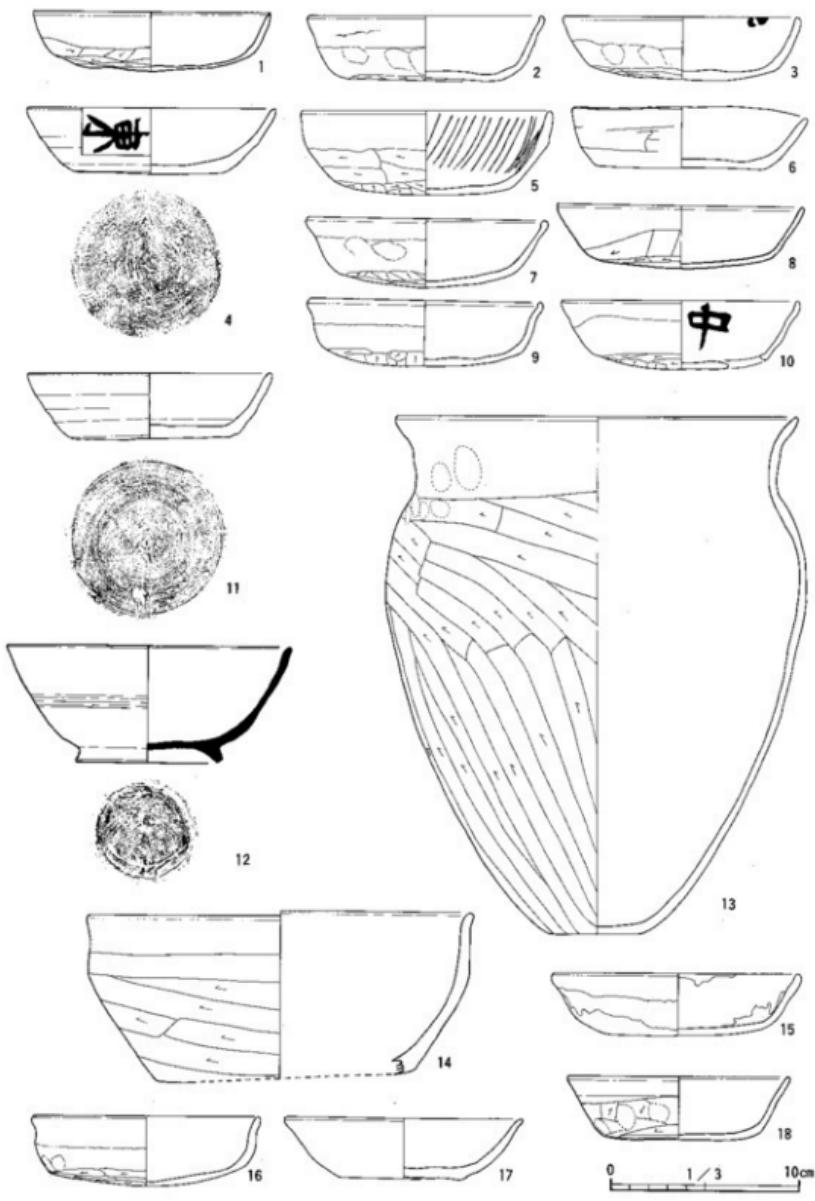


Fig. 47 古墳・平安時代の遺物（1）

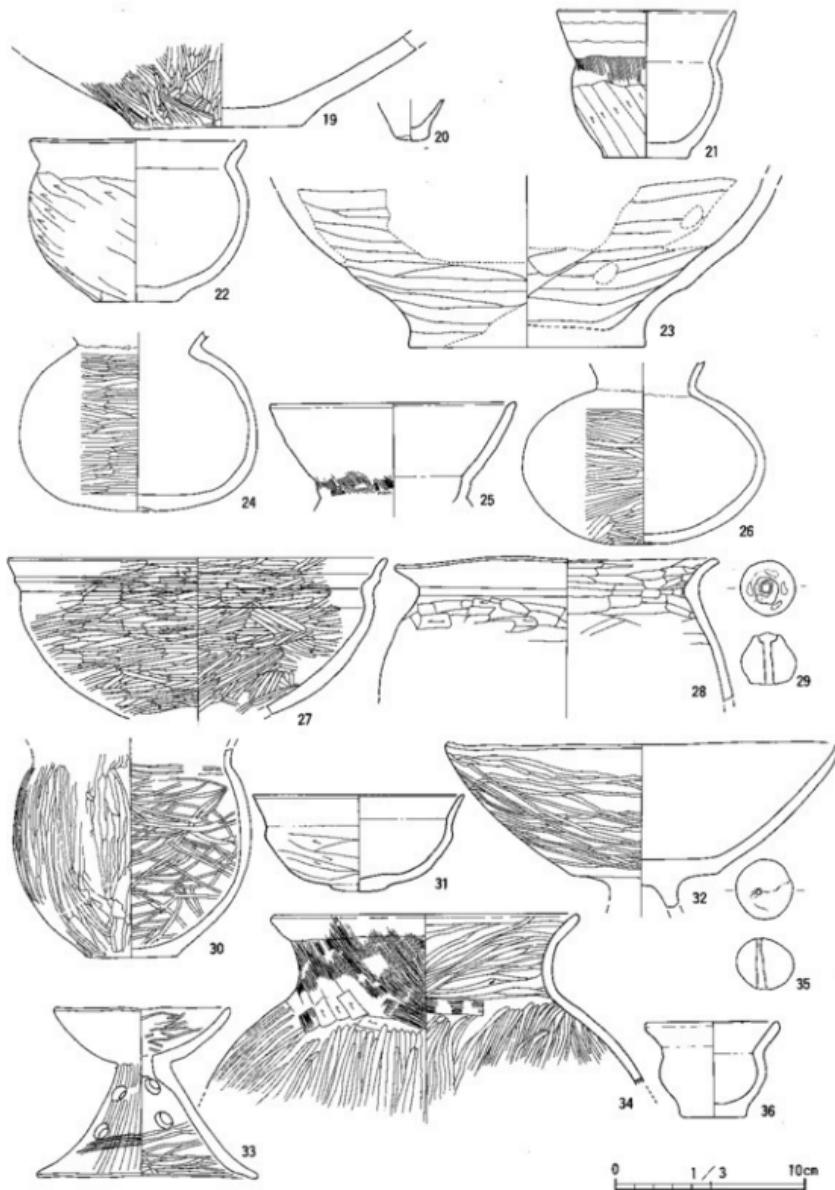


Fig. 48 古墳時代の遺物（2）

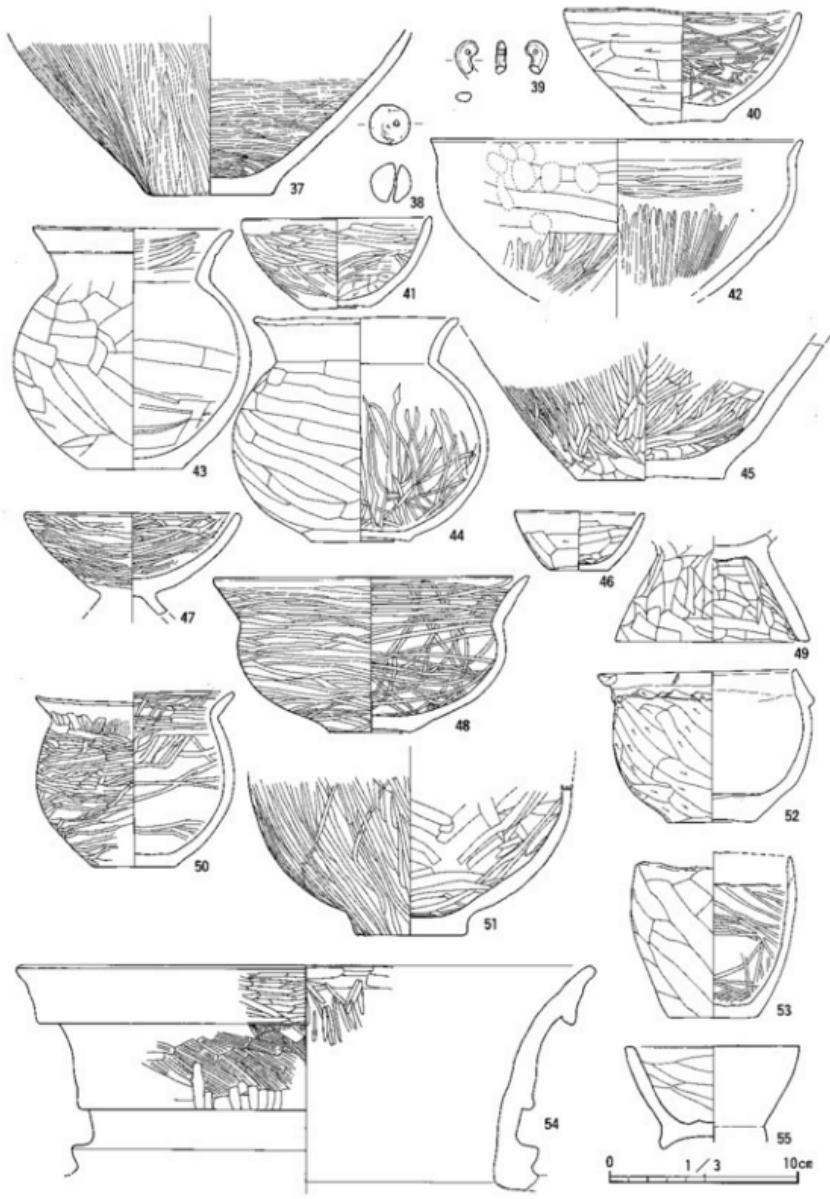


Fig. 49 古墳時代の遺物 (3)

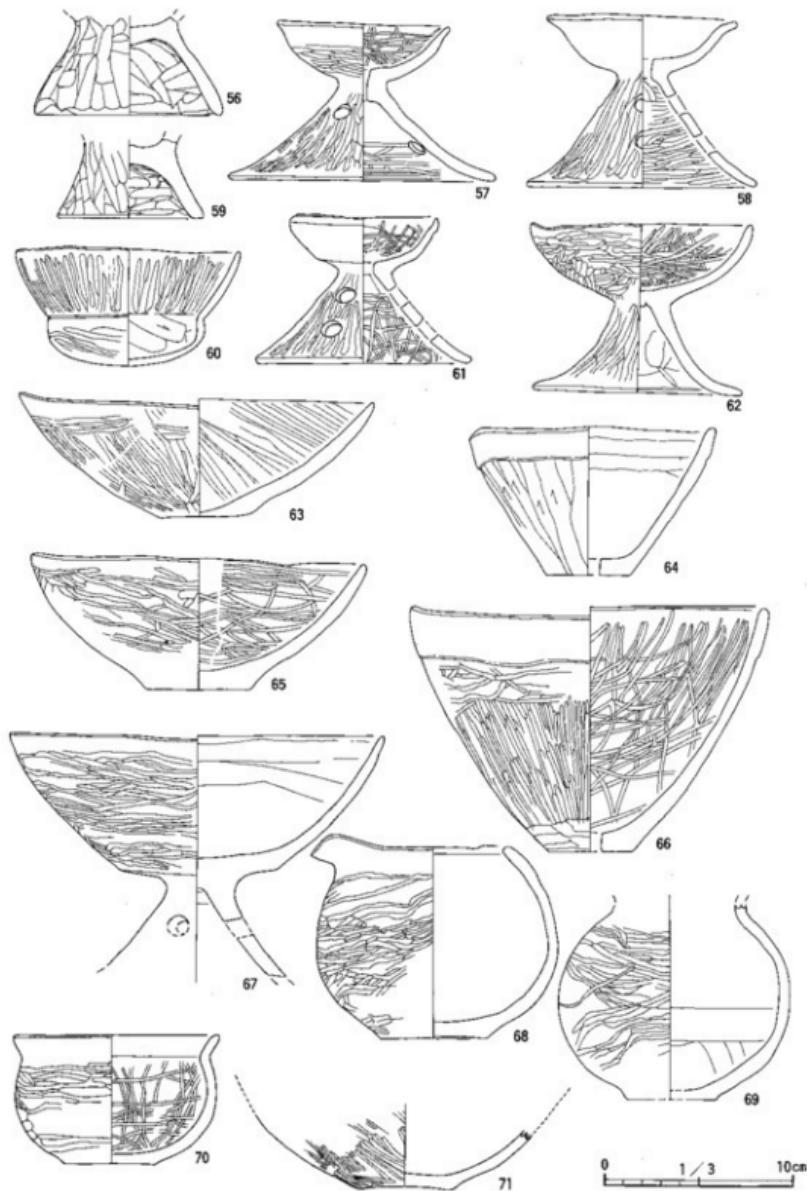


Fig. 50 古墳時代の遺物 (4)

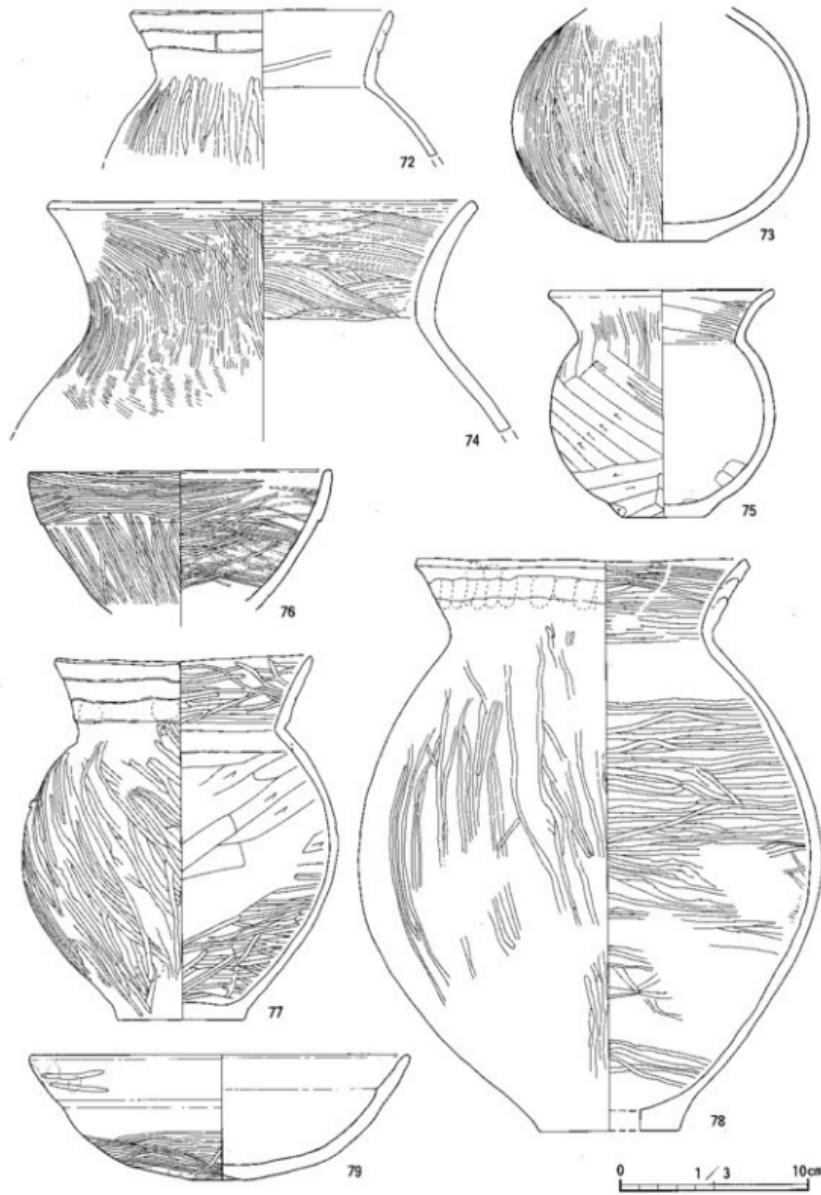


Fig. 51 古墳時代の遺物（5）

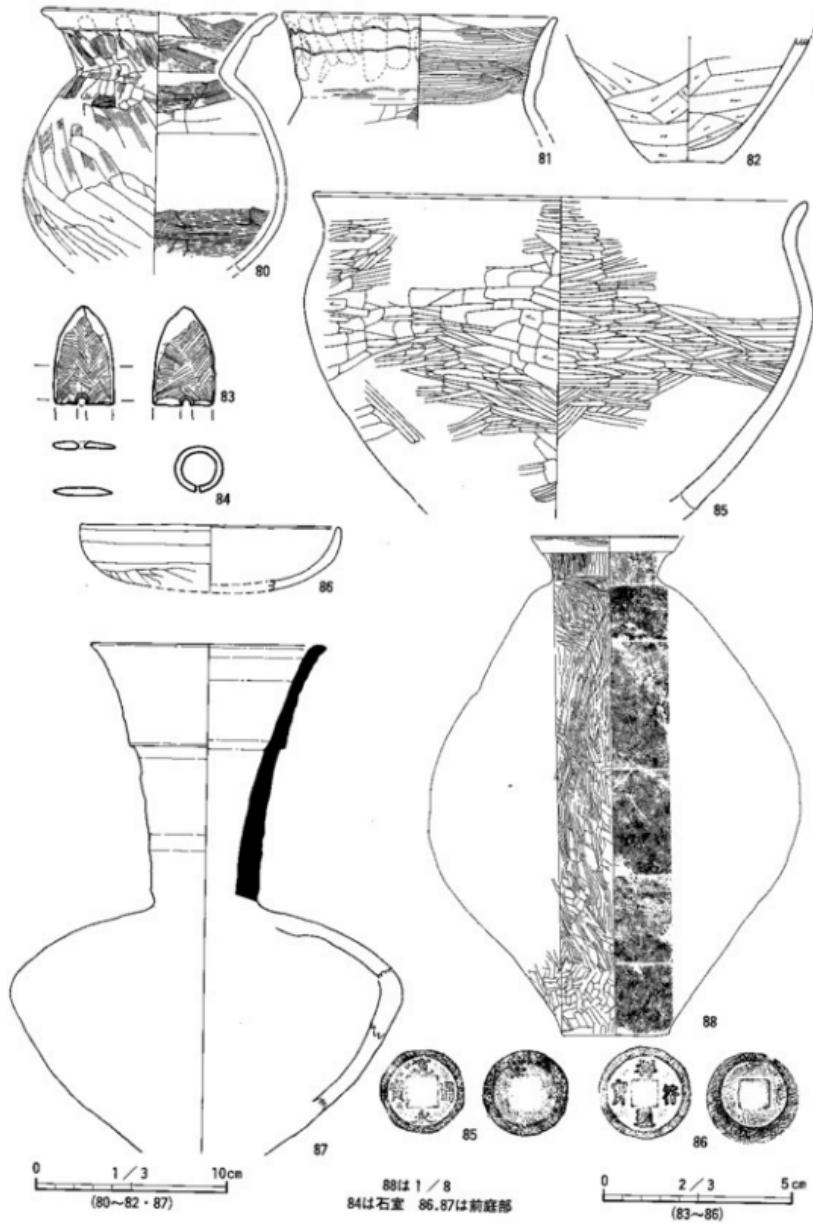


Fig. 52 古墳時代の遺物 (6)

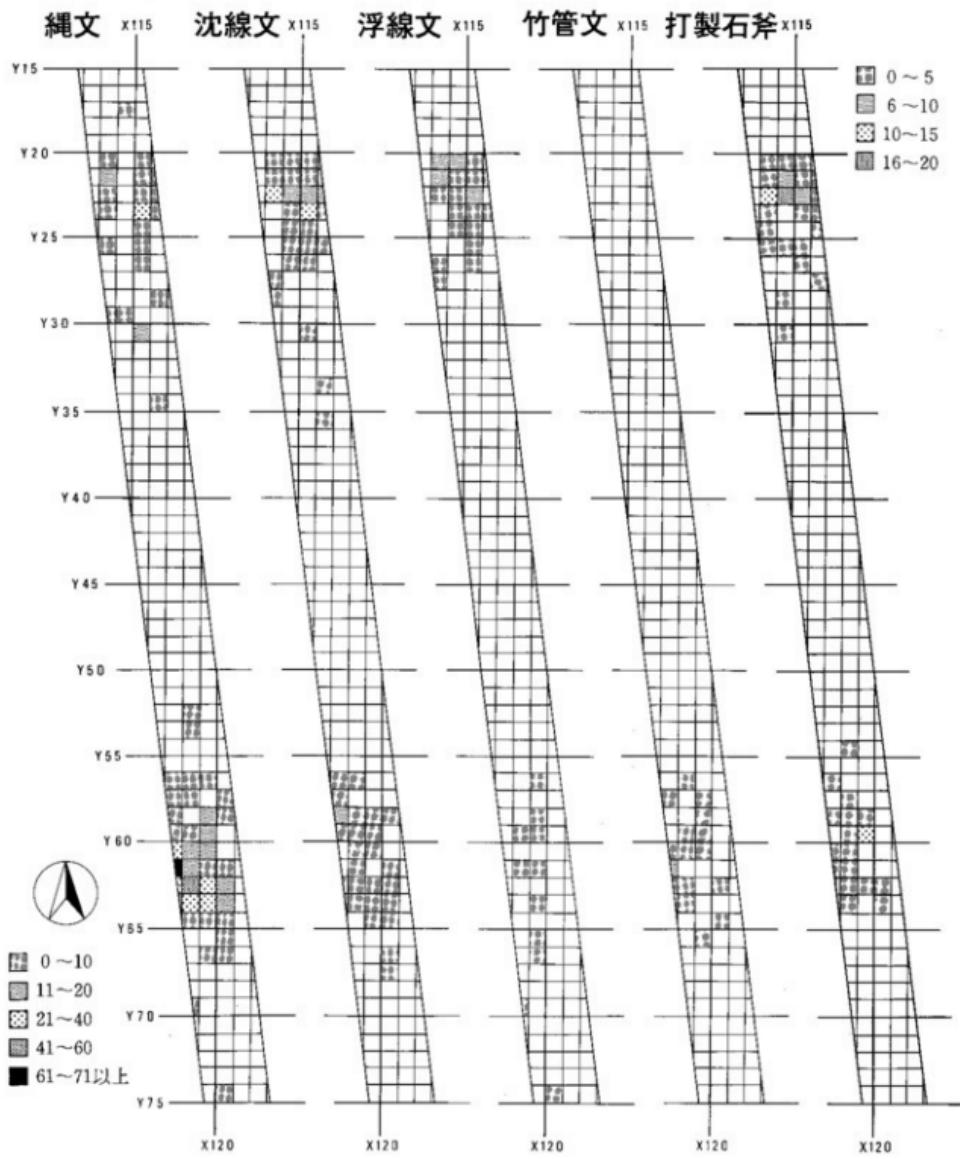


Fig. 53 縄文包含層の遺物分布

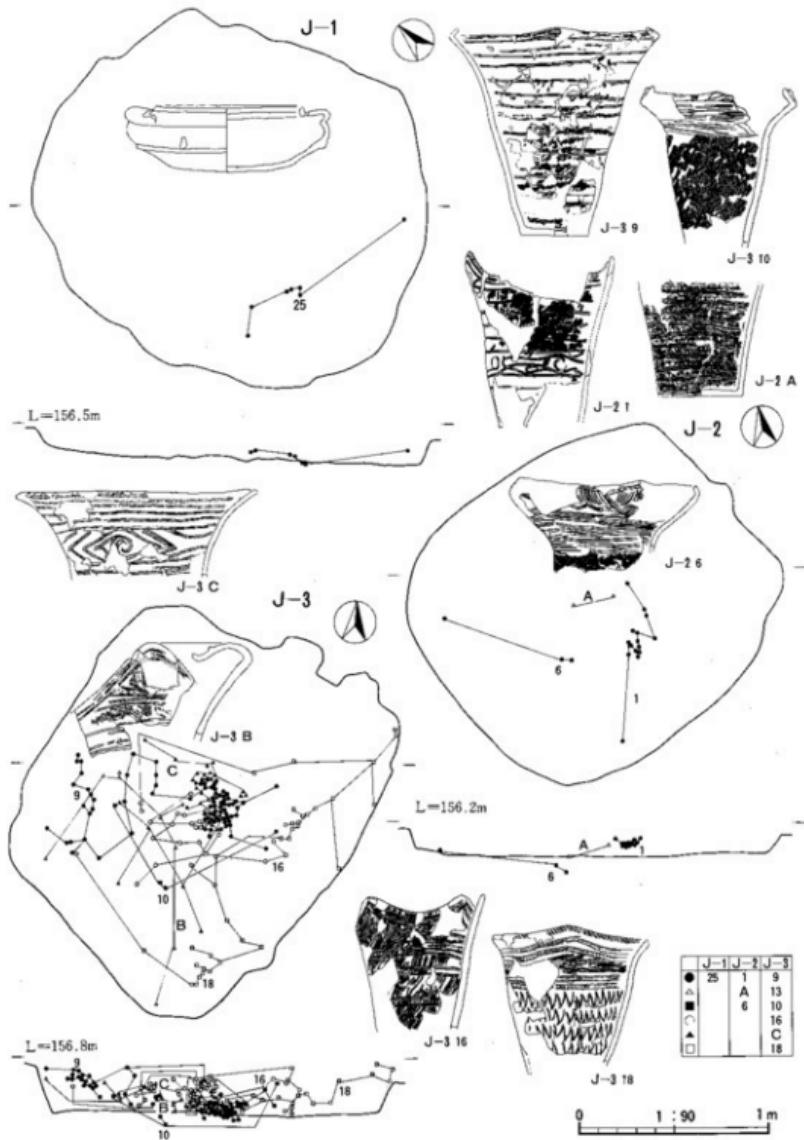


Fig. 54 純文時代住居址の遺物分布

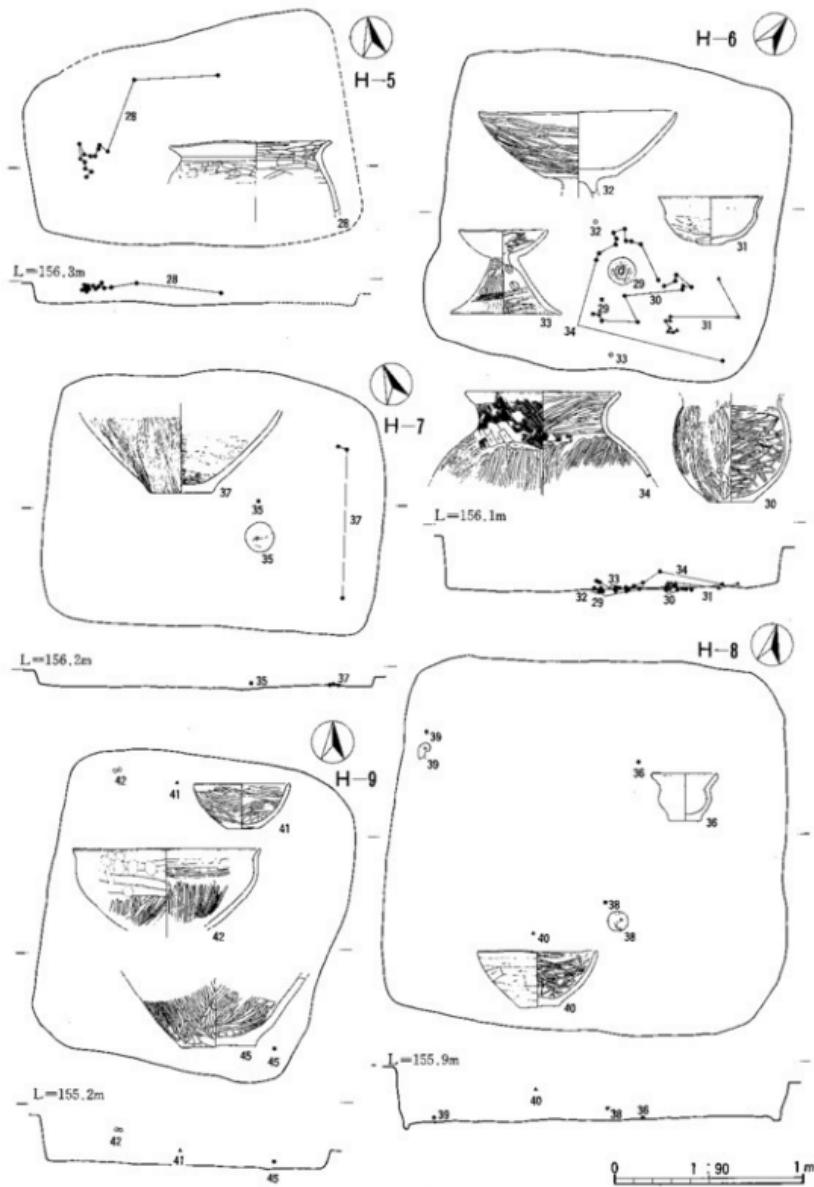


Fig. 55 古墳時代住居址の遺物分布

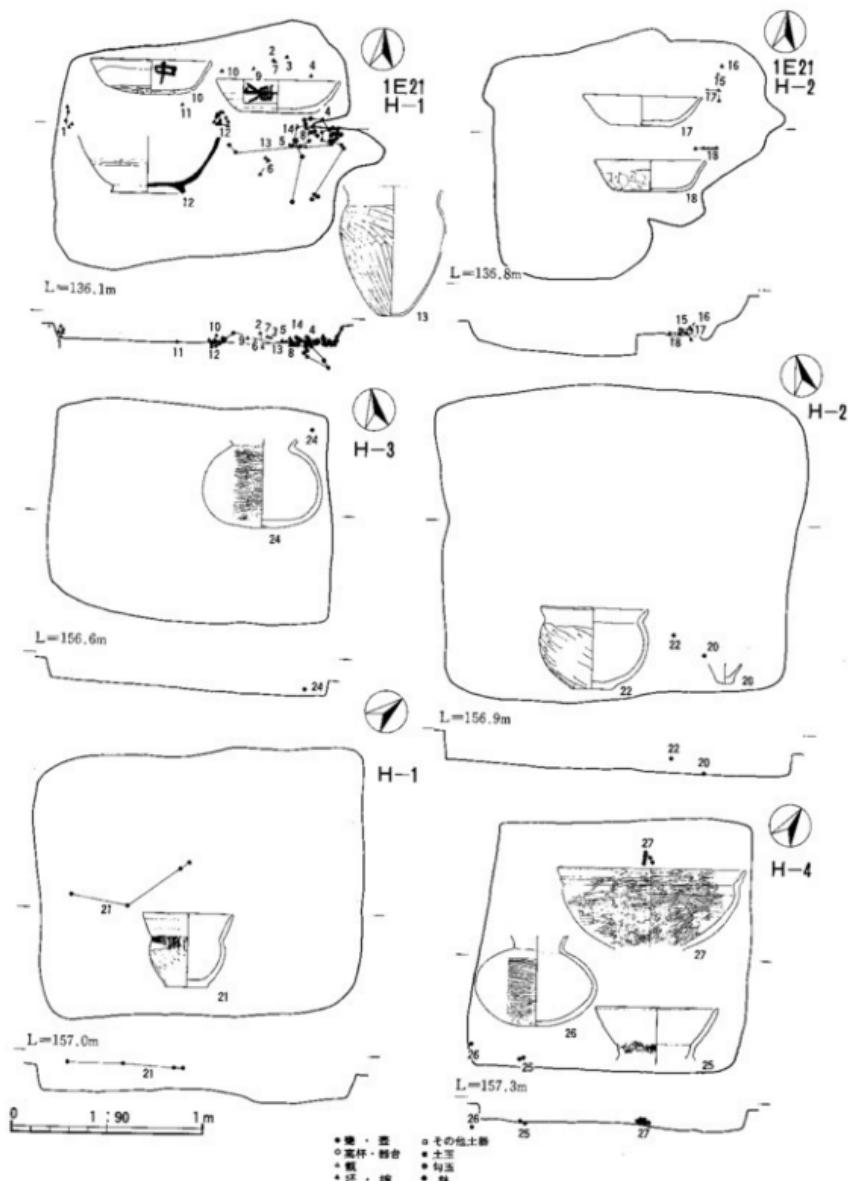


Fig. 56 古墳・平安時代住居址の遺物分布



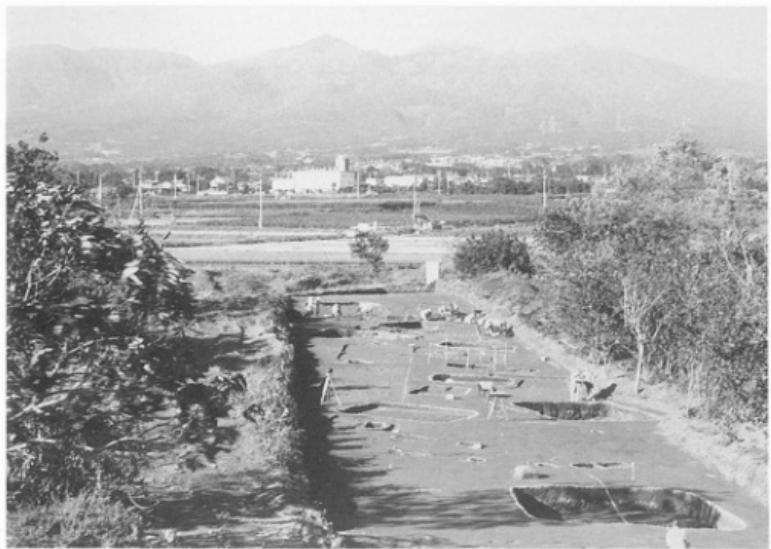
1. 横依遺跡群全景



2. 横依遺跡群全景



1. 熊の穴遺跡全景



2. 熊の穴遺跡から赤城山をのぞむ



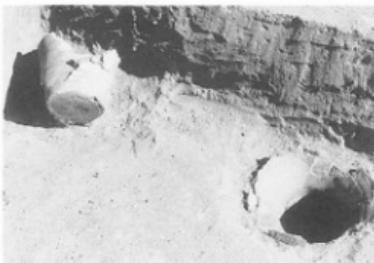
1. J-1号住居址



2. 熊の穴縄文時代面



1. J-2号住居址遺物出土状態



2. J-2号住居址遺物出土状態



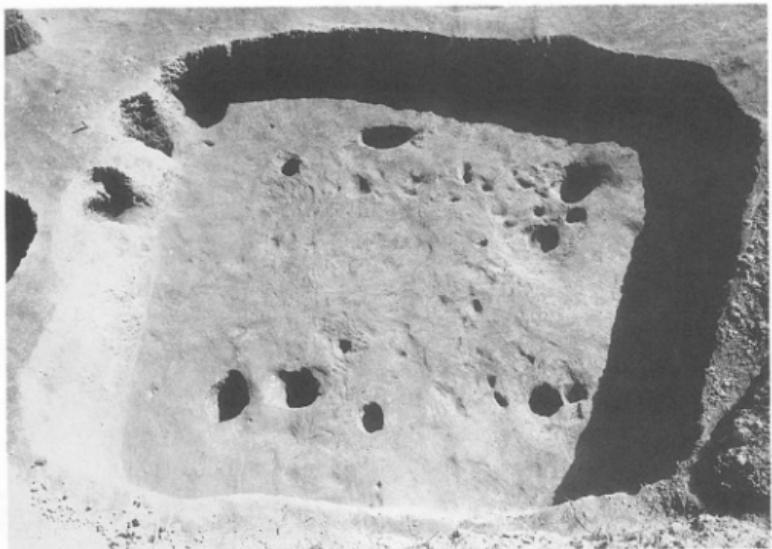
3. J-2号住居址全景



4. J-3号住居址遺物出土状態



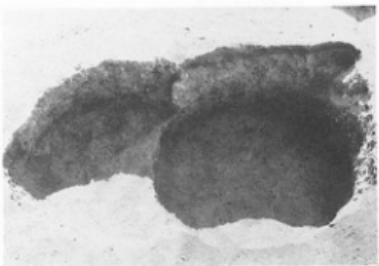
5. J-3号住居址遺物出土状態



1. J-3号住居址全景



2. J-4号住居址全景



3. JD-8号土坑全景



4. JD-19号土坑遗物出土状态



5. JD-23号土坑全景



1. H-1号住居址全景



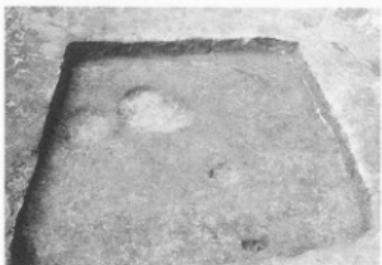
2. H-1号住居址炭化材出土状态



3. H-3号住居址全景



4. H-3号住居址小壶出土状态



5. H-4号住居址全景



6. H-5号住居址遗物出土状态



7. H-6号住居址炭化材出土状态



8. H-6号住居址全景



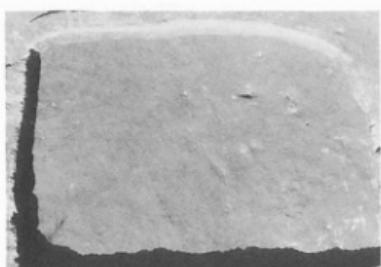
1. H-6号住居址炭化材出土状態



2. H-6号住居址炭化材出土状態



3. H-6号住居址遺物出土状態



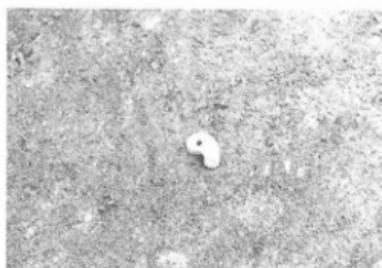
4. H-7号住居址全景



5. H-7号住居址遺物出土状態



1. H-8号住居址全景



2. H-8号住居址遗物出土状态



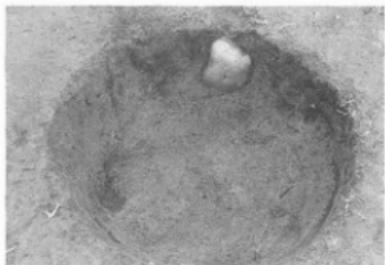
3. H-9号住居址全景



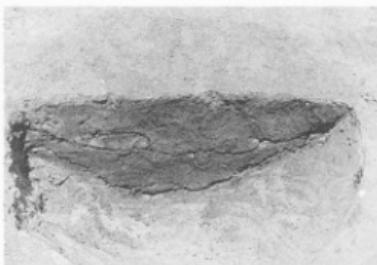
4. H-9号住居址遗物出土状态



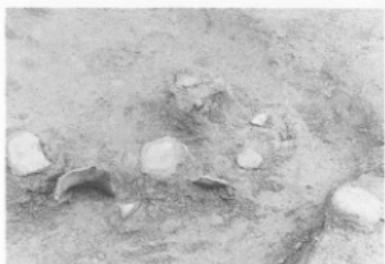
5. H-10号住居址全景



1. D-1号土坑全景



2. D-6号土坑セクション



3. D-10号土坑遺物出土状態



4. D-21号土坑セクション



5. D-21号土坑遺物出土状態



6. I-1号井戸遺物出土状態



7. 古墳時代面出土遺物



8. 古墳時代面出土遺物



1. M-1号墳全景



2. M-1号墳全景（発掘前）



3. M-1号墳石室残存状態（発掘前）



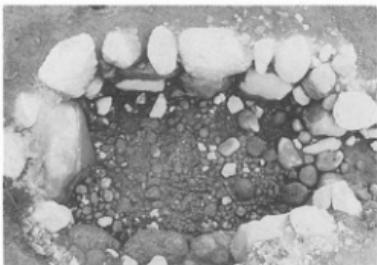
4. M-1号墳石室全景



5. M-1号墳石室全景



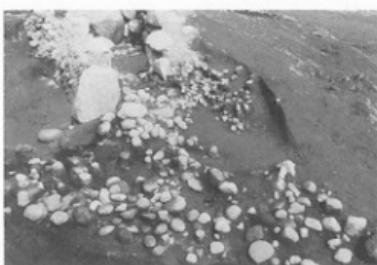
1. M-1号填石室全景



2. M-1号填石室全景



3. M-1号填石室全景



4. M-1号填前部



5. M-1号填石室構築状態



6. M-1号填羨門



7. M-1号填石室全景



8. M-1号填丘下遺物出土状態



1. I E21 H-1号住居址全景



2. I E21 H-1号住居址遺物出土状態



3. I E21 H-1号住居址カマド



4. I E21 全 景



5. I E18 JD-1号土坑



6. I E18 W-1号溝



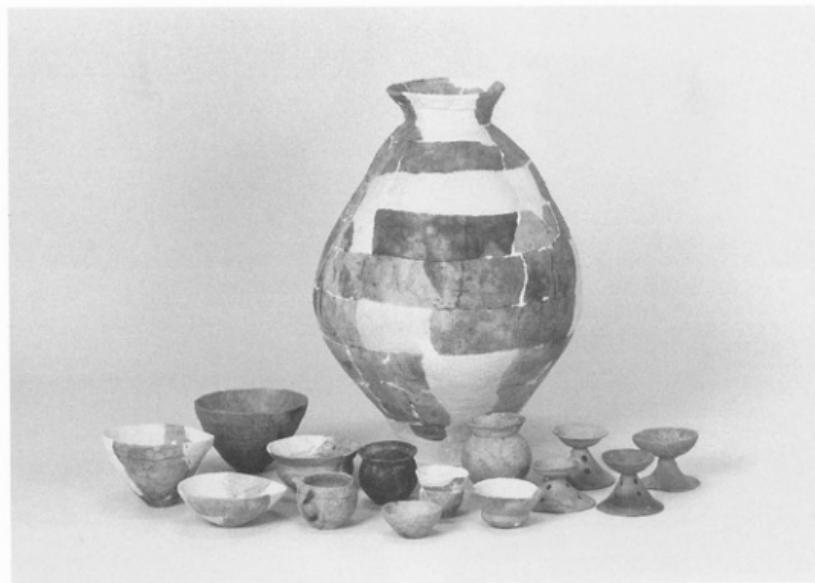
7. 区画道路部分からの調査



8. 市道5・5・6号線部分の調査



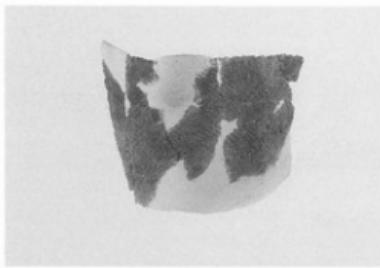
1. 縄文土器群



2. 土師器群



1. J-3号住居址出土の土器



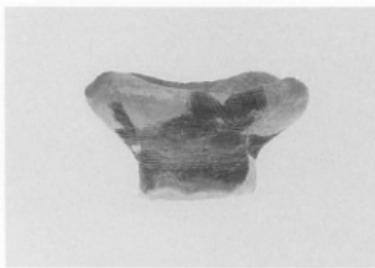
2. J-1号住居址出土の土器



3. J-2号住居址出土の土器



4. J-2号住居址出土の土器



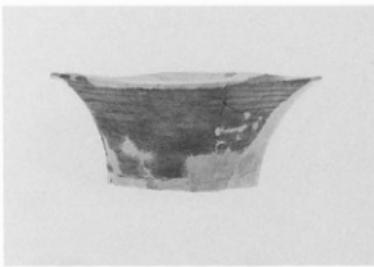
5. J-2号住居址出土の土器



1. J D-19号土坑出土の土器



2. J-3号住居址出土の土器



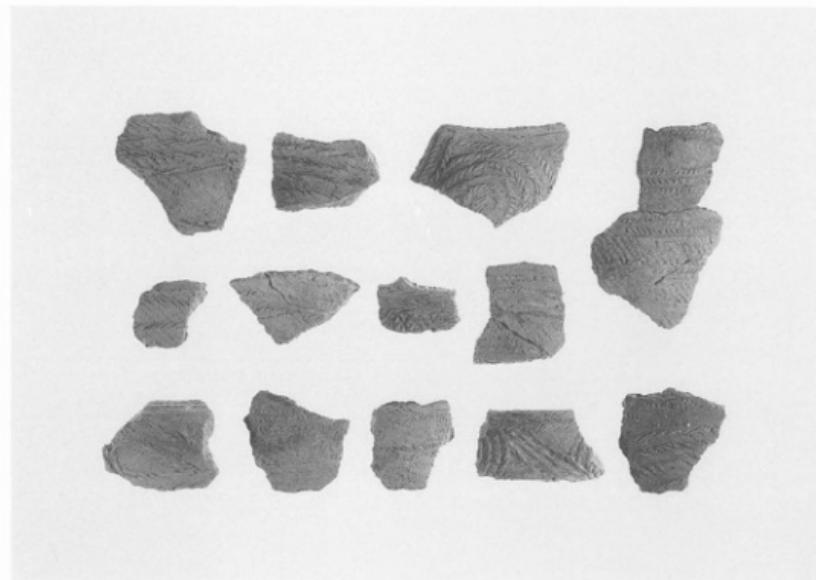
3. J-3号住居址出土の土器



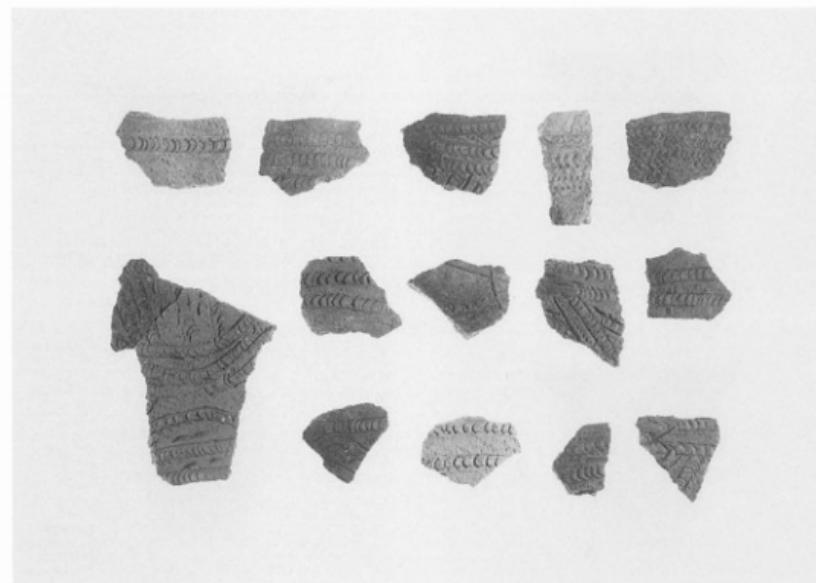
3. J-3号住居址出土の土器



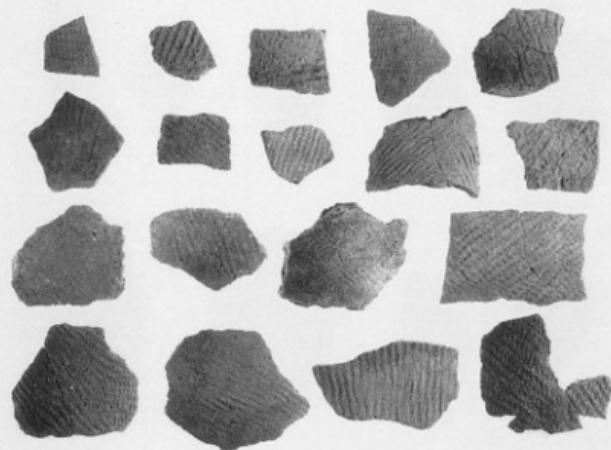
4. 繩文包含層出土の土器



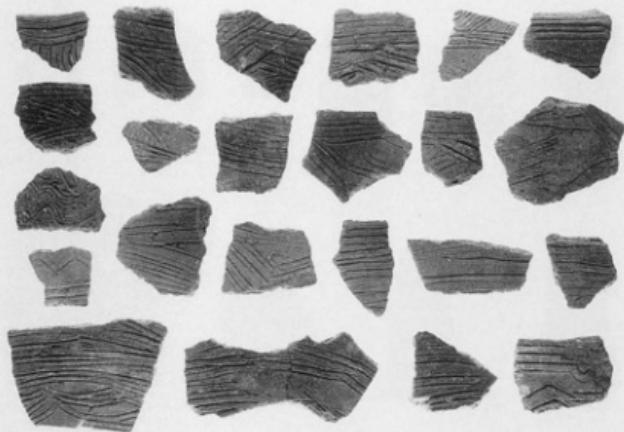
1. 浮線文系土器群



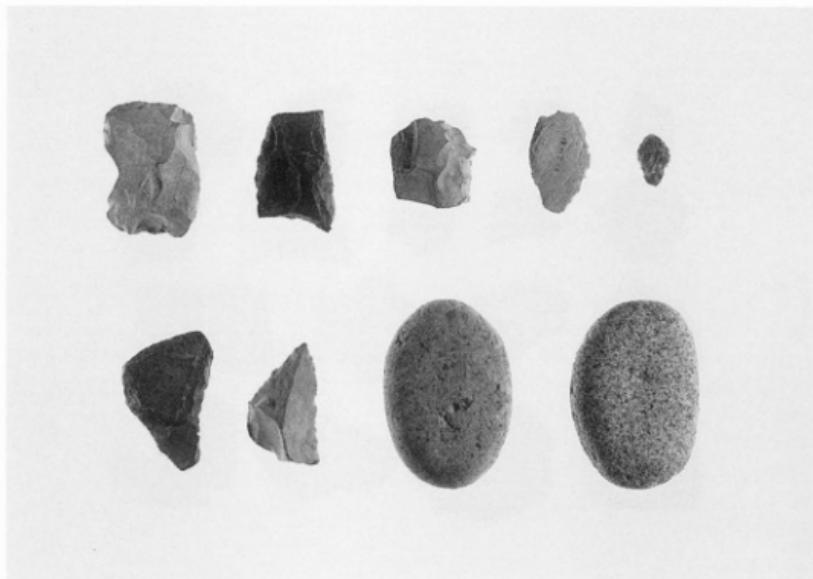
2. 竹管文系土器群



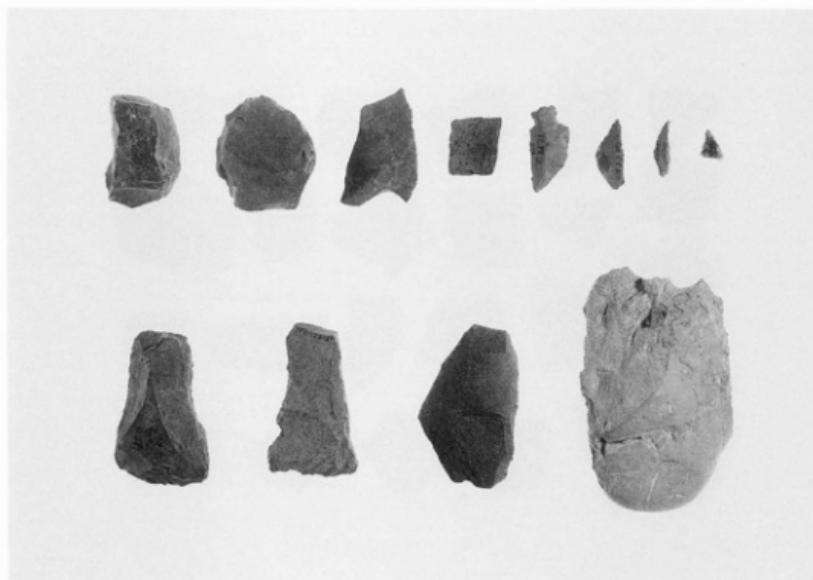
1. 繩文系土器群



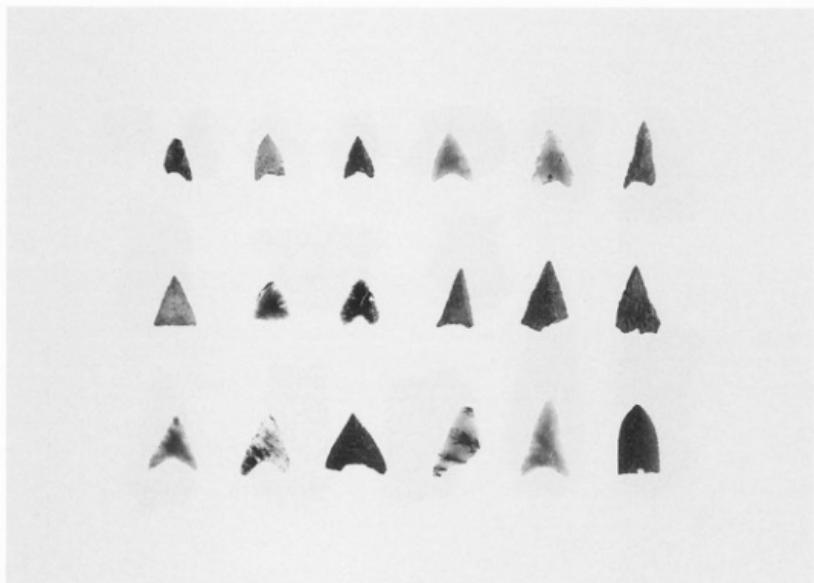
2. 沈線系土器群



1. J-1号住居址出土の石器



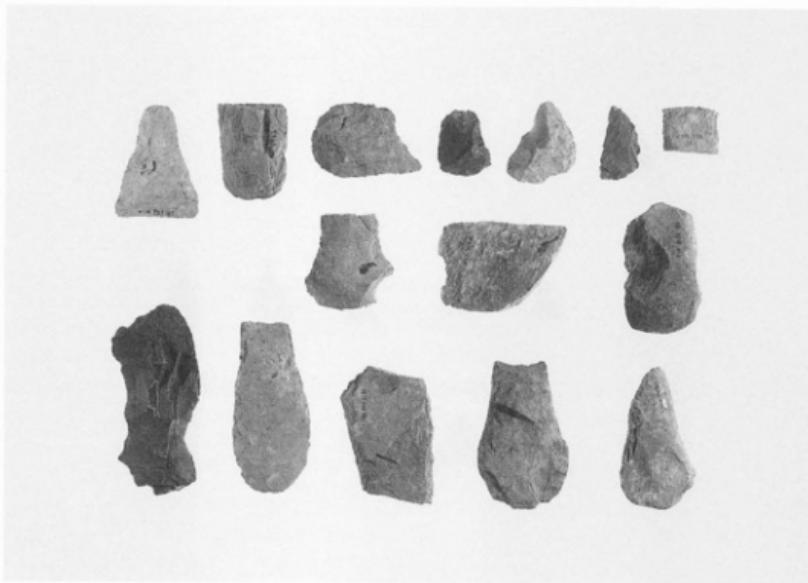
2. J-2・4号住居址出土の石器



1. 石 鐛 類



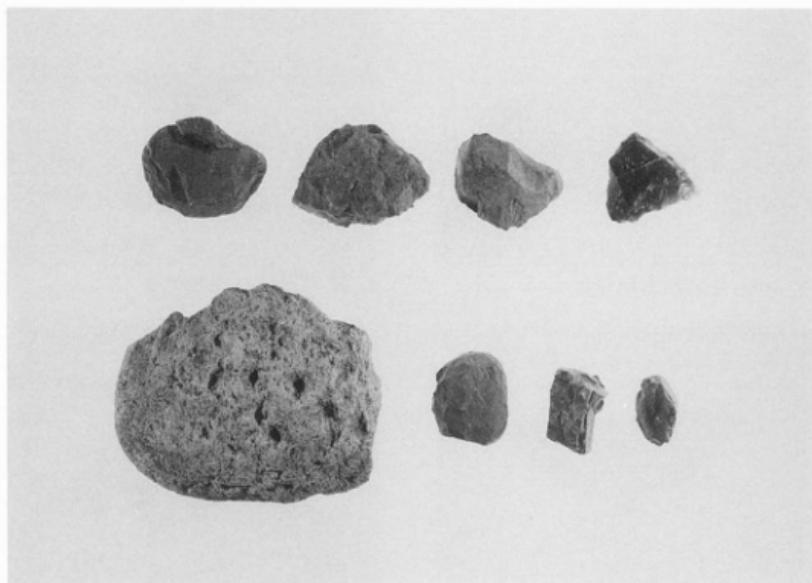
2. J - 3 号住居址出土の石器



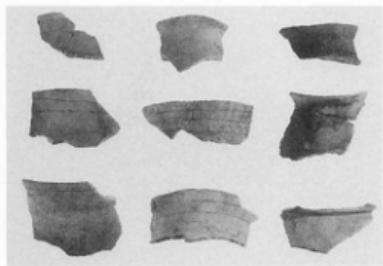
1. 打製石斧類



2. 磨石類



1. 碓器・蜂巣石類



2. 土師器口縁部



3. I E 21 H-1号住居址出土の土器



4. H-1号住居址出土の土器



5. H-1号住居址出土の土器



1. H-1号住居址出土の土器



2. H-6号住居址出土の土器



3. H-6号住居址出土の土器



4. H-6号住居址出土の土器



5. H-8号住居址出土の土器



6. H-8号住居址出土の土器



7. I-1号井戸出土の土器



8. I-1号井戸出土の土器



1. I-1号井戸出土の土器



2. D-21号土坑出土の土器



3. M-1号古墳丘下出土の土器



4. M-1号古墳丘下出土の土器



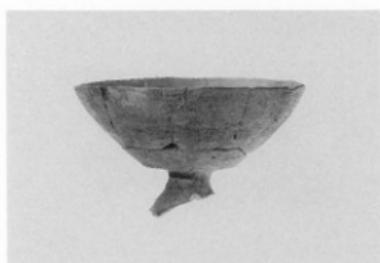
5. M-1号古墳丘下出土の土器



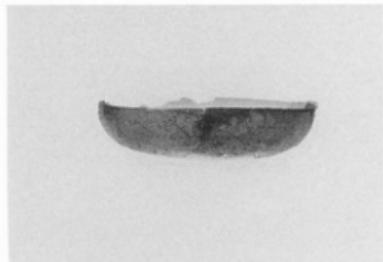
6. M-1号古墳丘下出土の土器



7. M-1号古墳丘下出土の土器



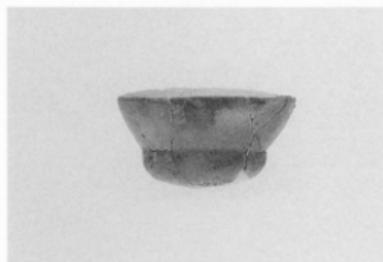
8. M-1号古墳丘下出土の土器



1. M-1号古墳丘下出土の土器



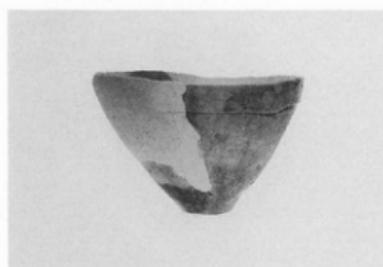
2. M-1号古墳丘下出土の土器



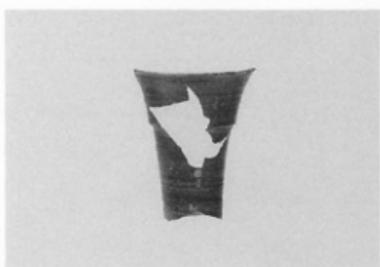
3. M-1号古墳丘下出土の土器



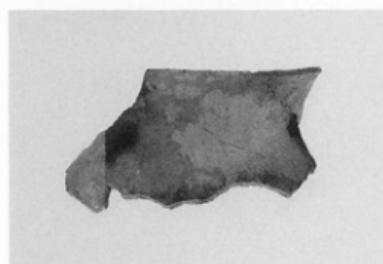
4. M-1号古墳丘下出土の土器



5. M-1号古墳丘下出土の土器



6. M-1号古墳前庭部出土の土器



7. M-1号古墳丘下出土の土器



8. M-1号古墳丘下出土の大壺

調査要項

遺跡名稱	横俵遺跡群(よこだわらいせきぐん)
	大追遺跡…63・1 E14 中横俵遺跡…1 E17 上横俵遺跡…1 E18 熊の穴遺跡…1 E19 大久保遺跡…1 E21
遺跡所在地	群馬県前橋市西大室町57-2番地他
調査期間	平成元年4月26日～平成元年11月30日
調査面積	試掘対象面積：50,000m ² 発掘調査面積：24,000m ²
開発面積	550,000m ²
調査原因	荒廃工業団地造成
調査依頼者	前橋工業団地造成組合 管理者 清水一郎
調査主体者	前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 二瓶益巳
事務局	事務局長 福田紀雄 事務局次長 漢田博一 財政係員 内田由治郎 関根吉晴 松本卓一 庶務担当 須田陽子 阿藤孝子 須田みづほ
調査担当者	勝倉秀一 郡所敬尚
調査参加者	阿部こう 阿部シゲ子 阿部吉子 飯島いし 飯島民弥 飯島実 石倉操 石闇秀男 石田いつ 石田博子 石鶴信雄 伊藤茂次郎 岩崎春美 岩丸幸恵 大川きよ 小沢和代 萩合高男 小保方泰五郎 鹿沼かほる 鹿沼芳一 木村かく乃 木村君子 木村源次郎 木村はる子 桐谷秀子 久保田薄一郎 小島勝雄 小島豊子 近藤三代 齋藤重美 斎藤まき子 佐藤恵子 萩崎まさ子 菅田フル 鈴木民江 須田みづほ 関匠子 高橋正雄 多田啓子 田中善四郎 田中義隆 田村愛子 田村よしの 長岡憲治 中沢敏雄 林むらを 原鳥なか 深町真福 鳥居逸司 蘿生良子 松倉りつ 松本孝之 村山せん 村山ふで 村山松子 嶋岸あや子 茂木順 茂木幸江 山口きく枝 山口里江 吉田真理子 吉本千保
調査協力	群馬県教育委員会文化財保護課 群馬県埋蔵文化財調査事業団 前橋工業団地造成組合 飯島静男 飯塚誠 井上唯雄 加部二生 岸田治男 桑原昭 小島敦子 小島純一 高野繁 高山茂明 口田正美 伊達宗泰 中野覚 西田健彦 原田和博 松田猛 若狭徹 織賀綾子 山武考古学研究所 シン航空 スナガ環境測設 株式会社測設 大洋航空 たつみ写真スタジオ プラス株式会社

横俵遺跡群 I

平成2年3月20日 印刷
平成2年3月30日 発行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

前橋市上泉町664-4
TEL.0272-31-9531

印刷 株式会社 前橋印刷所

